贈り人形

小早川雪乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
贈り人形

【Ｎコード】
Ｎ７２９１Ｏ

【作者名】
小早川雪乃

【あらすじ】
白帝と少女の人生――――擦れ違い。
痛い作品です。
好き勝手書いています。

一

（煩わしい）

一人の男が苛立ちながら、後宮の凛とした檜の長い廊下を歩いていた。

男の名は久茨（ひさし）。

長身で引き締まった体格。肩まで伸びた漆黒の髪は美しく、一分一厘の狂いもない端整な目鼻立ち、そして玲瓏な紺青の瞳。

完璧すぎるその姿は見る者を惑わし天からの贈り物と称されている。

久茨は、ここ西国（せいごく）の帝の第一皇子にして、皇太子の身分にある。

西国とはその名の通り世界の西に位置する国で、四皇帝の一人である白帝（はくてい）が統治している、商業が発展した豊かな国だ。

四皇帝とは次元を隔絶した絶対的な霊力をもつ四つの皇家の長達で、代々、白帝、黒帝（こくてい）、炎帝（えんてい）、舜帝（しゅんてい）と名乗っている。

そして久茨は霊力がすべてといわれるこの世界で、史上最強と称えられるほど有り余る高い霊力を所持していた。

その所為で農民から貴族に至る全ての西国民に神のように崇められ、自身の父にも母にも敬譲されている。

この世界は、舜帝が支配する東国（とうごく）、炎帝が支配する南国（なんこく）、黒帝が支配する北国（ほっこく）、そして白帝が支配する西国（さいごく）の四つの国が、それぞれ一の国の称号を求め争っている。

各国いつ戦争に勃発してもおかしくない状況の中で、それぞれの国民は暮らしていた。

そんな中で、それぞれの帝は、自身を軸にして、高位霊力者の貴族や皇族とともに、それぞれ自国に結界をかけ、国を護っている。

そのため、国民は、それぞれ自身の国の帝を崇拝していた。

護って貰えていることに。

今生きていられる事に。

何故そこまで大仰に崇拝するのかというと、それはこの世界の歴史に遡る。
理由は千年前、太帝(たいてい)が支配する央国(おうこく)が、南国によって滅ぼされた事に所以する。
千年前は四国四皇帝ではなく、五国五皇帝が存在し、この世界も五分割されていた。
その五国の中でも央国は、第一とされる程の強国だった。
そして覇権争いの中にあっても、他の四国は、央国にだけは戦いを挑む事をしなかった。
しかし、央国は無残に消滅した。
南国の侵略によって。
何故、最強と謳われていた央国が滅ぼされたのかというと、その当時、央国の皇族の中に、霊力に優れた跡継ぎが生まれなかったからだった。
霊力の弱い帝をもった央国は、しだいに国の結界が弱まっていた。
そして、その央国の隙を知った、南国の当時の五皇帝の中で、一番霊力が強いと謳われていた三十五代目炎帝が、大軍を引き連れて央国に攻め入ったのだ。
いくら強硬な霊術者が揃っていても、帝の霊力なくしては、国土の結界を維持できず、また帝の加護も無い無防備な兵達と、炎帝の加護を受け、その身に結界を纏った兵達とでは、戦局はどうなるか明らかだった。
そして央国は滅んだ。
その戦いはもはや、戦争と呼べるものでは無かっと言い伝えられている。
一方的な虐殺だったと。
南国の軍勢は、央国兵士はもちろん、そこに住まう略全ての人々を皆殺しにした。
そして央国と太帝家は滅び、五国五皇帝から現在の四国四皇帝になったのだ。

その後央国の領土を得、国土を広げた南国は次第に力を増していった。
その事が世界を震撼させた。
あれ程の強国が滅ぼされた事に。
国土を広げ、勢力を伸ばしていく南国に。
そしてそれ以来、それぞれの国の民は、以前以上に、自身の国の帝に高い霊力を求めるようになった。
加護を求めて。
そして、それぞれ他の三国が、南国に怯え続け、南国に屈服したような暮らしを強いられていた。
そんな時久茨が生まれた。
その事に南国はもちろん、他の二国をも震撼させた。
歴代五皇帝のうち、最も強い霊力を持っていたと伝えられている、初代白帝。
それを凌ぐ程の霊力を持った麗しい御子の誕生に。
その御報に、西国の国民達は歓喜した。
南国に怯える心配がなくなったと。
護って貰えると。
南国より強くなったと。
その報は、他の三国に脅威を抱かせ、国々の緊張感は著しくしたが、西国の国民は昼夜問わず、毎日祝宴や祭りを開くほどに歓喜したという。
そして、西国の全貴族、全国民の推薦を受けて、その当時、皇太子の身分に就いていた、今白帝（久茨の父）の弟をその位から廃し、まだ乳飲み子だった久茨を立太子させた。
その式典は、歓喜した人々で満ち溢れていたという。
その霊力で護って貰える。
第一の国の力を得たと。
実際久茨が生まれてから、西国は安定し、他国との諍(いさか)いが一切無くなったという。

そんな中で、久茨は掌中の珠のごとく育てられた。
誰も久茨に逆らう者などいはしない。
久茨はそれが不満ではなかった。
しかし常に埋まらない充足感に弄ばれていた。
（煩わしい）
切れ長の紺青な目を怒りに光らせながら、延々と続く長い廊下を渡り、父の住む大鳳殿（たいほうでん）を目指した。
久茨の父、六十代目白帝に呼び召されたからだ。
久茨は父の事を嫌っていた。
自分よりも霊力がない、浅ましい存在だと。
六十代目白帝は、決して歴代の帝に劣る存在ではなかった。
だが、史上最強と称えられる久茨にしてみれば、その存在は赤子同然のようなもので、その赤子のような存在が自分の上に立っている事が、酷く煩わしく感じさせた。
煩わしい原因は他にもあった。
その当時、周りの貴族達が、現白帝を早く譲位させようとする動きがあったのだ。
理由は、現白帝より遥かに優れた霊力を持つ皇太子を、早く即位させたほうが国の為になるという事だった。
その話は皇宮に広がっていた。
そしてそれは、皇宮内の噂にだけに留まらず、貴族達は、父にそう促し出した。
しかし、父は譲位しようとはせず、その地位に縋りついていた。
そのことが、久茨を更に煩わしく思わせた。
身の程知らずの、愚かな存在だと。
久茨は帝になりたいと願っていた訳ではない。
けれども、物心付く前から、周りに崇められて育ってきたので、その自分より上の存在がいることが、酷く久茨を煩わしくさせた。
その唯一上の存在が、あのような赤子ごとき愚か者だということが、久茨は許せなかった。

一（後書き）

初投稿です。
自分の処女作です。
感想意見、よろしくお願いします。

二

先程、父の使いの女官から呼び出しが来たときも、久茨は直に断り、使いの女官を手荒に追い返した。

しかし、帰った筈の女官がまた戻ってき、父が強く望んでいる、と言ってきた。

それなら己が来い、と久茨は憎らしげに思ったが、内情の関係はともかく、現在、相手は自分より上の地位にあるので、催促されれば赴かない訳にもいかず、渋々重い腰を上げた。

そして久茨は、父の使いの女官の先導で、大鳳殿（たいほうでん）に重い足を動かした。

（煩わしい。何故私があの男の元へ、足を運ばなければならないのか）

久茨はそう思いながらも、父のいる大鳳殿にまで辿り着いた。

大鳳殿の帝の座には、父と、見たこがない女が座っている。

この父、六十代目白帝は、常に女漁りをしていて、いつも違う女を側に置いている。

久茨はその女に、汚らわしいといった風に一瞥してから父に視線を向けた。

この男は三十前半で、まさに男盛りといった容貌だ。

認めたくはなかったが、端整な目鼻立ちをしていて、長身、無駄な脂肪も一切なく、若い男に負けない位の魅力があった。

性格はどうあれ、その容姿に後宮の女官達はこの男に恍惚している。

男は新しい女の肩に腕を回し、上機嫌に久茨を迎えた。

「皇太子よ、よく参られた。顔を合わすのは久方ぶりですな。父は嬉しいぞ」

そう言って六十代目白帝は上機嫌に笑った。

男は常に久茨に敬譲して接する。

内心では自分の地位を奪う存在として嫌悪しているだろうが、自分から史上最強と謳われる御子が誕生したことが、自慢でもあるようだ。
その為男は、自分が久茨の実父である事をいつも鼻に掛け、久茨のいい父親顔をする。
久茨はその事に嫌悪しているが、礼儀上頭を下げた。
「そう畏まられるな。貴殿は私の息子ですぞ。私と貴殿の仲で遠慮など無用だ」
この男に息子と言われても、久茨は憎悪するだけだ。
久茨はこの男を父と認めた事は一度もない。
昔から、早く消えてくれと願うほど嫌っている。
久茨は早くこの場を立ち去りたいと思い、男に用件を促した。
「白帝、私に何か用件があったのでは？」
父と呼ばないのは父と認めていない理由からではなく、立場上のものだ。
二人は父子である前に、君主と臣下に当たるのだ。
男は久茨の苛立ちを感じ取り、少し焦りを見せた。
「貴殿に贈りたいものがあってな。あれだ」
そういって男は少し開かれた襖に視線を走らせた。
久茨もそこに視線をやると、そこにはまだ十にも満たないだろう少女が座っていた。
朱色の小袖に、四季の花鳥柄を撫子や紫で金加工された白い打掛を纏っている。
その姿は幼い姿に似合っていない。
「あの子供は？」
興味をもった訳ではないが、取りあえず尋ねる。
「あの娘は綏（スイ）といってな、藤白（ふじしろ）の一人娘だ。孤児になったあれを最近此処に引き取ったのだ。まだ子供だが、あの藤白の娘だ。いずれ美しい女人になるだろう。あれを貴殿に進上したいと思ってな」
久茨は憎悪した。

藤白とは名高かった漫遊の舞妓で、その美しい容貌に惚れ込んだこの男が無理やり手籠めにし、最後には飽きて殺した女のことだ。
この男は節操なく色々な身分の女に手をだしていた。
后妃や女御といった有力貴族出身の妻である者達は、その者達の後ろにいる実家に遠慮があり長く大事にしていたが、その他の低い位の女官や、外から招いた舞妓や遊女といった者達は遠慮するものがない　為、好き放題にやっている。
男はいつもそんな身分の低い者達を暫くの間は寵愛するものの、直に飽きて捨てていた。
後宮から追い出すだけの時もあれば、その場で始末することもある。
藤白も始末された一人だ。
自分が始末した舞妓ごときの娘を私にくれてやるとは。
久茨は黙ったまま男を睨んだ。
その容貌に恐れた男はあたふたしながら言葉を施した。
「只の戯れですよ。この前差し上げた女が気に入らない様子だったのでな。これなら育てる楽しみもあって良いだろうと思ったのだが。気に入らぬか？」
この前差し上げた女とは夫に先立たれた若い未亡人の事だ。
この男は事あるごとに久茨に女を紹介してきた。
帝や皇太子は、行事などの例外を除いて宮中を出る子とは叶わない。
その為、相手にする女は後宮に嫁いだ妻達や女官だけとなる。
しかし女官に手を出すと醜聞が流れるので、何も喋らないと金で契約された女を周りの者が用意するのだ。
歴代の帝や皇太子も、そうして好き放題楽しんできている。
久茨は十五歳で、普通なら妻の一人でも娶っている年齢だったが、妻を娶ればその女と自分、どちらかが死ぬまで一生を共に暮らさなければならない。
そう思うと鬱陶しく、久茨は降る様な縁談をすべて断っていた。

そんな久茨を心配した乳母達が、都で評判の女達を用意してきた。
妻を娶らないからといっても、久茨は女に興味がない訳ではない。
乳母達が用意した後腐れない女で、それなりに遊んでいる。
しかしどの女も直飽き、一度も囲うことなく、すぐに後宮を追い出していた。
この飽き性は、恐らくこの男に似たのだろう。
久茨は苦々しく思う。
この男の血が自分に流れていることに。
久茨は乳母達が次々と用意する女とはそれなりに遊んでいるが、この男が連れてくる女には、どんな美人だろうと久茨は一切手をだす事はなかった。
この男の息のかかった女は、全て汚らわしいのだ。
久茨は蔑すんだ表情で、男の連れてきた新しい少女を観察した。
少女は黙って俯いたままだ。
肩で揃えられた漆黒の髪は綺麗に整えられており、肌は白粉(おしろい)を塗っているのか血行が感じられない程白く、小さな唇には鮮やかな紅(べに)が差されている。
着飾られ微動すらしないその姿はまるで人形だった。
(汚らわしい)
久茨がそう思いながら観察していたとき、微かに少女が動いた。
そして伏せられていた瞼が徐々に開きだす。
徐々に開かれた隙間から現れたのは、妖しいまでに美しい、大きな紫の瞳だった。
水晶を連想させる澄んだ瞳に、久茨の視線が止る。
久茨は人に見惚れたことなど一度もないが、この時確実に、少女の瞳に見惚れていた。
「どうだ、皇太子。気に入らんか?」
久茨が黙って少女の瞳に魅入られていると、男が残念そうに尋ねてきた。
久茨は気に入らぬと言おうとしたが、言葉を飲み込んだ。

何故か言えなかった。
男の紹介してくる女など、久茨には全て汚らわしい。
ここで気に入らぬと言えば、その汚らわしい女から解放される。
しかし久茨は、この少女に汚らわしさは感じなかった。
汚らわしいどころか、清涼な水のように澄んで見える。
幼すぎる年齢の所為だろうか。
久茨はこの少女をどうするか思考した上、自殿に連れて帰ることにした。

三

久茨は少女を引き連れて、長い檜の廊下を歩み自身の殿舎である昭洸殿（しょうこうでん）に向かっていた。

少女との間に会話はない。

沈黙の中、少女は黙って久茨の後ろを付いてくる。

だが、久茨が普通に歩いていても、歩幅の違いの所為で、少女は付いて来られないのか、直々小走りがちになっている様な足音が、久茨の後ろから聴こえてきた。

（はしたない）

久茨は思った。

後宮の優雅で教養のある者達に囲まれて育った久茨は、その荒々しい足音が耳障りで仕方なかった。

それで仕方なく歩みを緩めると、ようやく少女の足音が落ち着いた。

暫くそのまま歩いていたが急に後ろからバタっと、何かが倒れた音がした。

久茨が歩みを止めて、ゆっくり後ろを振り返ると、少女が倒れている。

（転んだのか）

久茨は呆れながらも、只黙って少女が起き上がるのを待った。

しかし少女は起き上がる気配を見せない。

「起きろ」

久茨は苛立ち少女に命令した。

少女は返事をしない。

それどころか更に顔を突っ伏せ体を震わせている。

そこになって久茨は、少女が自分の霊気に押し潰されたのだと分かった。

久茨には自分より霊力のある者がいないため、その霊力に押し潰

されるという事が、どれほどのものなのか体験した事はない。
しかし全身を重い鉛で潰され、内臓が破裂するくらいの痛みに苛まれるのだと、話に聞いて知っていた。
その為常人を逸している久茨は、普段よりできる限り抑えている。
しかしこの少女は、その抑えている霊気でも耐えられなかったようだ。
そういえばこの少女から全く霊気は感じられない。
抑えているといった感じではなく、本当に霊力がないようだ。
暫く倒れている少女を眺め、そんな事を考えてから、久茨はこのまま少女を捨てて一人で殿舎に戻ろうと思った。
しかしその震えている小さな姿が、何故か久茨にそうさせる事を拒ませた。
仕方なく久茨は、神経を研ぎ澄まし、霊力を極限まで抑える。
しかし少女はまだ震えて起き上がろうとしない。
「さっさと起きろ」
苛立った口調で再び命令した。
少女はその強い口調に体をびくつかせ、恐る恐るゆっくりと上半身を起こす。
しかし上半身は起こしたものの足が震えており、その為立ち上がれないのか、座ったままだった。
（歩くこともできないのかこの子供は）
久茨は再び少女を捨て、さっさと帰ろうと思った。
だが少女の幼い顔に浮かぶ妖しい紫の大きな瞳が、久茨にそうさせる事を許さない。
久茨は立てないでいる少女の腕を掴み起き上がらせると、そのまま抱き上げた。
（———軽い）
まだ幼い小さい体なのだから軽いだろうと分かっていたものの、想像以上に軽かったのでの、久茨は少し驚いた。
（食事をとっていないのか？）

軽い疑問を浮かべたが、直にそんなことどうでもいい事だと考え、久茨は歩き出した。
抱き上げられた少女は驚き、久茨に抵抗の色を見せたが、直に諦めたのか、俯いてその身を久茨に任せる。
この時、久茨は自分の行動に驚いていた。
普段から久茨は、他人に情けを掛けることはしない。
人が倒れていようが、血を流していようが、そのまま見捨てて過ぎ去るような男だ。
倒れていた少女を、それもあの男から譲り受けた嫌悪するような少女を抱き上げるなど、久茨自身信じられない行動だった。
久茨は自身の行動に驚きながら、腕に収まっている少女を見た。
少女は俯いたままだ。
白粉を塗っていると思った肌はどうやら地肌だったらしく、目の下に青い熊がくっきりと浮かび上がっている。
何か塗って艶を出していると思った髪も、何も付けておらずサラサラしている。
化粧をしているのは口紅だけだった。
化粧っ気のないその顔はただの子供だ。
だがその幼い顔に浮かぶ妖しい紫の瞳が、不思議とこの少女を大人びて見せていた。
再び久茨はその瞳に魅せられたものの、久茨はこの少女を平均程度と格付けた。
実際少女は、平均以上の可愛い面差しをしていたが、麗しい女人を見慣れた久茨にとっては、取り立てて可愛いいとは思えなかった。
「お前、名を綏とかいったか。いくつだ」
ふいに質問した久茨に少女は驚いたのか、黙って俯いていた顔を勢いよく上げた。
「…八つです」
少女は小さな声で答える。
久茨はその答えに少し驚いた。

少女の背丈から、もっと下だと推測していたのだ。
どうやら成長が遅い体質らしい。
「母親以外の家族は」
久茨が質問を続けると、少女は再び俯いた。
「…いません。父は私が生まれる前に死んで…、だから私の家族は母さんだけで…」
少女の瞳から涙が流れた。
「――――母さん白帝に斬られて…、血が、すごい噴出して、私どうすることもできなくって…」
そして手で顔を覆い、肩を震えさせながら、泣き出した。
あの男、娘の前で殺したのか。
藤白が始末されたのは、一月程前だ。まだ傷は深いだろう。いくら月日が経っても傷が癒えるとは思えぬが。
同情までいかないが、哀れな少女だと久茨は思った。
「他に親族は」
久茨は泣き続ける少女に静かに尋ねる。
少女は手で顔を覆ったまま首を振った。
久茨はそれに苛立つ。
不敬なその応対にではない。
普段ならいくら子供でも、不敬な対応をした者には容赦なく処罰を与えている。
しかし最近母親を目の前で殺され、肩を震わし泣き続けるこの少女には、そんな感情は浮かばなかった。
苛立ったのは少女に頼る親も親族もいないという事にある。
久茨が少女を連れて来たのは閨に侍らす為ではなかった。
ここまで幼い少女を抱く趣味など久茨にはない。
唯、澄んだ少女をあのまま男の傍に置いておくのが汚らわしく思えたのだ。
節操のない男だ。
久茨が受け取らなければ自分の手籠めにするのは目に見えている。

何故かそれは厭だった。
澄んだ瞳をあの男に汚されるのが。
しかしそれも気紛れだ。
強い意思があって連れて来た訳ではない。
少女が殺されようと穢されようとどうでも良かったが、余りいい気がしなかったので引き取っただけだ。
連れて来た理由は、抱くためでも面倒を見るためではない、少女と縁のある者に送ろうと思ったからだった。
しかし、親族もいないとなると。
ただ門の外に追い出せばいいだけのこと。
そう思ったものの、何故かこの少女が野たれ死ぬ様を考えると、心が締め付けられた。
「他に知り合いの大人は」
再び少女は頭を振る。
久茨は思い出していた。
藤白が漫遊の舞妓だったことを。
一定の住まいを持たず、気の向くままに各地を渡り歩いていたから、深い付き合いの友人はいなかったのかもしれない。
久茨は気が滅入った。
しかし泣き続ける少女に、それ以上質問する事が躊躇われ、そのまま黙って歩いた。
久茨が自室のある昭洸殿に辿り着いた頃には、少女も少し落ち着いていた。
「お疲れ様で御座います」
出迎えたのは乳母（めのと）の汐路（しおじ）だった。
「ああ」
常日頃、久茨が父の事を嫌っているのを一番知っている汐路は、そう言って深々と頭を下げた。
そして汐路は、久茨の抱いている少女に目を向けた。
「――――久茨様、その子供は？」

「あの男に貰った」
その言葉に、教養があり、普段から滅多に表情を崩すことのない汐路が、愕然とした表情を見せた。
今まで何度かそういう事があったし、その度冷静に応対していた汐路だったが、つれて来たのが、まだまだ幼い子供だった事に驚いたのだろう。
「如何致しましょう？」
「――――取りあえず、このまま私の部屋に連れていく。これの部屋の用意を。出来たら直に呼びに来い」
「は？」
汐路は間の抜けた返事をした。
常に冷静沈着で、女官の鏡とまで称えられる汐路が、このような無作法な返事をする事は珍しい。
よほど驚いたのだろう。
久茨は父に押し付けられた女は、どんな妖艶な美女でも、即刻追い払うように汐路に指示していた。
それが、こんな子供を部屋に連れて行くと言ったのだ。
驚いて当然だろう。
「私はもう部屋に戻る。早くこれの部屋の手配を」
「か、畏まりました」
汐路の間の抜けた返事を後にし、久茨は自室に歩き出した。
終始黙っていた少女だったが、汐路の存在が消えたとき、久茨に話しかけてきた。
その瞳はもう完全に涙は止まっている。
「あ、あの久茨様。私なんかが、久茨様のお部屋に入ったら、お部屋が穢れます」
久茨はその言葉と表情に驚いた。
ただこの少女の置く場所が欲しかったので、自室に戻ると言っただけだったが、少なからず少女は、身を売られた男の部屋に行くことに怯えると思っていたのだ。

しかし少女の表情に怯えは全くなく、それどころか申し訳ないといった風貌だ。
この少女は身を売られるという意味を知らないのだろうか。
それとも自分が売られた事に気づいていないのか。
そんな事を考えたが、取敢えず少女に返事をした。
「構わぬ。部屋の用意が整うまでの、少しの間だ」
「――――ありがとうございます」
少女は本当に感謝している表情で言った。
久茨はその表情を不思議そうに暫く眺めたが、それ以上話しかけることはしなかった。
久茨の部屋は昭洸殿の奥南にあり、日当たりがよく、部屋から見える庭には、春の木々や花々が綺麗に配置されて植えられている。
一月の今は、季節ではないため花は咲かず閑寂だが、春になると目も覚めるほどの花々で華美に彩られた。
その庭に面する広い一室の畳の上に少女を降ろした。
少女の体はもう震えてはいなかったが、やはりまだ立てないようだ。
久茨は少女を降ろした後、自身も腰を降ろした。
「ありがとうございました。ここが久茨様のお部屋ですか？綺麗なお部屋ですね。調度品もすごく綺麗」
そう言って少女は部屋に置いてある、正絹西陣織の几帳や、松竹梅の屏風に目を走らせた。
その表情は嬉しそうだ。
先程まで母を思い出し、肩を震わせて泣いていた人物とは思えない。
久茨は嬉しそうな少女を見て、部屋に連れてきて良かったと思った。
「欲しいならやろう」
久茨は自然と言葉が出ていた。
その言葉に少女は、滅相もないといった風に頭を激しく振った。

「そんなつもりで言ったんじゃないんです。ただ、こんな豪華なもの見るの初めてで…。すみませんでした」
そう言って少女は頭を下げた。
「構わぬ。それより体は」
少女は久茨の言葉に安堵の表情を見せた。
「もう大丈夫です。楽になりました」
その言葉は嘘だと久茨は直に分かった。
少女の手が、時折震えていたからだ。
しかし、久茨はこれ以上霊力を抑える事が出来なかった。
史上最強といわれるその霊力は、久茨自身も上手く扱えないほどに持て余していた。
「――そうか」
「はい。それより私、これからここにお勤めするのですか？」
その言葉に久茨は呆れた。
やはりこの少女は、自分が売られた事に気づいていなかったのだと。
愚鈍なのか、よほど純粋なのか分かりかねたが、気づいていないなら、その方が少女にとっていいだろうと思った。
「否、お前のような身分の者は、下級女官にもなれぬ。身を寄せられる住まいが見つかるまで、暫く置いてやるだけだ」
その言葉に少女は表情を曇らせた。
「…はい」
そういう少女の表情は不安そうだ。
久茨は何故かその表情が哀れに思えた。
久茨は、何の身分も霊力も無いこの少女を、引き取ってくれる所があるのかどうか疑問だった。
少女もそう思ったのだろう。
母を殺され、頼れる大人のいないこの少女に、久茨は感じた事のない苦しさを覚えた。
「いつまでいても構わぬ」

考えるより先に言葉が出ていた。
久茨は自分に驚き戸惑った。
今まで久茨は、人に情けをかけた言葉など、人に投げ掛けたことなど一度たりともない。
それに、常に考えてから言葉を放していた。
先程この少女を抱き上げた時といい、今の言葉といい、私はどうかしてしまったのか。
久茨は自分に不安を覚え、常に冷静なその表情を曇らせた。
そんな久茨に少女は遠慮がちに話してきた。
「あの、直に出て行きます。だからその…、心配しないで下さい」
どうやら、久茨の表情が暗くなったのが、自分が此処にいつ居てしまう事を心配したものだと思ったらしい。
しかし、久茨は少女にその事を正さなかった。
「ああ」
酷く素っ気無くいった。
少女といると、自分が変わってしまう様な気がして不安になり、久茨はもうこれ以上、この少女と話したくないと思い出した。
「後で、ここに先程の女官がくる。私は仕事があるからもう行くが、お前はここで待っていろ」
「え？あっ、はい。分かりました」
突然の久茨の言葉に驚いた少女は、素っ頓狂な声で返事をした。
その声を後に、久茨は立ち上がった。
本当は仕事などなかったが、久茨はこの少女から離れるため、急ぎ部屋を去った。

四

その夜、久茨は自室の部屋に、乳母の汐路と二人でいた。
少女の様子の報告を受けたいたのだ。
久茨は少女に会おうとする事はなかった。
同じ殿舎にいると思うだけで不安だったし、早く追い出したいと思っていた。
しかし、何故か追い出すことが出来ない。
引き取り手など、本当は探せばいくらでも見つかる。
だが出来なかった。
汐路に聞いた話によると、少女は此処に住まい出した当初から、「タダでこんな豪華な部屋で暮らさ　せて貰うのが申し訳ない」といい、その部屋を出て、下級女官の住まう宿舎に移っていったそうだ。
そして下級女官の中でも最下級に位置する下仕（しもつかえ）（雑用女官）にまじり、朝から晩まで働いているらしい。
下仕の女官の仕事など、掃除や洗濯、あらゆる雑用を押し付けられる力仕事ばかりだ。
久茨はその事が気にかかった。
あの小さくか細い少女が、そんな仕事をこなせるのかと。
そのため久茨は、下級女官の仕事などに一切関わりのない、正二位の称号をもつ上臈（じょうろう）女官の汐路に探りを入れさせて、しばしばその様子を報告させている。
汐路の話によると、後宮に仕えている事を誇りに思っている下級女官達との間に、少しばかり溝が見られるものの、頑張って働いているとの事だった。
しかし、少女は相変わらず女官達とは馴染めず孤立しているものの、二月程前から、仲の良い同じ幼友達が出来、今は楽しそうに暮らしているらしい。

その事に久茨は少し安堵した。
「あんな小さな細い体で、汗を流しながら一生懸命働いていらっしゃいますよ。長女（おさめ）（下級女官長）も良く働く良い子だと褒めていました」
綏は一月程前、長女に見込まれて、正式な下級女官に迎えられていた。
久茨はそのことに不安を募らせていた。
このままずっと此処で暮らすのかと思うと、不安と嫌悪感も持った。
あの妖しい紫の瞳の少女が、まだ自分の近くにいる事が、酷く不安で不快だった。
「最近は、私の事に気づくと、可愛らしい笑みを浮かべながら話し掛けて下さるようになって。久茨様にもう一度ちゃんお会いして、お礼を申し上げたいと言っていました」
「会う必要はない」
「ええ。しかし此方にお勤めしているのだから、またお会いする機会があるやもしれません。その時はお声を掛けて差し上げて下さいませ。きっと喜びます」
汐路は綏の肩を持った。
その事に苛立ちを覚えた久茨は、汐路をこの場から下がらせた。
汐路は「畏まりました」と言い、深々と頭を下げた後、絹擦りも優雅に早々と出て行った。
そして一人になった久茨は、気分を変えるため部屋を抜け出し、夏の木々か植えられている吉祥殿（きっしょうでん）の庭に足を伸ばした。
吉祥殿の庭は唐様であり、赤い皐月など夏の花々が閑静に咲いている。
今の季節は後宮で一番風流の漂う場所だ。
夏の涼しい夜風が、久茨の美しい漆黒の髪を揺らす。
久茨は鮮やかな満月を見上げ、心からあの少女を追い払おうとした。

何故私があんな卑しい子供の事で、これ程神経を使わなければならぬ。
煩わしい。
だが追い出す事はしたくない。
久茨は少女がここに居る事に、煩わしいと思うと同時に、不思議と安堵している。
ここを追い出せば少女がどうなるか考えるだけで、心が痛んだ。
追い出せば、もう汐路の報告でその様子を窺い知る事が出来なくなる。
久茨は少女に下仕の仕事などさせたくはなかった。
あの体で、汗を掻きながら働いている所を想像すると、酷く辛かった。
倒れてしまうのではないかと。
その為、汐路にあれを止めさせるように指示した事がある。
しかし、少女は頑として譲らなかったらしい。
自身が赴き止めさせようと考えたが、会うことは躊躇(ためら)われた。
またあの不可解な衝動に駆られるのが厭だった。
その為、少女を放っておいたが、心配でたまらなかった。　そして、こんな風に思う自分もまた心配だった。
その時、久茨の居た庭に一人の小さな影が写しだされた。
その影は久茨を向きながら、微動だにせず佇んでいる。
「久茨様？」
その影が久茨に向かって問い掛けてきた。
その声は、少女綏のものだと久茨は直に分かった。
一度しか会ったことのない、それも殆ど言葉を交わしたこともない、しかし耳から離れなかった愛嬌のある幼子の声。
「久茨様でしょう？何故こんな所に？」
少女は足を震えさせ、ヨタヨタと久茨に近づいてきた。
久茨はとっさに霊力を抑える。
久茨は少女の登場に内心焦りながらも、無感情な声で答えた。

「此方の殿舎の庭は、今季節で美しいから、花見に少し足を運んだだけだ」
「そうですか。お会いするのはお久しぶりですね。実は私、ずっと久茨様にお会いしたいと思ってたんです。ちゃんとお礼しなければと思っていて。こんな所でお会い出切るなんて夢にも思っていませんでした」
そう言いながら少女は、既に久茨の直前まで来ていた。
鮮やかな月明かりの下で、少女の顔がはっきりと映し出される。
以前、父に着飾らされていた豪華な衣装と違い、今は下仕指定の装束である、質素な無地の二藍（ふたあい）の小袖を着ている。
その出で立ちにも関わらず、久茨は少女に釘付けになった。
目を放す事ができない。
「あの節は、有難う御座いました。私の事をここに置いて下さって、本当に感謝してます。私今、下仕の女官をさせて貰ってるんです。久茨様はあまり嬉しくはないでしょうが…。でも私、仕事は出来る限りさせて頂きます。だから、このままここで働かせて貰ってもいいですか？私行くところがなくて…。甘えている事は重々承知です。でも…」
「女官になったのであろう、何の遠慮がある。堂々としてればいい」
久茨は少女に下仕の仕事などさせたくなかったが、少女が望んでいるなら仕方ないと諦めた。
「有難う御座います！私一生懸命働かせていまだきます！」
少女の声と表情は明るくなった。
そして手を胸の上で組んだ。
その時二藍の袖が落ち、少女の細く白い肌が露わになった。
久茨はそこに目を留めた。
生々しい、火傷のような怪我があったのだ。
手当てもされず、剥き出しの腕には、皮膚が焦げ、肉も抉られたようになっており、まだ血が流れ出していた。
今しがた負ったものだと分かる。

久茨は目を細めながら、少女のその腕を捕った。
「この焼け跡は？」
久茨に腕を捕られた少女は、口ごもりながら答えた。
「仕事中に熱湯を被ってしまって…」
熱湯を被っただけで、これ程になる筈はない。
久茨は右腕にある焼け爛れた傷口に手をあてた。
少女は痛みを訴え、体をビクつかせたが、そのまま受け入れた。
「誰に、やられた」
「え？」
「傷から微かに霊気が残っている。誰にやられた」
少女はその言葉に落ち着きを失くし、うろたえたが、久茨はその少女を睨み目で言葉を促させた。
少女は話したくなさそうに、顔を背ける。
久茨は、命令しているのだと分からせるため、焼けた傷口を軽く握って痛みを与えた。
「…っ」
少女が耐えられないといった風に、顔を歪ませる。
「――…誰に、やられた」
久茨は出来るだけ静かに言った。
少女は、困惑した面持ちだったが、暫くして諦めたように重い口を開き出した。
それと同時に久茨は少女の腕を解放する。
「同じ下級女官の方に…。私の所為で長女様（おさめ）にお叱りを受けたと」
少女の話しによると、下級女官の中で中流に位置する半物（はしたもの）達に、その半物達がする筈の仕事、上級女官である下臈（げろう）の部屋の掃除を任せられていたが、その時過って手を滑らせ、下臈女官の置いていた着物の上に灯油を零してしまった。
そして、その事が長女の耳に入り、その仕事をしていた筈の半物が叱られた。
その怒りが少女に向けられ、霊撃を撃たれたという事だった。

久茨は苛立った。
この少女に、罰をあたえられる理由など何処にもない。
押し付けた当人が悪いだけだ。
それを――――。
久茨は少女の腕に霊力で治癒を施そうと、掌に白い光を固めた。
その時。
「厭！！」
少女は震え上がって叫び、その腕を久茨の掴んでいた手から引っ込めた。
久茨は驚いて、離れた少女を見る。
少女は、その場に腰を抜かし崩れていた。
無理矢理引っ込めた腕の傷と、傷を掴んでいた久茨の掌の摩擦で、痛みが増したのか瞳に涙も溜めている。
「――――どうした」
久茨は呆気に盗られて、滅多に出さない驚いた声で尋ねた。
少女は震えている。
「ま、また、霊撃を…」
久茨は納得した。
少女は霊力がないのだから、霊術のことは良く知らないはずだ。
だから、また撃たれると思ったのか。
ここまで怯えるとは、よほど怖い思いをしたのだろう。
そう思うと、久茨はますます憎悪した。
少女に怪我を負わせ、恐怖をうえつけた女官に。
その女官を殺してやろうと思う程に憎悪した。
久茨は崩れ落ちている少女の側に、自身も膝を降ろした。
「同じ霊術でも霊撃ではない。傷を治す為のものだ」
久茨はきょとんと目を丸めている少女の腕を取り上げ、そこに治癒を施した。
少女は少し震えたものの、次は黙って久茨に腕を預けた。
「くすぐったい」

そう言って少女は笑い出した。
「もう終わる、我慢しろ」
「は、はい。でも本当にくすぐッッ」
少女肩を震わせながら笑っている。
少しその表情を眺めてから、久茨はまた腕に目をやった。
「――終わった」
少女の白い腕は、もう右と左どちらに傷があったのか分からない程完治していた。
「すごい…」
少女は霊術の治癒を受けたことがないのか、物珍しそうに自身の腕を眺めていた。
「有難う御座います。何てお礼をしたらいいのか…本当に有難う御座います」
少女は頭を下げた。
「構わぬ。だが、もう仕事は辞めろ」
「え？」
「宿舎からも出て、昭洸殿に移れ。直に部屋を用意させる」
少女は驚愕の色を見せた。
「私、お勤めは頑張ります。どうかクビにしないで下さい！…私クビになったら行くところが無くなるんです。どうかお願いします、一生懸命働きますから、どうか」
そう言って少女は地面に頭を擦り付けるように土下座した。
その髪が土に散っている。
「見っとも無い、顔を上げよ」
だが少女は顔を上げなかった。
「わ、私、本当に頑張らせて頂きます。だから、どうか…」
久茨は平伏している少女を黙って眺めた。
仕事を押し付けられ、こんな理不尽な仕打ちを受けて、尚も働きたいというのか？
そういえば少女は舞妓の娘だったか。

しかも漫遊の。
漫遊の舞妓、藤白と共に、各地を転々と渡り歩いていたから、世間の厳しさを知っているのかも知れ　ぬ。一人では生きていけぬと。
だから、こんな仕打ちにも耐えようとするのだろうか。
久茨は、少女の肩を掴んで起こした。
少女の紫の瞳は慈悲を求めていた。
「追い出そうと思って言っているのではない。仕事を辞めて、只ここに住めと」
「そんな事出来ません！働かざる者食うべからず。母のいい癖でした。何もしないで住まわせてもらう　事なんて出来ません。それに、幾らお優しい久茨様でも、タダ飯ぐらいの者など、きっといずれ煩わしく思われます。そんな風に思われたくないのです」
久茨は呆気にとられた。
働かざる者食うべからず、などと台詞を、こんな幼い少女が言う事に滑稽だと思って面白かったが、自分の事を優しいと言った事に驚いた。
久茨は今まで一言も優しいなど言われた事はない。
自身もそんな台詞言われたいと思っていなかった。
「…優しいなど初めて言われた」
久茨が呟くと、少女は不思議そうに首を傾げた。
「久茨様はお優しいですよ？こんな私に慈悲をかけてくれて。私がこの半年生きて来られたのは久茨様のお陰で御座います」
久茨は少女に慈悲などかけた覚えはないが、そう思っているならそれでいいと思い、その事について何も言わなかった。
「お前、これからも働きたいのか」
「はい！久茨様にご恩をお返しする意味も含めて、心身よりお仕えさせて頂きたく思っています」
久茨は少女を不思議に思った。
この少女は、唯一の家族だった母親を、父に目の前で殺されている。

そんな男の息子に嫌悪感は抱かぬのか。
しかし、この少女の表情を見ていると不思議とその疑問も消えうせた。
この少女は、父や母、どの生まれの、どういう身分、その人物の肩書きや取り巻き、全てを取り払って、　その人物自身を純粋に見るのだろう。
そう思うと久茨は心地良かった。
「では、好きにしろ。もう何も言うまい」
「あ、有難う御座います！！」
少女は明るく返事をし、再び頭を土に擦り付けて土下座した。
「こんな所でそんなに頭を下げるな。髪が土に付いている」
久茨は少女を起こし、髪に付いた土を拭ってやった。
絹のように柔らかい髪だった。
久茨は土を全て拭った後も、何故かそこに触れていたくて、少女の髪を梳いたり撫でたりした。
「久茨様？」
少女はきょとんと目を丸め、久茨を見ている。
久茨は少女を驚かせたかと思ったが、その掌を外す事が出来ずにいた。
「――――好ましい手触りだ。何か、特別な物でも使っているのか？」
久茨は少女に不信感を抱かせないよう、適当に言った。
少女は照れくさそうに微笑んで答えた。
「有難う御座います。昔は母に、初椿（はつつばき）の油を付けて貰っていましたが、今は何も。でも久茨　様の方がずっとお綺麗な髪ですよ。お顔もとてもお綺麗で。私こんなにお美しい方を見たのは初めてです」
「そうか」
久茨は素っ気無く言った。
昔から久茨は、天からの贈り物だといわれる程に、その容姿を褒め称えられていたが、久茨はそれが好きではなかった。
「明日からまた働くのか」

「はい。明日も寅の刻（日の出前）から、掃除する事になってます」
「早いな。こんな時間まで起きていていいのか」
「…はい。あの、…実は、腕が痛くて寝れなかったんです。それで気分転換に散歩していて。でも久茨様に治して頂いたから、もうぐっすり眠れそうです。本当に有難う御座いました」
「――――ああ」
あの傷では痛みも凄かっただろう。
眠れないのも当然だ。
そう思うと久茨は再び、少女に傷を与えた半物を殺してやりたい衝動に駆られた。
そして、その半物達と共に、この無防備な少女が働いている所を想像すると、酷く心許なかった。
「明日、仕事が終わったら私の部屋に顔を見えろ」
「久茨様のお部屋に？」
少女は驚いた様に目を瞬きさせた。
久茨自信も口から出る言葉に驚く。
不可解な気持ちに攫われ、自然に口を突いて出たのだ。
この少女と会ってはいけない。
しかし出てくる言葉を抑えることが出来なかった。
「何時でも構わん。仕事の報告を。心配だ」
少女はきょとんとしたが、すぐに微笑んだ。
その顔はどこか嬉しそうだ。
「心配して下さってありがとう御座います。明日は終わるのが早いので夕刻には伺えると思います」
嬉しそうな顔の意味は、久茨が心配したと思ったからのようだ。
心配してくれる者が周りにいないのだろう。
久茨は確かに少女を心配している。
だがそれ以上に少女と会いたいという気持ちが強かった。
仕事の報告に来いと言ったのも口実だ。
仕事の報告など汐路にさせている。

態々少女を来させる必要などない。
会ってはいけない。
会うべきではない。
しかし己の意思に逆らっても、久茨は会いたかった。
それは、避けている時も。
本当は、ずっと会いたくて堪らなかったのだ。

五（前書き）

五

その日から、綏は久茨に部屋によく訪れるようになった。
久茨は綏が来ると安堵し、また嬉しく感じていた。
二人は、共に食事を摂り、月見をし、色々な事をして共に過ごしていた。
そしていつしか、二人の関係は、本当の兄妹以上といって良いほど親密なものとなっていた。
体力仕事に疲れた綏は、暫し久茨の部屋で寝込んでしまう事があり、久茨は起こすのも気の毒と思い、それを運んで同じ褥で休ませていく事もあるほど、二人は親密だった。
そしてこの日も、綏は疲れきっていて、うとうととしだし、もうすっかり普通になっていたため、自分から久茨の寝所の褥に入って行き、そのまま眠りについた。
久茨は暫し、目を通さなければならない大事な書簡があったため、眠る綏を横に蝋燭の灯りの中、文机に向かっていた。
この当時、久茨（ひさし）十七歳、綏（スイ）十歳。
一刻程たった後、久茨は書簡を読み終わり、既に深い眠りに就いている綏の横に自身の体も横たえた。
そして、綏を抱き包む。
これも既に日常の事だった。
久茨は綏の体に触れることに、安息を感じ、また充足感にも浸れた。
その為久茨は、いつの間にか汐路の連れてくる女で遊ぶ事も一切なくなっていた。
綏のまだまだ幼い体を包み込みながら、久茨は綏の髪を梳いたりする。
久茨はこの行為が好きだった。
指に絡みつく、柔らかい髪の感触が久茨を溺れさせた。

「…母さん…」
その時、綏が寝言を呟いた。
そして、安らかに眠っていた綏の表情が、歪んでいく。
――そして涙を流しだす。
久茨はその涙を拭い、更に深く綏を包み込んだ。
暫し、綏にはこのような事が見られた。
母親を殺された悪夢に囚われているのだ。
久茨の母は冷たい女だった。
美しくはあったものの、后妃である身分や、久茨の生母である事を鼻に掛け、父同様煩わしいと思っていたし、久茨から母に近づくことは無かった。
だがその母でさえ、目の前で殺されれば自分は傷つくだろう。
綏はその母と、とても仲が良かったらしい。
綏は良く母親の事を久茨に話していた。
綏には父親がなく、母子二人で暮らしていた。
母親は漫遊の舞妓だったため、各地を二人で旅していた。
舞妓は普通、その舞妓達と集団で暮らすものだが、綏の母、藤白はそうはしなかった。
舞妓は身分が低く、遊女として扱われる事も少なくない。
団体の舞妓の殆どはそういう集団だ。
集団の長に命令されれば、どんな男にでも、その身を捧げなければならない。
しかし藤白は亡き夫を愛し続け、体を売る事は出来なかったそうだ。
だが藤白に出来る事は舞を舞う事だけ。
藤白の母親も舞妓で、当時は都一といわれる程の舞手だった。
その母に舞の全てを教え込まれていたのだ。
しかし藤白自身は舞いを舞えても実際は舞妓として働いた経験はなかった。
そして、そのまま下級役人だった男に嫁ぎ、一切働く事はなかっ

た。
しかし夫が亡くなり、母親も既に亡くし、頼れる親戚の居ない藤白は、唯一できる舞を楯に、誰にも命令されない一人の漫遊の舞妓になる事を決めた。
まだ赤子だった綏を育てるために。
当時無名だった藤白は殆ど仕事に有りつけず、入った仕事も酔っ払いの観客に嘲笑される、それは酷いものだったらしい。
しかし藤白は、綏を育てるための、必要な金を稼ぐため、どんな侮辱を受けても耐えた。
少し成長した綏もそんな母を支えるため、小銭を稼ごうと他人の畑仕事や、水汲みなどの仕事を手伝っていた。
そしていつしか藤白は、都に名の響く有名な舞妓になっていった。
入る仕事も、地方の豪族や都の貴族の屋敷に招かれ舞を披露するという、高級待遇のものになった。
入る金も桁違いで、もう綏が畑仕事など手伝って小銭を稼がなくても、それなりに贅沢に暮らせるものとなった。
そして、その噂が父白帝に届いた。
父は藤白の舞とその美貌を見初め、無理やり犯した。
亡き夫を愛し続け、そのため過酷な漫遊の舞妓の道を選んだ藤白を。
そして一月ほど弄んだ後、飽きて殺したのだ。
綏の目の前で。
苦楽を共にしてきた母子の絆は、私と母とは天と地ほどの差のある、さぞ深いものだったに違いない。
藤白を語った時の綏のその表情が、それを物語っていた。
久茨は綏を眺めてから、髪に口付けをおとした。
悪夢を見なくなるよう願いながら。
その時。
「――…吉峰」
綏の言葉に久茨は耳を疑った。

吉峰？
久茨は狼狽えた。
何故これの口から、あの野卑な弟の名が出るのだ。
久茨は再び綏の顔を覗き込む。
その表情は先程と変わって、安堵した寝顔だ。
吉峰？
久茨はその忌まわしい存在を、何度も想像した。
綏が吉峰の名を知っていても別段不思議ではない。
むしろ、あれは有力な第二皇子なのだから知っていて当然だろう。
しかし寝言にまで出すものか？
久茨は綏に吉峰の話をしたことは一度もない。
久茨と吉峰の関係は一向に改善されることなく、この二年半で更に悪化していた。
故に、久茨は吉峰の話を綏にした事はない。
もともと家族と仲が良くない、というより一方的に見下し嫌っている久茨は、綏にその話をする事はなかった。
他の女官達から吉峰の話を聞いたにしても、寝言にまで出すものだろうか。
唯の偶然か？
それとも。
吉峰と綏は歳が近い。
知り合いなのか？
しかし下級女官の綏が、皇子の位の吉峰と接点があるとは思えない。
やはり唯の偶然か。
久茨は困惑し、そして綏の口から吉峰の名が出たことに憎悪し、苛立った。
普段から綏が側にいる時は、神経をつかって霊力を抑えなければならないため、久茨は眠りが浅く、　良い睡眠はとれていない。
しかし、それ以上に何か暖かいものに満たされ、浅い眠りではあ

るものの、安らかに眠る事が出来ている。
だが、その日は安らかな気分にはなれず、苛立ちが収まらないまま、一睡もする事なく朝を迎えた。

六

「汐路(しおじ)、聞きたいことがある」
汐路は朝早くから、久茨の部屋に典膳(かしわでのすけ)とその部下を連れ、久茨と綏の二人分の朝餉を用意しに来ていた。
最近は、綏が久茨の部屋で寝起きすることが多々あったので、綏が泊まった事を常に把握していた汐路が気を利かせ、その朝は膳司(かしわでのつかさ)に二人分の食事を用意させ持ってきていた。
いつも綏は仕事柄か早起きだったが、今日は非番で、しかも昨日は月一恒例の大掃除の日だったため、疲れきってまだ久茨の寝所で眠っていた。
褥のある寝所と、食事行う日常生活の部屋は、木製の両開きの扉を隔てて分かれている為、その部屋に膳司の者が食事を並べて直下がった後、今そこには、久茨と汐路の二人だけとなっていた。
「何で御座いましょう」
久茨の問いに汐路は優雅に答えた。
「綏と吉峰の事だ。何か知っているか」
「――――どこでそのことを？」
汐路は眉を下げ訝しげに答えた。
その言葉に久茨は苛立った。
やはり何か知っているのだと。
今でも常々汐路には綏の事を報告させていた。
あれ自身に報告をさせていたものの、あれの性格を考えると、私に心配をかけまいとし、肝心な事は何も話さないと感じたからだ。
実際、綏の話と汐路の話は大きく食い違っていた。
綏の話では、女官達と仲良くやっているとの一点張りだったが、汐路の報告によると、今でも綏は女　官達と打ち解けず、仕事を押し付けられているのは勿論のこと、陰で陰湿な虐めにあっているとの事だった。

実際、綏の体には傷が絶えなかった。
久茨が治癒してもその傷は絶える事無く、次々と新しい怪我を負っていた。
その事を問い詰めても綏は断固として転んだ等と嘘を突き通した。
その為久茨は一度その女官を調べ上げ、その女官を極刑に処そうとした。
だが綏が懇願してきたため、その者は後宮を追い出すまでに留まった。
その事が見せしめになって、もう綏への暴力はなくなるかと思ったが、やはり綏への嫌がらせの類は変わらなかった。
それ以降、霊撃による大きな傷を負う事はなくなったが、やはり殴られたような浅黒い痣は無くならなかった。
そのため常々汐路に見張らせていたのだ。
だから汐路は綏の事について全て知っている。
綏の同僚女官だけではなく、その交友関係も。
そして、吉峰の事も。
久茨は今の汐路の言葉で、二人が知り合いだと確信した。
一晩中考えていたが、寝言にまで出すほどなのだから恐らくそういう事だろうと予測していたのだ。
汐路はそれを知っていながら報告を怠った。
久茨はその事に苛立ち怒気をぶつけた。
「何故、報告をしなかった。あれは吉峰とどういう関係だ」
汐路は滅多に感情を面に表すことの無い主人に畏れたのか、同じく滅多に表情を崩す事のない汐路だったが、怯えた顔をし手を床に付け頭を下げた。
「綏さんと吉峰様は、綏さんが此処にお勤めされるようになった当時から、深い御交友が御座います。　しかし、あのお二人は唯の遊び仲間です故、危害はなく、わざわざお知らせする事もないと思い、ご報告を怠りました。申し訳御座いませぬ」
遊び仲間…。

久茨は春日の事を考えていた。
春日は吉峰に影響を受け、品格が劣った。
狭名葛に指南されてか、あれ以降久茨の前では以前の態度に戻ったが、それでも吉峰と一緒になって　暫し悪戯に耽っていると伝え聞く。
綏は元々身分の関係から教養がついておらず、行儀が行き通っているとは言い難かったが、それでも必死に無作法がないよう努力している姿を久茨は好んでいた。
あれも春日のようになるのか。
しかし、ふと汐路の言葉を思い出した。
あれと吉峰は、あれが此処に勤めだしてからの仲だと言った。
つまり、二年も前からの仲だ。
その間、綏の態度に変化は見受けられない。
春日のように、悪戯などといった愚かな事をしている訳ではないのだろうか。
「汐路、あれと吉峰が遊び仲間だというのは真か」
「はい。綏さんが非番の日は勿論、お仕事を終えられた後など、毎日のように一緒に遊んでいらっしゃられます」
「毎日…」
久茨はその事に、腸から理由の知れない怒りが込み上げてきた。
「貴様も私が吉峰の事を嫌悪している事は存じていよう！何故知らせなかった」
久茨は怒りを汐路にぶつけた。
汐路の肩が震えている。
「申し訳御座いませぬ。しかし、綏さんは女官達の中で孤立し、まだ幼い子供だというのに、その表情は子供とは思えぬ程生気を無くしていて、その上、毎日のようにあのような酷い仕打ちをされて…」
そこで汐路は唇を噛み締めた。
日々綏の事を見張らせていたため、汐路が綏に同情している事は久茨も知っていた。

綏の報告をする時の汐路の表情は、いつも悔しさに満ちていたからだ。
よく現場に居合わせた汐路は、綏の事を護っていた事も知っていた。
「綏さんは、その生活の中で、吉峰様とお知り合いになって。そして次第に綏さんの表情に、子供らしい生気が満ちていかれました。吉峰様方と遊んでいらっしゃられる時の綏さんは、本当に無邪気で、とても楽しそうで。綏さんにとっては唯一の友達です。それに、綏さんも久茨様と吉峰様が仲違いしているのを存じているのか、綏さんは、兄君のようにお慕いしている久茨様に嫌われる事を恐れて、必死に吉峰様の事を隠しておいでのご様子でした。そんな中で、私がご報告をするのは酷に思われまして…。そのため報告を怠りました。申し訳御座いませぬ」
汐路は深く頭を下げた。
久茨は、昔の汐路の報告を思い出していた。
久茨が綏に会おうとしなかった当時、綏に友達が出来た様子だと汐路から報告を受けた事がある。
それ以降、その事を話す事がなかったので忘れていたが。
そんな昔から、あれと吉峰は一緒にいたのか。
久茨は怒りが頂点に達した。
「あれと、吉峰を近づけさせるな」
汐路は目を見開いて久茨を見上げた。
「綏さんと、吉峰様を？」
「ああ」
「それはあまりに酷で御座います。綏さんにとって、唯一の友達で御座いますのに、そんなことをすれば、必ず綏さんを哀しませてしまいます」
「あれが吉峰と一緒にいるなど汚らわしい。あれに友などいらぬ」
「しかし！」
「次に仕事を怠った時には命はないと思え。下がれ」

久茨は汐路の言葉を黙殺し、そのまま部屋から下がらせた。
汐路は何か言いたげな表情を残しつつも、頭を下げて退いた。
久茨は汐路が退室した後、食事には手を付けずに寝所に戻り、まだ寝ている綏を眺めた。
あどけない無邪気な寝顔がそこにはあった。
久茨は、その頬にゆっくりと指を滑らせる。
久茨は綏の、その紫の大きな瞳に、髪に、肌に、匂いに、その全てに魅せられていた。
そこに触れるのが心地よく、腕に抱きしめた時には、この上なく充足感に満たされた。
――――吉峰。
久茨の脳裏にその名が木霊する。
そして、久茨の意思に反し、その吉峰と綏が一緒に遊んでいる光景が脳裏に浮かび上がってきた。
吉峰に笑いかける綏の姿。
二人で無邪気にはしゃぐ姿。
吉峰の手が綏に触れる姿。
その光景が久茨を憎悪させた。
厭わしい。
吉峰の手がこれに触れるなど、想像しただけで不愉快だ。
「…ん」
その時綏の瞳が微かに開いた。
「起きたか」
「久茨様…」
綏はそう言うと、細めていた目を開いて完全に覚醒した表情で久茨を見上げた。
久茨は、頬に触れていた指をそっと離す。
「…おはよう御座います」
綏はもぞもぞと上半身を起こし、久茨の紺と青鼠（あおねず）で亀甲文様（きっこうもよう）の絣（かすり）が織られた羽織に目を落とすと、顔を紅潮させた。

「…お寝坊してすみません」
紅潮させた顔を少し俯けさせ、申し訳なさそうにいう。
「今日は非番だろう」
「…そうですが、久茨様はもう着替えていらっしゃるのに、私だけ、こんな遅くまで寝ていて、申し訳ないです」
「構わぬ。朝餉は」
「は、はい！頂きます！」
それから綏は、顔を洗い、着替えるため早々と部屋から出て行った。
これもいつもの事で、綏は久茨と摂る食事の席で夜着のままでは申し訳ないといい、常に身だしなみを調えてからその席に着いていた。
その間久茨は冷えてしまった朝餉を女官に新しく用意するように命じ、綏が戻ってくるのを待った。
暫くして、ちょうど朝餉が整えられ女官達が去った後、綏が息を切らせて戻ってきた。
今日は非番とあって、いつもの下級女官の装束である二藍の小袖ではなく、良く見慣れた、淡い露草色の生地に籠目文様（かごめもよう）に桜の小花が散った小袖を着ていた。
安物の着物ではあるが、涼やかで見ていて不快ではない。
以前久茨は、綏に似合いそうな着物を何度も贈っていた。
自分好みの装いをさせたかったからだ。
しかし綏は頑として受け取らなかった。
こんな高価な物は受け取れないと言って。
それで仕方なく命令だと伝え、綏に無理やり着させようとした。
しかし、そこになって綏が、「自分の身分で、高価な物を纏ったら、周りの者の反感を買ってしまう」と言ってきたのだ。
久茨はそれを聞いて、滅多な事で口答えをしない綏がこうまで強情に受け取ろうとしなかったのは、恐らく遠慮からではなく周りの目が気になるというのが本心だと悟った。

唯でさえ女官達に睨まれている身にとっては、それを着る事が怖かったのだろうと。
苛立ちは在ったが、綏の身を案じ久茨はもう無理に着せようとする事はなくなった。
しかし自分好みではない安物の着物であっても、綏が着ると好ましく思え久茨は不快になることはなかった。
「お待たせして申し訳ありませ。出来るだけ急いだのですが」
「否、構わぬ。早く席に着け」
「はい」
綏は荒い息を整え、そのまま設けられた席に腰を下ろした。
「先程、慌てて着替えていたら、通りかかった汐路様が手伝って下さったんですよ。それで、少しばかり早く戻ってこられました。また後で、きちんとお礼を言わないと」
綏は、膳に用意された野菜の白和を口に運びながら、嬉しそうに言った。
「汐路様は、本当に優しい御方ですね。私みたいな下級女官に、本当によくお声を掛けて下さるのです。久茨様の乳母様でいらっしゃるのに、よく下級女官の詰め所にまで会いに来て下さって。何だか恐縮してしまいます。でも、何だか母さんみたいで、すごく好きです私」
久茨はその言葉を黙殺した。
綏が汐路の事を好いている事は知っていた。
汐路の事をよく尋ねてきたからだ。
どんな物が好きか、などと聞いてきて、いつも世話になっているから何か贈り物をしたいと言っていた。
汐路は資産家の貴族の出身で、綏のような下級女官の給与ではその全てを使ったとしても汐路を満足させられる物は買えない。
その事を綏に伝えたが、気持ちの問題だといい、暫しその僅かな給料を貯めて、使えそうな小物などを汐路に贈っていた。
「今度、白木蓮（はくもくれん）の花を持って、お礼に行ってこようと思います。汐

路様、白木蓮がお好きだと言っていたので。久茨様は確か、梅がお好きですよね？春日様が言ってました」
「春日？」
久茨が春日の名を怪訝そうに口に出したとき、終始機嫌よく話しながら朝餉を食べていた綏の箸の動きが止まった。
そして見る見るその顔が蒼白していく。
「あの、あっ、そうだ。実は最近、春日様と、その、お庭でお会いしたんです。それでその時、少しお　言葉を頂いて。それで、その時に教えて貰って…」
綏のその口調は、焦ったように乱れ、最後には気まずそうに小さくなった。
その顔と声で、久茨は考える迄もなく綏が春日とも遊んでいるのだと悟った。
久茨は苦々しく思った。
吉峰との事を聞いたときの様な嫌悪感はなかったものの、春日と吉峰の悪びれた遊びの数々を伝え聞いていた久茨は、そこに綏も混じっていたと思うと苛立った。
「か、春日様にお会いしたのはそれっきりで…」
「――――そうか」
綏の不安そうな声を無視して久茨は冷酷に言った。
「は、はい」
そのまま暫く沈黙が流れる。
久茨は普段から口数が少ない為、綏と居るときもそうなる事が多々あった。
しかし今のような重い静けさではなく、落ち着く静けさだった。
綏はその重い空気に耐えかねたのか、声を上擦らせながら別の話をし出した。
「あ、あの、実は昨日伝えたかった事があるんです。でも私寝てしまって、言いそびれてしまったんですが、私今日から四日間、後宮を出る許可を長女様から頂いてるんです。私ここに働き出してから

初め――」
「ここを出るだと？」
久茨は驚いて眉間に皺を寄せながら、綏の話を遮った。
「はい！まあ四日間だけですが」
綏は久茨とは対照的に嬉しそう微笑みながら言う。
「下がる里もないのに、何故、出る必要がある」
久茨は綏の行動が理解出来なかった。
通常、家族のいるものは定期的に暇をもらって里下がりするが、綏には家族も会いに行く知り合いもいない。
それが何故後宮を出るなどと言い出すのか理解できず、久茨は綏を探るようにその紫の瞳を見つめた。
「あの、物味遊山（ものみゆざん）に行こうと思って…」
綏は気まずいそうに瞳を泳がせながら言った。
「お前一人で行くというのか？」
「はい。気晴らしになると思って…」
一人で物味遊山だと？
久茨は憤った。
それ自体も十分不快だったが、それ以上に四日も綏が後宮を離れることに激しい憤りを感じた。
「ならぬ」
「え？」
「女の、それもお前のような子供の一人旅など危険だ。行ってはならぬ」
「でも許可は頂いてます！」
綏は飛び掛ってくるような口調で言ってきた。
綏は滅多な事で久茨に逆らう事は無かったが、この時明らかな抵抗の叫び声を上げた。
久茨はその事に苛立った。
「命令だ」
その静かで冷酷な久茨の言葉に、綏が久茨を睨んだ。

睨むといっても、ちらちら上目遣いに少し見てすぐ視線を逸らすといった遠慮がちなものだったが。
それでも綏が今までそんな事を一度もしたことのないので久茨は驚いた。
そして、それ以上に深い苛立ちを覚えた。
「気晴らしがしたいのなら、楽士でも何でも手配してやる。大人しくしていろ」
苛立ちを抑えた声で言ったが、それでも綏には十分怒りは通じただろうと久茨は思った。
これで諦めると久茨は確信した。
しかし。
「長女様から許可は頂きました！私の上司は長女様です！久茨様の命令は関係ありません！」
綏は目に涙を溜めて久茨に楯突いてきたのだ。
久茨はその事に驚いた。
綏がこれほど自分に逆らう事など、今まで一度も無かった。
綏どころか、今まで久茨にこれ程の物言いをした者など唯の一人も居ない。
綏は溜めていた涙を手で拭い、久茨をまだ遠慮がちに睨んでいる。
久茨はその態度に怒りが増し、普段綏の前では神経をつかって抑えてある霊気が、無意識の内に流れ出した。
そして冷酷な表情を綏に向け、氷の声で言い放った。
「――――誰に向かって、そんな口を利いている」
綏は始めて見るその氷の表情に驚いたのか、蒼白し持っていた箸を落として、何も言い返してこなくなった。
久茨もそれ以上何も言わず、固まっている綏を無視し食事を再び摂りだす。
暫く沈黙が流れる。
しかし久茨は綏のこの態度に一物の不安を感じていた。
久茨は再び綏の涙に滲んだ瞳を見据える。

「お前は今日一日私の部屋にいろ。一歩も出る事は許さん。分かったな」

それは絶対の命令だった。

綏は頷く事もなく、かといって首を振ることもなかった。

七

その午後、久茨は後宮から離れ、皇宮の一室で地方の書簡に目を通していた。

しかし綏のあの姿が頭から離れず、書簡に集中出来ずに、ただ同じ行を何度も繰り返し眺めていた。

あれのあの態度はなんだ。

長く後宮に閉じこもっているのだから、外に出られるのが嬉しいという事は理解出来る。

久茨自身、生まれてからずっと後宮に閉じ込められてきた。

だからその事は良く理解出来た。

しかし綏は物味遊山の楽しみに囚われて、久茨に抵抗するなどする性格ではない。

綏は自分の事よりまず相手の事を考える。

現に以前綏に怪我を負わせた女官を極刑にしようとした時、あれは泣いて助けてくれと頼んできた。

あの女官に負わされた怪我は、左肩から腕にかけて広面積の肌と肉が爛(ただ)れるといった酷いものだった。

しかしあれは、その女官にも家族も息子もいるといって、その女官を庇った。

その事に呆れたが、その健気な姿が久茨の心を打ち更に綏を可愛らしく思った。

母を目の前で亡くし、誰よりも愛情に飢え、そしてこの後宮では虐めにあっている。

だから唯一優しくしてくれる汐路にあそこまで事あるごとに贈り物をしているのだ。

久茨は気づいていた。

綏が汐路に嫌われるのを恐れている事を。

だからああまでして汐路の気を引こうとしている事を。

自分の生活に必要最低限の金まで叩いて、汐路に簪や香を贈っていた。
嫌われたくない一身で、自分の事を犠牲にする子だ。
その綏が私を怒らせてまで、何故物味遊山などの遊びに拘(こだわ)る？
綏が私に逆らうのは大抵裏に何かある時だ。
着物を拒んだ時も、女官に虐められている事を言わなかった時も、いつだってそうだった。
今回のことも？
久茨はそこまで考えて確信した。
何かある、と。
「葛木(かつらぎ)」
久茨は側に控えていた側近の公達の名を、考えるより先に呼んだ。
「何で御座いましょう？」
「後宮の下仕の綏という下級女官が、今日後宮を出る事になっていた理由を調べ上げろ。物味遊山の為と公になっているだろうが、その裏がある筈だ。その裏を探れ。報告は夕刻まで待つ。徹底的に調べ上げろ」
「畏まりました」
そう言って葛木は一礼し足早に退出していった。
葛木は無駄口を叩かず、任務に遂行な忠実な部下だ。
下された命は必ず忠実に遂行し、信頼の置ける久茨の部下の一人だった。
綏の事については汐路の方が知っているだろうが、あの者は信用に欠ける。
綏と親しくなり過ぎた今、頼りにはなるまい。
葛木は任務を怠った事は一度もない。
直に調べ上げるだろう。
久茨は集中出来ない書簡に目を通しながら、葛木が戻ってくるのを苛立たせながら待った。

八

葛木は、申の刻（午後四時頃）に戻ってきた。
予想していたより早かったものの、久茨は気が遠くなるほど長く感じていた。
「分ったか？」
「はい」
葛木はその長身な背を優雅に伏せて返事をした後、ゆっくり頭を上げ、凛々しい顔を引き締めながら久茨を見据えた。
「報告を」
「綏は、本日より、やはり物味遊山に行かれるとの事で御座いました」
久茨はその報告に怪訝し表情をしかめた。
あれが物味遊山ごときに魅せられて、自分に逆らうなど納得出来ない。
「真なのか」
「はい。――――ただ、私も皇太子より裏があると伺っておりましたので、始めは長女（おさめ）や下級女官その言葉を信じず、色々調べておりましたら……」
葛木は先程の聡い口調と打って変わって、少し言い辛そうに言葉を濁した。
「何だ」
久茨は物味遊山の事に納得がいかず、少し苛立った口調で葛木を促した。
その言葉で有能な葛木は直に顔を引き締め、再び聡い口調で言葉を続け出した。
「はい。綏は下級女官の中で、著しく孤立している様子。綏と親交のない下級女官の詰め所の者に聞いても埒が明かない判断しまして、綏の交友関係を洗い上げました。それで、綏は吉峰殿下と深い親交

がある、と分かりまして」
久茨は更に苛立った。
再び人から伝え聞くだけで苛立つ。
あれと吉峰が深い親交があるなどと、二度と聞きたくもない。
「――そうか」
久茨は苛立ちを抑えながら、それ以上その話はするな、と興味がなさそうに冷淡な口調で言った。
しかし、葛木は話を続けた。
「はい。始めの内は、下級女官の、それも下仕(しもつかえ)に属する女官が、皇子と親交があるなど信じられず、事実を確かめる為、吉峰殿下の賀陽殿に赴きました。そこで、殿下の側女官に探りを入れました所、本日、綏と物味遊山に出かけられる程、仲が深いと言うことということが判明致しまして」
「何だと！」
久茨は驚愕しその場で立ち上がった。
その表情は自分でも分るほど蒼白している。
「い、如何されました、皇太子？」
葛木は普段から冷徹な表情を崩すことの無い久茨が取り乱し、蒼白している姿に驚き、目を見開きながら言った。
「あれは吉峰と物味遊山に出かけると言うのか！」
久茨は葛木を睨みつけながら叫んだ。
「は、はい。その事をご報告しようと思いまして…」
葛木は見た事がない久茨の鋭利な顔ついに、恐れ戦いて声を乱しながら言った。
「…二人で、か」
久茨は綏と吉峰が二人で観光し遊んでいる所を想像すると吐き気がし、そして言いようの無い感情に胸が締め付けられた。
「いえ。皇子の身分でそのような事は危険な事は叶いません。多くの女官や警護の者が同行する一行で四日間、吉峰殿下のお育ちになった杏林(きょうりん)の山荘に行かれるとの事で御座います。…――ただ、側女

官の話によりますと、お二人でその日、杏林の村で開かれる春の祭りに行かれる計画を立てておられるとか」
二人で村の祭りに…。
皇子の身分でそのような場所に赴くなど、表ざたになれば大問題だ。
しかしあの吉峰なら隠れてやりかねぬ。
恐らく二人で内密に計画していたのだろう。
その事をどうして葛木が知りえたのかと少し疑問に思ったが、葛木は容姿がいい為その武器を使って二人と親交の厚い側女官でも落とし込めたのだろうと納得した。
「綏と吉峰殿下は幼馴染で、大変仲が宜しく、側女官の話では、二人は将来を誓い合った仲との事です。中でも吉峰殿下は、いずれ綏を正妃にすると、常々女官におっしゃっていられる程だとか」
「――…正妃に…」
久茨はその言葉の意味をぼんやりと考え、呟いた。
「はい。皇族の、それも霊力の高い有力の皇子が、何の身分も霊力もない者を正妃に迎えるなど言語道断。子供の戯れとは思いますが、皇族の名に泥をぬらない為、また、西国の為に、早い内に手を打たれた方が宜しいかと」
葛木は冷静ながらも切実に訴えた。
霊力の高い男女の間には、それと同じか、更に高い霊力を生まれ持った子が出来る確立が高い。
吉峰は特異な体質の久茨には遠く及ばないものの、父よりは遥かに高い霊力を持ち、現在久茨に次いで西国一、二を争う霊力者だった。
葛木はその吉峰の次の血筋が衰える事を心配しているらしい。
しかし、血筋が衰えようと、国の結界が衰えようと、今の久茨にはどうでも良い事だった。
――――正妃。
その言葉が久茨の脳裏を占めていた。

綏が吉峰に嫁ぐ事を想像すると吐き気以上の気分の悪さが押寄せ、その場に立っている事が不可能なくらいだった。
今は幼い綏でもいずれ成人する。
いずれ嫁ぎ、自分の元から他の男の手の内に離れていく。
あの体を、誰かが抱きしめ慈しむ。
二度と自分の手に抱きしめる事が出来なくなる日が訪れる。
その事を考えて、久茨は蒼白しながらその場に佇む事しか出来ずにいた。

九（前書き）

エロいです。グロいです。
嫌いな方はどうぞ回避して下さい。

九

戌の刻（午後八時頃）。

あの後、久茨の耳には葛木の言葉など入らず、只綏と吉峰が今日共に物味遊山に行く事を何としても止めさせなければと思い、綏には部屋にいるように命じてはいたものの、少しも安心出来ず、皇宮から　汐路に使いを送り綏に自室から出さないよう見張っているように命じた。

そして吉峰の一行が杏林に出立しても、綏が自室にいると汐路から報告を受け、綏と吉峰を離れさせた事に安堵した久茨はそのまま仕事についた。

しかし何ともいえない胸の締め付けは除かれず久茨を苦しめた。

綏がいずれいなくなる。

その事が脳裏から放れず、久茨を苦しめ続けた。

その為その日は仕事に手が付かず、早めに切り上げ皇宮を後にした。

後宮に渡った久茨は綏と夕餉を摂ろうとしたが、汐路から綏は既に寝ていると告げられ、こんな早い時間に寝るなど綏らしくないと怪訝に思いながらも、汐路の用意した別の部屋で夕餉を済まし、そのまま湯浴みをし白い絹の夜着に着替えた後、供の者も連れず一人春の花々が妖しい香を放つ中、延々と続く行灯（あんどん）の照明が置かれた長い廊下を足早に渡り、そして綏を目指し自室に辿り着いた。

部屋から灯りが漏れていない。

――――やはり、もう眠ったのか。

久茨はそんな事を考えながら部屋に入り、月明かりを頼りに綏を探す。

そして、そこに居ない事を確認すると、奥にある寝所の扉を開けた。

寝所は灯り一つ無い闇だったが、寝台の上にある小さな影を確認

すると、久茨は安堵し影のある側の蝋台の蝋燭に霊術で明かりを灯した。
揺らぐ灯火がその影の正体である小さな少女を妖しく映しだす。
「綏」
久茨は綏に囁きかけながら隣に腰を下ろした。
綏は久茨に背を向けたまま一切動かない。
その時、綏の白い夜着から梅花（ばいか）の香（こう）が漂い久茨の鼻腔をくすぐった。
久茨は以前から自分が好む香を綏につけさせていた。
少しの間その香りを楽しんだ後、久茨は綏の顔の前に手をつき、その横顔を覗き込んだ。
覗き見える青白い横顔に映る紫の瞳は開かれており、何を見つめるでもなく、ただ一点を向いていた。
「起きているなら返事をしろ」
久茨はその横顔を見下ろしながら言う。
しかし綏は返事もせず、表情を変える事も無く、そのままどこと知れぬ一点を見つめ続けていた。
その瞳は哀しみを映し出していた。
今日物味遊山に行く事が出来ずに、酷く哀しんでいる表情。
――――吉峰。
久茨の脳裏にその名が浮かんだ。
今綏が考えているだろう異母弟の名を。
今日共に物味遊山に行く約束をしていた弟の名を。
そんなに吉峰と共に行きたかったのか。
今朝私に一人で物味遊山に行くと嘘を吐き、今もまだこの様な態度をとる程に。
久茨に苛立ちが込み上げてくる。
そして気が狂いそうな喪失感に打ちのめされた。
これを、失う。
いずれ遠くない将来、自分の元から離れて行く。

吉峰の元へ。
他の誰とも知らない者の元へ。
自分の手の届かない遠い所へ。
久茨は失う事に恐怖し、自分以外の者の元へ行くことに怒りを滾(たぎ)らせた。
底知れぬ深い恐怖と怒りに久茨は支配されていく。
そして次第に、久茨の中で何かが崩壊していった。
何も見えず、何も考える事の出来ない深い闇に囚われる。
闇に落ちる。
「明日は宿舎に戻っていいですか？」
綏が久茨から顔を背けたまま、怒った口調ではなく拗ねたように言った。
しかし闇に囚われた久茨には、もう言葉は聞こえなかった。
この時久茨は、恐怖と怒りで狂っていた。
久茨は狂った精神で欲望が言うままに、誰にも触れさせたくない綏の髪に触れ、そして誰にも触れさせたくないその横顔に唇を這わせた。
その事に驚いた綏は顔を振り上げ体を起こした。
だが久茨は、綏に霊術をかけその四肢を押さえつける。
もう闇に囚われ神経が崩壊した久茨は、霊力を抑える事を忘れ、小さな綏の体を圧し潰していた。
「ひ、久茨様？」
綏の驚愕の声が響く。
久茨はその声が煩わしく感じた。
そのため久茨は、自身の白く美しい指を動かない綏の咽元にあて、その指に微かな紅い光を灯し綏の声を奪った。
この時、久茨の脳裏に煩わしい父の言葉が甦っていた。
――――好きなようにすればいい。
その言葉をぼんやりと考え、そして思った。
抱けばいいのだと。

誰かの元に行くより先に、自分の物にすればいいのだと。
そうすれば、綏はもうどこにも行けない。
久茨は安堵するのと同時に、欲望に熱が灯り、普段綏の為に抑えていた霊力を爆発させた。
綏の顔は恐怖と苦痛で歪んでいる。
そして久茨が魅入られて仕方なかった紫の大きな瞳は妖しく濡れ、そして涙の滴を落とした。
久茨は動く事のない小さな体に覆い被さり、唇に自分の唇を被せる。
動かない綏の唇を舌で抉じ開け、その中に忍ばせる。
歯列をなぞり、動かない綏の舌を掴み取り、そして銀に光る体液を、綏の咽に流し込む。
久茨は長く綏の小さな口腔を味わったあと、ゆっくりと唇を離した。
綏は涙を流しながら、瞼をきつく瞑り顔を歪ませている。
(息苦しかったのか。それとも別の苦しみか)
そんな事をぼんやりと考えたが、しかし久茨はもうそんな事はどうでもよかった。
綏の意思など久茨にはいらなかった。
誰にも触れさせたくない綏を、唯自分の物に出来ればそれでよいと。
そして久茨は、人形と化した綏の上半身を起こし、帯を解き、梅花の香の漂う夜着を脱がせた。
裸体になった綏の体は、久茨の想像以上に細く、そして白く美しくかった。
久茨は魅入られ、まだ膨らみのない胸や、肋骨が浮かび上がる細い横腹を手で這わす。
そして起こしていた綏の上半身を倒し、胸にある桜色の小さな突起に唇を這わせた。
夜着から綏の体に移っていた梅花の香が久茨を酔わせる。

久茨はあるかないか分からない程の小さな突起を、水に飢えた獣のように吸い付いた。
自分の所有物のように、舌で舐め、歯で噛み付いて弄ぶ。
暫く弄んだ後それに満足した久茨は、そこから顔を離し再び綏の顔を見下ろした。
唇が震え、歪んだ目元には、壊れた井戸のように涙が溢れ出している。
その歪んだ目に浮かぶ、紫の瞳が久茨を睨んでいた。
久茨はその瞳に釘付けになる。
久茨が好んで止まなかった瞳は、涙に濡れた事によって、美しく輝き、更に久茨を魅入らせた。
暫くその瞳を眺めた後、再び綏の唇を、瞼を、耳を、舌で弄ぶ。
髪を指で絡み取り、小さな耳を舐め、細い首筋を吸い上げ、余す所無く味わっていく。
自分の満足いくまで延々と弄ぶ。
そして舌で綏を味わいながら、手で動かない華奢な足を開かせ、その中心に指を這わす。
腺を描くように撫で、軽く刺激する。
そして、その下にある手付かずの秘所に、久茨は自身の長く美しい指を一本無理やり捩じ込ませた。
長い愛撫をうけても十歳の少女が潤う筈もない。
その潤いのない道を容赦なく指で暴いてゆく。
出し入れしたり、揺さぶったりしてその感触を味わう。
そして指をそのままに、綏の口腔から唇を離してその顔を無表情に眺めた。
瞳は再び硬く閉じられ、涙を流しながら顔を歪ませている。
その表情は、痛みと、苦しみを訴えていた。
久茨はその事に安堵の気持ちが湧き上がってきた。
その歪んだ顔が久茨に、綏は自分だけの所有物にあると感じさせ、綏を失う恐怖心を取り除く事ができた。

そして枯れていた充足感が再び満たされた。
久茨は更に綏の歪んだ顔が見たいと思い、少し潤いの出てきた秘所にもう一本指を増やし、それぞれ別々の方向に先程より更に激しい刺激を与えようとした。
しかし、綏の道は驚くほど小さく、久茨の二本の指は辛うじて入ったものの隙間は殆ど埋め尽くされてしまい、別々に刺激しようとする久茨の指の動きを暫し止めさせた。
だが、綏の表情は更に歪んだ。
そしてゆっくりと、きつく閉じていた瞼を微かに細く開き、濡れた紫の瞳で久茨を見上げた。
その細められた瞳は、久茨に助けを求めていた。
久茨はその瞳を見て、至福の悦びを感じた。
綏は今、自分だけを見、自分だけの事しか考えられていない。
吉峰の事も、他の誰の事も考えず、自分だけを見ている。
今の久茨はもう綏に恐怖だろうと何だろうと、自分だけにその心を向けさせれば満足出来た。
自分以外の者を見ず、自分以外の者を考えられない綏に、自分の所有物になっている事に、久茨は安堵した。
綏のその表情に満足した久茨は、その瞼に口付けを落とし、秘所から二本の指を抜き取った。
そして動かない綏の下半身を持ち上げ、その白く細い両太腿を広げさせ、足の間に居る自分の目の前に、秘所を曝(さら)け出させた。
綏の秘所はその年齢ゆえ毛も生えておらず、久茨の乱暴な指の挿入の所為で血が滲み紅に染まっている。
だが血で染まっていても、小さな花は見た事がない程美しく、久茨を魅入らせた。
綏は羞恥のためか、肌を紅潮させ震えている。
久茨は暫くそこに目を奪われた後、二本の指で小さな唇を開かせ手付かずの芯を曝け出させた。
それは綺麗な桜色をした小さなものだった。

久茨は魅了されそこに柔らかく口付けを落とし、その下の膣の回りを舌で這い、血を舐め上げ、貪るように味を堪能した後、舌で芯を拉(ひし)げた。
そして舌で芯を刺激しながら、再び秘所に二本の指を捩じ込む。
久茨がその二箇所を長く刺激している内に、綏の体内から透明な体液と血が溢れだした。
しかし体液と血で潤ってはいるものの、綏の道はやはり常人より小さく、二本の指を受け入れるのが精一杯だと悲鳴を上げるように久茨の指を壁で拒んだ。
しかし久茨は、そのまま指を抜く事はせず、拒む綏の道を執拗に激しく刺激し、芯を舌で弄び続けた。
久茨は暫くその行為を続け、綏の道が十分ではないが程々に潤った事を確認すると、そこから二本の指を抜き出し、芯を刺激していた舌も離した。
そして久茨は、再び綏の顔や裸体に目を這わした。
目は微か開いているものの瞳に生気はなく、歪んでいた表情も既に本当の人形ように無表情になっている。もう殆ど意識がないようだった。
久茨はそんな綏を暫く眺めた後、自身が纏っていた白い絹の夜着を脱ぎ捨てた。
そして微量に潤った綏の秘所に、もう限界まで膨れ上がっている熱の塊を押し当て、挿入させようとした。
だが狭すぎる入り口は久茨の侵入を阻んだ。
久茨は顔を顰(しか)める。
綏の小さな体内の器と久茨の大きな熱の容量は、残酷なまでに不釣合いだった。
だが諦めるということは、微塵程も浮かばなかった。
小さな道に自分の塊の先端を押し付け、入り口を押し広げる。
微かに先が入ると、綏の腰を持ち上げて体を折り曲げ、そのまま全体重を掛けてねじ込んだ。

破瓜(はか)のせいで、血で潤っていた道が更に潤いを増す。
それを利用して久茨は自分をどんどん埋めていった。
しかし半分も侵入させると奥が詰まりだし、そこから先に押し込もうとすると久茨にも烈(はげ)しい痛みが走った。
だが痛みを覚えながらも動きを止めず、奥を目指して沈めてゆく。
そして全て納まると一旦満足し、一度動きを止めて綏を見下ろした。
人形と化していた綏の表情が痛烈に歪み、瞳からは涙が尽きる事無く溢れている。
その顔は拷問でもうけているかのようだ。
久茨はそんな綏に唇に口付けをした後、全て納めた熱の塊を引き、次の瞬間容赦なく最深部まで貫いた。
綏の顔がもうこれ以上ない位歪む。
久茨も狭すぎる道に痛みが走り微かに顔を歪めたが、出し入れを始めた。
しかし綏の道は久茨の熱が半分までくると、それ以上容易には進ませず、そのままの状態で体がずり上がる。
そのため肩を押さえつけてずり上がる体を固定し、奥まで突き上げられるようにした。
綏の細い下腹部に目をやると、自分の熱の塊が内部で動いているのが目で見えて分かる。
微かに浮かび上がっているのだ。
それ程綏の体内は狭かった。
狭すぎる体内の壁に痛みつけられながらも、深くまで突き上げ続ける。
その為、狭すぎる体内は久茨の容量によって徐々に開拓され、締め付ける痛みが薄れていった。
女の生理本能か、痛みに対する防衛本能か、綏の道から蜜が溢れ出す。
開拓され、滑りが良くなった道は、久茨にこの上ない快楽をもた

らした。
快楽と、今迄どんな女を抱いても感じたことのない悦びが久茨を支配する。
久茨はそれを、出来るだけ長く味わいたいと思った。
狭い道との摩擦で次第に絶頂の波が襲ってきたが、それを堪え出し入れを続ける。
そしてより長い間綏を堪能した後、とうとう絶頂を向かえた。
それと同時に綏の体を強く抱き寄せ、白濁の体液を最奥に全て注ぎこんだ。
久茨は余韻を味わうため暫く互いを結合させたままにしておく。
その状態で、もう随分前に意識を失くしている綏を眺めた。
久茨はその時、不安も、恐怖も、怒りも、生まれてからずっと感じていた煩わしさも全て消え去り、感じた事のない悦びに満たされていた。
そして意識のない綏の口腔を再び啄み、その繊細で小さな体を折れる程強く抱き込んだ。
久茨は口腔を思う存分味わった後も、暫く結合させたまま休んでいたが、暫く経って秘所から自身を引き抜いた。
この時久茨は少し綏の体内に異変を感じていた。
余りに狭すぎるその道筋に。
そして、サラサラした異常な量の体液に。
久茨は抱き包んでいた体を少し離し、綏の秘所に目をやった。
そこには真紅の血液が、未だに綏の秘所から流れ出ていた。
（――――妙だ）
久茨は以前に何人も汐路の連れてきた生娘を抱いた事があった。
その者達は破瓜のため暫し血を流す者も多かった。
しかし、これ程多くの血を流す者は一人もいなかった。
久茨は顔をしかめた。
（まさか…）
久茨は綏の年齢と体格を考えた。

綏はまだ十歳だ。
妖しい紫の瞳で大人びた表情を垣間見せる事はあっても、実際はその年齢より体は小さく、体の成長も遅いといえる。
まだ初潮もないだろう。
そして私に痛みを与える程の体内の小ささ。
久茨はそこまで考えて全てを悟った。
私は綏を壊した。
子宮を突き破り砕いてしまったのだ。
この尋常でない出血がそう語っている。
久茨は顔をしかめながら、再び綏の憔悴した顔を見つめた。
久茨は既に四肢を押さえる霊術は解き、声を抑えるも例術も同じように解いていた。
しかし意識を失っている綏はその事を知らず、痛みから逃げるように意識を手放したまま眠り続けている。
（――余程の痛みがあっただろう）
久茨は先程まで感じていた悦びが薄れた。
そして悲しくなった。
久茨はその感情を埋めるように再び綏に口付けし、幾筋もの涙の軌跡を唇で拭った後、その小さな裸体を深く柔らかく抱き包んだ。
そして体を離し、綏の隣に膝を立てて座った。
露わになっている綏の細い下腹部に掌を置く。
治癒の霊術を施そうとしたのだ。
このままでは子を産む事の出来ぬ体になってしまうから。
久茨はその子宮の傷を治そうと、綏の子宮の上に掌を置き霊力を込めようとした。
そしてその瞬間、動きを止めた。
（子を産めぬ体…）
久茨はぼんやりとその言葉を頭の中で考えた。
（恐らくこの体では男に嫁げまい。こんな体の女など誰も欲しがらない。もう貰い手が無くなったといっていいだろう）

久茨に失っていた悦びが再び込み上げてきた。
（それで良い。私の側に居ればそれで）
久茨は安堵と悦びを感じ、綏の下腹部から掌を離し、再び意識を失っている綏の側に手を着き覆いかぶさった。
そして唇を重ね、小さな口腔を犯す。
久茨はその白く小さな体を再び堪能し出した。
壊れてしまえば良い。
誰にも目を向けて貰えぬ程に。
そして既に壊れている綏の体を更に壊すため、久茨は再び弄びだした。
この時、久茨の精神は崩壊していた。

十

明け方、太陽の光が久茨の重い瞼を開かせた。
久茨はその薄い光を読み取り、今がまだ卯の刻（日の出）なのだろうと悟った。
その光を見た後、腕の中にいる裸体の綏を確認した。
温かく湿った息を規則正しく吐いている。
憔悴しきった表情をしているものの、自分の腕の中に納まっている。
久茨は自身の腕の中に綏が居る事に安堵し、そして空ろな記憶を冷静に探った。
あの後何度も綏を犯し続けた。
痛みで綏は何度も目を覚まし、そして何度も意識を失った。
自分が立て続けに五、六回目の絶頂を、否、意識が混濁しながらも更に綏を犯し続けたからもっと多くの絶頂を迎えただろう後、疲れて寝てしまったのだ。
こんなに立て続けに女を抱いたのは初めてだ。
尽きる事のない快楽に満たされて、その欲求も尽きる事はなかった。
久茨はそう思いながら、再び綏に口付けてから起き上がり、脱ぎ捨ててあった夜着に袖を通そうとした時、自分の手に目を奪われた。
指だけではなく、腕にまで乾燥した血が付いていた。
どれだけ綏を犯したのか記憶が定かではないが、よほど荒々しく弄んだのだろう。
久茨はその事を確認すると、綏の裸体に目を降ろした。
綏の白い腿には血の痕が幾筋も流れ、その下の褥には鮮やかな真紅の血の跡が飛び散っている。
久茨は暫くその様子を眺めた後、綏の露わな下腹部に掌を置いた。
傷を治す為ではなく、唯痛みを無くすための霊力を其処に与えた。

憔悴しながらも安らかに眠っている綏の表情が好ましく思え、目覚めた時に苦痛に悶える姿を想像すると酷く不快に感じたからだ。
昨晩は自分だけを見る歪んだ表情に悦びを感じたが、今は安らかな表情の方が好ましく思えた。
霊術を施した後、久茨は綏の血が所々に付いた自身の身に純白の夜着で纏って、綏を残し寝所を離れた。
そして常時部屋から少し離れた所に控えている女官に湯浴みの支度を命じ、汐路を呼び出した。
汐路は直に現れた。
汐路はこの昭洸殿を取り仕切る女官として、責任感が強く、常々まだ日が昇りきらぬ内から仕事に就き他の女官達を指揮している。
その日もまだ明け方だというのに、汐路は髪を綺麗に結い上げ、化粧も整え、久茨の乳母に相応しい木賊色の小袖に、柳色の四季花風文の打掛を纏い、豪華だが大人の落ち着きを醸　し出した上品な姿で登場した。
「お召しにより参上いたしました」
そう言って夜着のまま部屋の上座に座っている久茨に深々と頭を下げる。
「顔を上げよ」
その言葉で汐路は優雅に上体をおこし背筋を伸ばした。
「今日一日綏の側に付き、あれが痛みを訴えたら、お前の霊術で抑えてやれ」
「痛みですか？」
汐路は疑問の目で久茨を眺めている。
汐路が疑問に思うのも不思議ではない。
普段から同僚女官の虐めで負っている綏の傷は久茨が全て治癒していた。
この治癒霊力は貴重なもので、いくら霊力の高い貴族や皇族でも備わっていない者が多い。
霊力は撃、縛、盾、そして癒の四つに分類されている。

その霊力保有者の殆どのが扱えるのは、撃、縛、盾の三つで、癒を扱えるのは稀だ。
しかし汐路にはその癒が備わっていた。
だが普段綏が女官達の虐めで負った怪我を、久茨は汐路に治癒する事を禁じていた。
どのような怪我を負わされているのか、自身で把握したかったからだ。
その為いつも久茨は自身で綏を治癒していた。
「あの、久茨様でもお治癒出来ない程の傷を、綏さん負われたのですか？」
汐路は綏の身を案じるかのように声を震わせた。
確かに綏の傷は大きい。
高い治癒霊力保持者でも、その殆どは外面的な傷しか癒せず、内臓の傷は癒せない。
そんな事が出来るのは、北国にいる代々隔絶的な治癒霊力を生まれ持つ彼の有名な和泉（いずみ）家の者だけだろう
しかし久茨は四つの霊力を均等に、そしてその四つ全て次元を超えて備えていた。
治癒霊力も和泉家の現当主に匹敵するするといわれている。
その久茨が治癒出来ない程の怪我を綏が負ったのだと汐路は恐怖しているようだった。
「命に関わる傷ではない。今日一日、痛みを感じないくらいの霊力は既に施しているが、あれが痛みを「訴えるようなら、痛みを抑えてやれ」
久茨はこの時少し安堵していた。
汐路は綏の痛みを和らげる事は出来ても、子宮の傷を治癒する事は出来ない。
汐路だけでなく、ここ西国には久茨を置いて一人も居はしない。
その事が久茨を安堵させた。
「…畏まりました」

汐路は再び頭を下げた。
「私はこれから皇宮に赴く。あれの事を頼んだ」
「綏さんはどちらに？」
汐路が真剣な顔で尋ねてきた。
「私の寝所にいる」
「今お会いさせて頂いてもよろしゅう御座いますか？お体の具合が気になります」
汐路の表情と声は綏の事を心配している様だった。
「ああ」
久茨のその言葉で、汐路は珍しく足を急がせながら寝所の襖を開いた。
そして開いたと同時に慌しく駆け出した。
久茨は、その不快に感じる物腰を横目で黙殺する。
汐路は裸体の綏の側に駆け寄り、その姿を両手で口を覆いながら眺めていた。
「ひ、久茨様、これは…」
汐路の声は、女官の鏡と言われている人物とは思えないほど掠れている。
久茨はその品のない声に苛立ちながらも、汐路と寝ている綏の方向に体を向けた。
「昨晩抱いた。傷の程度が酷い故、痛みを訴えたら治癒を施せ」
汐路は何も言わず、綏の姿を驚愕の表情で眺めている。
久茨はそんな汐路の無作法な態度に苛立ちを募らせた。
「綏をこの部屋から出すな。面会も許さぬ。見張っていろ」
冷酷で静かな氷の口調で汐路に命令した。
そして汐路は綏を眺めた後、肩を震わせながら久茨に頭を下げた。
「…お心のままに」

十一

（温かい）
肌に何か温かく湿った何かが当たっている。
くすぐったいくらい柔らかい仕草で、肌を撫でられている。
綏は肌に感じるそのくすぐったさで、ゆっくりと覚醒した。
「あ、起こしてしまいましたか」
綏の視界に映ったのは、汐路だった。
その顔はやつれたように弱々しく、そして手に白と赤の混じった、微かに湯気が立っている手拭を持っている。
先程感じた暖かいものは、どうやらそれのようだ。
しかしその手拭に違和感をもった。
どこか不自然な文様をしているのだ。
白い布地に、不自然な大小疎（まば）らな赤い斑点（はんてん）。
文様というより、まるで血が付いているような…。
血が。
「あ…、ぁ、ぁ」
綏は小さく悲鳴を上げた。そして身体を震わす。
「す、綏さん！」
「……ぅぅ、ひっく、う」
綏は顔を手で覆い泣き出した。
昨日の悪夢を思い出したのだ。
（何で久茨様が私にあんな痛いこと？何をされたの？）
まだ十歳で何の知識のない綏には、昨日のことが一体何かも分からなかった。
母親とずっと二人で漫遊をしていた綏は、男の身体のことなど何も知らず、自分にはない物があることすら知らなかったのだ。
そしてそれが自分の中に入れられた。
綏は自分にそんな道があることも知らなかった。

自分の身体のことも、男の身体のことも知らなかった綏に、何も理解できる筈がない。
ただいけない事だというのは、本能で感じとった。
「……ぅ、ぅ」
綏は声を殺して泣き続ける。
「――どこか、痛みますか？和らげて差し上げます」
綏は汐路の言葉に返事などすることが出来ない。
汐路はそれ以上何も言わず、黙って綏の身体を暖かい手拭で拭きだした。
綏も何も言わず、黙って汐路に身体を任せる。
しかし足を拭いていた手拭が、徐々に太腿に上がって行き、そして秘所に宛がわれた。
「いやぁ！」
綏は羞恥して慌てて上半身を起こす。
綏が飛び起きたことで、汐路の手が止まった。
「や、やめて下さい…」
綏は汐路の手をそこから離させた。
そして下半身の下にある敷物を見て我目を疑った。
水溜りのように赤く染め上がっていたのだ。
足から太腿は、汐路によって既に拭かれていたので綺麗なものだったが、敷物はそうはいかなかった。
最中の時に、既に血が出ている事に綏は気づいていた。
あの痛みだ。
血が出ているだろうと思っていたし、生暖かい液が太腿に流れている感覚があった。
そして久茨の手や指に血が付着しているのを、動かない視界でも確認出来ていた。
しかし此処までとは想像していなかったのだ。
「し、汐路様、これ、何？」
赤い液体の正体を聞いているのではない。

自分の身体がどうなってしまったのかを聞きたいのだ。
この夥(おびただ)しい血が、全て自分の秘所から流れ出た事は明らかだ。
まだ初潮の来ていない綏にとって、ありえないことだった。
あり得ない場所から、ありえない量の血が出ている。
その事が綏を恐怖に陥れた。
「何？これ…。私、どうなったの？」
綏は縋るように汐路を見つめる。
しかし汐路は痛々しいほど顔を歪ませ、視線を反らした。
「これは、だ、男女が結ばれた証です。ご心配いりません。初めて男性に抱かれた時、皆も同じようになるのです」
汐路は声を震わせて言った。
しかし汐路はこの時もう気づいていた。
破瓜であっても、これ程の量の血がでる筈がない。
月経かと思ったが、それも違う。
この血の理由は、もう一つしか考えられなかった。
そう。子宮が壊れたのだ。
綏の年齢と年齢以下の小さな体形。
その事を考えれば、余計に納得させられた。
「抱かれるって何？抱き締めあうこと？」
綏は不安げに汐路を見つめる。
汐路はその声に驚いた。
いくら十歳といえども、男女の営みくらい大雑把にはもう知っていると思っていたのだ。
しかし考えてみると、綏にそのような知識をいれるような人間など、一人も居ない。
家族もなく、知り合いの大人もなく、女友達すら一人も居ないのだ。
汐路は居た堪れなくなった。
「綏さん。綏さんは、久茨様に抱いて頂いたのです。驚かれたかもしれませんが、これが大人の男女の愛し方なのです。皆もしている

普通の事なのです。だから怖がる必要などありませんよ」
「愛？あんなことが？」
「そうで御座いますよ。男女が愛し合えばする当たり前のことなのです」
「…ち、違う。久茨様は、私を嫌いになったから、あ、あんなことを…。だって、あんな…」
綏は微かに治まっていた涙を、再び滝のように流した。
綏には理解出来なかった。
それも当たり前のことだ。
霊術で四肢の自由を奪われ、声も奪われ、本当の玩具にされたのだから。
子宮を壊され、血が溢れ出し、それでも尚、弄ばれ続けたのだ。
逃げる事も、誰かに救いを求める事も、痛みを訴えることさえも出来ずに、唯延々と傷を抉られ続けたのだ。
「誰でも初めは戸惑うもの。久茨様は綏さんを愛しいと思ったから、きっとお抱きになられたのです」
「違う…。嫌いになったんです。きっと、昨日の朝、久茨様を怒らせたから…。だから、あんなこと…。ひ、久茨様、私に霊術をかけて、まるで、お人形のように…」
「――――…霊術…」
汐路は綏の言葉に血の気を失い、もう何を言っていいのか分からくなった。
そして言葉が見つからない汐路は、黙って綏を抱き包んだ。
そうする事しか、もう汐路には出来なかった。
泣き続ける綏を、ただ黙ったまま、何時間も抱き包み続けた。

十二

久茨は昨晩と同じく、湯浴みを済ませた後、花の香に包まれた長い廊下を渡って、自室まで辿り着いた。
昨晩と違い、その部屋からは灯りが漏れている。
久茨は何も言わずに黙って部屋に入った。
…カラン
「久茨様」
カランと何か小さな物が落ちた音の後に、汐路の声が飛び、そして久茨に向かって頭を下げた。
久茨はそれを黙殺すると、汐路の前に座っている綏に目を向けた。
青ざめ、魂をぬかれた表情で久茨を見上げながら、動きが固まっている。
もう湯浴みを終えたのか、清潔な白絹の夜着を着ていた。
綏と汐路は囲碁を打っていたようで、綏の手は基盤の上で浮いて止まっている。
先程の小さな音は、綏が基盤に基石を落とした音のようだ。
顔は久茨を見上げているが、その体は一向に動く気配はない。
普段綏は、汐路と同じように、久茨の姿を確認すると直に、反射したように頭を下げているが、今日はその気配すら窺えない。
「汐路、何か変わった事は？」
久茨は綏の姿を確認すると、再び頭を下げている汐路に目を向けた。
「はい。綏さんは体や下腹部の痛みを少しばかり訴えられましたが、大きな痛みを訴える事はなく、朝と夜の二度、湯浴みをする以外、此方でお過ごしです」
「そうか」
久茨は再び綏に目を向けた。
綏は変わらず青ざめながら固まっている。

「汐路、下がってよい」
「あの、久茨様。綏さんは食欲も無く、お体の方は些か優れぬ御様子。それで、綏さんは、今宵はもう宿舎に戻りたいと願い出ております。慣れた自室で休みたいと」
久茨は汐路の言葉に苛立ちを覚えた。
「聞こえなかったのか？下がれと言った筈だ」
「いえ下がれませぬ！宿舎がいけぬのなら私の部屋に」
「汐路」
久茨は、命を無視し、下がらない汐路に怒りを爆発させた。
片手を上げ、汐路に霊撃を打つ構えをした、その時。
「し、汐路様。どうかもう、お下がりになって下さい」
終始、固まったまま久茨を見上げていた綏が、久茨を見上げながら、小さく掠れた声で言った。
汐路は驚いた顔で綏を見つめる。
「…有難う御座います、…汐路様」
綏は固まって久茨を見上げていた顔を、囲碁台を挟んで前に座っていた汐路に向け、笑って言った。
だがその表情は引き攣っている。
「もうお下がり下さい。今日一日お世話して頂いて恐縮でした。有難う御座います」
綏はそう言って囲碁台から少し下がり、汐路に頭を下げる。
汐路は目を見開きながら、平伏している綏を眺め、その顔を直に引き締めた。
そして久茨に向き直り、再び深く頭を下げた。
「出すぎた事をしてしまい、申し訳御座いませぬ」
久茨は汐路のその姿に、少し苛立ちが収まり、霊撃の構えをしていた腕を下ろした。
「早く下がれ」
「はは」
そう言って汐路は、柳色の打掛を床に擦りながら、ゆっくりと退

室していった。
久茨はそれを横目で確認した後、未だに汐路の座っていた方向を向いて、頭を下げている綏の傍らに膝を付き、その髪に触れた。
その体は震えている。
「わたし、もう帰ります。物味遊山の予定もなくなったし、明日から仕事に戻ろうかと。だから……」
綏は、顔を床に付けたまま、震える声で言葉を発した。
久茨は綏の髪を梳きながら、その言葉を無表情で聞く。
「もう仕事には行くな。昭洸殿に部屋を与える。そこで暮らせ」
「いいえ！厭です！私はもう宿舎に帰ります」
床に顔を付けている綏が、そのままの姿勢で篭った叫び声を上げた。
「昭洸殿に住むくらいなら、後宮を出て行きます！」
久茨はその言葉を黙殺し、梳いていた綏の髪を耳に掛けさせ、そこに冷酷な声で囁きを落とした。
「あまり私を苛立たせるな」
綏の震えていた体が更に震え上がる。
久茨は頭を伏している綏の体を起こさせ、そして自身に顔を向けさせた。
その顔は、怯えと恐怖を滲ませ歪んでいる。
そして紫の瞳は、今にも涙が零(こぼ)れ落ちそうなほど潤っていた。
久茨はその瞳に魅せられながら、綏の小さな唇を乱暴に自身の唇で塞いだ。
「うう」
綏が篭った声を出す。
久茨は綏の震える唇を舌で掻き分け、その小さな口腔に侵入した。
綏の小さな舌が逃げまわる。
久茨はその事に悦びを感じた。
昨晩、一度霊術は解いたものの、また直にかけ直した為、綏の体は身体だけでなく、舌すら動く事はなかった。

久茨は綏の舌に満足しながら、逃げる小さな舌を絡み捕り、吸い上げ、その舌の奥に在る咽に、自身の舌を圧し込む。
綏の小さな口腔は、久茨が深く侵入した事により、一分の空気の通る隙間も無くなっていた。
「ぅんん」
綏は苦しさに耐えかねて、久茨の胸を叩く。
久茨はその行動を無視し、綏の口腔を味わい続けた。
そして、その咽に自身の体液を流し込んだ。
綏の咽が鳴る。
久茨はそれに満足し、苦しがっている綏を解放した。
「…ごほっ、けほっ」
綏はむせ込みながら、肩で大きく息をしている。
久茨はその状態を観察しながら、再び昨晩の狂気が沸き起こってきた。
昨晩の溺れる快楽と、溢れでる悦びを久茨に思い出させる。
久茨はその充足を再び求め、寝所に運ぶため、むせ込んでいる綏を軽々と抱き上げた。
「なっ、何を…、降ろして下さい！」
綏は久茨の腕の中でじたばた暴れだした。
久茨はその事で、更に狂気にかられ、掴んでいた細い綏の腕の骨を、折れるほど力を込める。
「痛…！」
苦痛の声とともに、綏の抵抗は無くなり、次はそれに変わって泣き出した。
「…お、願いします…。宿舎に帰らせてくっ、下さい」
しゃっくりを上げながら懇願してくる。
久茨は寝所の襖の前で来ていた足を止め、泣いている綏の顔を冷酷に覗き込んだ。
俯き、体を震わせ、咽を痙攣させながら泣いている。
「私を苛立たせるなと警告した筈だ。二度とその言葉を口にするな」

そして綏を抱いている片手で、荒々しく扉を開いた。
寝所に入ると綏を寝台に放り投げ、すぐに扉を閉めて、そこを密室にする。
「っひく、…う」
綏は咽を痙攣させながら、涙に濡れる顔を両手で顔を覆っている。
久茨は、泣きながら仰向けになっている綏の上に、体重をかけないよう肘を立てて覆いかぶさり、顔を覆っている手を退けさせた。
「明日もこの部屋にいろ」
綏の返事はない。
久茨はその事は気に留めず、再びその唇を奪った。
綏の手が久茨の肩を掴み、そこから離そうとする。
久茨は、綏のその手を外し、片手で綏の頭の上に固定させ、そしてそのまま口腔を味わい続ける。
十分堪能した後、そこから顔を離し、両手首を固定したまま綏を眺めた。
もう諦めたのか、言葉を発する事はせず、ただ泣きながら顔を背けて震えている。
久茨はその姿に充足し、自由な片手で綏の帯を解いた。
綏は足をバタつかせたが、そんなもの久茨には何の抵抗にもならない。
弱々しく暴れている綏を無視して、夜着を脱がすと、その身体に目を這わした。
その白い肌には、昨晩久茨が付けた紅い花のような小さな痣が、胸元はもちろん、鎖骨や脇腹、腕や太腿、足の付け根に至るまで、余す所なく咲き乱れている。
そして、久茨は綏を固定していた両手首を放した。
その事に安堵したのか、綏は体を起こそうと身を捩(よじ)ったが、久茨はその体を褥に押さえつけた。
そして、綏から剥ぎ取った細い帯の紐を寝台の柱に回し、その両端を綏の両手首にきつく縛り一つに束ねた。

「ひ、久茨様、厭…こんな」
綏は体を震わし、頭を動く範囲で起き上がらせて、久茨の顔を見つめながら懇願してきた。
久茨は綏の顔を少し眺めたあと、昨晩自分が付けた紅い痣に目を向けた。
そして、少し起き上がった綏の上半身を再び押し倒し、その痣を唇で一つずつ辿って行く。
その痣に唇を這わし、舌で舐め、そして吸い上げ痣をより鮮やかにしていく。
首から鎖骨、胸周り、その頂、徐々に下がって、下腹部の痣を吸い上げた後、綏の太腿を持ち上げた。
「…ひ、久茨様。ど、どうか、っもう、お許し下さい」
綏の痙攣した泣き声が、久茨に再び懇願する。
久茨はそれを黙殺し、太腿の内側に咲き誇っている多数の紅い花を、同じように口で味わった。
「…ぁ」
綏が小さな嬌声を上げる。
その声が、久茨の神経を刺激し、今迄以上に深い吸い上げ、執拗に舌で弄ぶ。
「厭ぁ…、あ」
幼く、それでいて可憐な色気のある嬌声に、久茨は酔いしれた。
暫く内腿と嬌声を堪能した後、再び綏の唇を奪った。
綏の瞳は妖しく濡れ、頬が紅潮している。
久茨は口腔を味わった後、再び綏の太腿を持ち上げ、そして、その間にある桜色の小さな秘所に唇を這わした。
舌で味わい、芯を指で刺激する。
「…ぁぁ」
綏の小さな嬌声が溢れ出す。
久茨は芯を指で刺激しながら、綏の小さな膣に舌を捩じ込んだ。
「くぅ」

綏は先程の嬌声とは違い、苦痛の声を漏らす。
子宮の痛みは抑えてあるが、膣の痛みはそのままのようだ。
あれ程何度も犯したのだから、膣内の傷もさぞ酷かろう。
久茨はそんな事を考えながら、更にその奥に舌を侵入させる。
「痛い、よ」
綏が痛みを訴える。
久茨はそんな綏をなだめるように、指で芯を愛撫し、自由だった手で内腿や胸の突起を刺激した。
暫くし、綏の道が潤いだすと、舌を抜き、今度は指をゆっくりと挿入させる。
「ああーーーっ」
苦痛の叫び声が寝所に響く。
久茨の綺麗な長い指が、先程より大きな痛みを綏に与えた。
久茨は指の付け根まで挿入させた後、ゆっくりと出し入れさせる。
動かす度に、綏の苦痛の叫びが上がった。
綏は痛みに耐えられないのか、泣きながら、寝台の柱に結ばれた手の紐を、必死に引っ張り、柱から引き千切ろうとしていた。
久茨はその光景を眺めながら、更にもう一本の指を捩じ込ませる。
「あぁぁぁーーーっ！！」
綏が再び苦痛の叫びを上げる。
昨晩にもう理解していた事だが、やはりに二本挿入すると、綏の体内はいっぱいになり、久茨の指を締め付け、指の動きを暫し止めさせられる。
拒む綏の道を、久茨は押し開きながら指を出し入れさせた。
そして、綏の意識が昨晩と同じように薄れていく。
久茨はその表情を確認した。
意識を失っては面白くない。
そう思った久茨は、何の躊躇もなく、綏の頬を平手打ちした。
腫れ上がる程、青痣が出来る程強い力で。
久茨が綏を殴るのは初めてだ。

妹のように大切にしてきた少女。
しかし今の久茨にとって綏は妹ではなく、大切でもなく、唯の所有物。人形だった。
綏の貌が歪み、意識を覚醒させる。
口腔が裂けたのか、口から血を流していた。
流れている血の軌跡を拭い、綏の道から二本の指を抜き取った。
自身の夜着を脱ぎ捨てた後、潤った道に自身の熱を当て、そしてゆっくりと挿入させる。
「あああぁぁぁぁーーーーっ！！」
綏は先程以上に苦痛に悶え、柱に繋がれた紐を激しく引っ張る。
昨夜に開拓した筈の道は、それでもまだまだ狭く、久茨は自身を挿入させるのに苦労させた。
しかし挿入した後は、潤いがあり滑が良く、難なく奥へ侵入する事が出来たが、その細い道は、やはりそれに不釣合い大きさをもつ久茨の塊に少し痛みを与えた。
久茨は痛みで表情を歪ませながらも、その動きを止めず、全て侵入させた後、勢いよく引き抜き、そして再び奥まで叩きつけた。
「あああああぁぁぁ」
綏の悲痛な叫びが部屋中に響き渡る。
久茨は少しの痛みと溢れる快楽に満たされ、そのまま出し入れさせた。
「っい、い、痛い、よ、た、助け、て…」
それは昨晩、久茨が聞くことの無かった綏の慈悲の言葉だった。
久茨は欲望に支配されて、その動きを止める事はない。
「…ひ、久、茨様、もう、止めて」
綏が再び慈悲を求める。
久茨はその声と表情が愛しく思い、再び引き攣れた唇に再び口付けた。
綏の唇は痛みと恐怖の為に震えており、先程必死に逃げていた小さな舌もそれほど動く事はなく、久茨に弄ばれるがまま、じっと大

人しくしていた。
そんな綏の口腔を味わいながら、秘所の道を楽しみ、次第に腰の動きを速くさせていったその時、久茨を締め付ける細い道が、更に壁を狭め激しく痙攣を繰り替えした。
綏の体液が痙攣とともに泉のように溢れ出したため、潤滑を良くし、久茨を更に奥へ誘(いざな)う。
久茨は深い快楽に誘われて、綏の最奥へと自身を侵入させる。
絶頂を迎えた綏は、突き上げる度、壊れた人形のように揺れ動いていた。
綏の道は透明な体液でとめどなく潤い、久茨が少しも動きを止めないため、収縮が収まらず痙攣し続けている。
その道は久茨に、これ以上ない程の快楽を与え、その快楽を暫く堪能した後、とうとう堪えきれない波に襲われた久茨は動きを速め、深く荒々しく綏を突き上げ、絶頂を迎えた。

十三

それから三年の年月が流れ、久茨（ひさし）は二十歳に、綏（スイ）は十三歳になっていた。

その間、久茨は、父、六十代目白帝が病で亡くなった為、六十一代目白帝の座についた。

六十代目白帝は、病に倒れてから崩御するまでの二月の間、久茨や和泉家のような、どんな高い治癒霊力保持者でも、病気やその類は治癒出来ない事知っていながら「息子の久茨になら出来る」「皇太子をここに」と、ひたすら訴え続け、そして、久茨はそんな六十代目白帝を煩わしく思い、とうとう一度も見舞う事が無いまま、六十代目白帝は崩御した。

そして、六十一代目白帝の座に久茨が即位し、次の皇太子の座に、現時点で久茨の次に一、二を争う霊力保持者の、春日と吉峰の二人の名が挙がり、久茨は春日を就ける様に推したが、春日が辞退し、他の兄弟に、吉峰以上の霊力保持者がいなかった為、渋々了承を下し、吉峰が立太子した。

久茨の即位と同時に、後宮は久茨の物となり、そこにいた父の全ての女達は、後宮に住む権利をなくし、後宮を離れて行き、帝の生母として後宮に住み続ける事が許される久茨の母も、「どんどん年若い　女がやってくる後宮で暮らすのは、老ける一方の自分には辛い」といい、同じく後宮を離れた。

女達が去り、寂しくなった後宮だったが、久茨が今迄煩わしいと断っていた縁談が、即位してからは　世継ぎの事が本格的と成り、その時点で正妃も妻も居なかった久茨は、とうとう断る事が出来なくなり、次期后候補に挙げられる都の有力貴族の姫が三人嫁いでき、久茨の女御（妻）として後宮で暮らし始め、その者達が、先帝の妻達が去り寂しくなった後宮の色を、一新させることとなった。

だが、久茨にはそんな事はどうでも良かった。

「いや！もう、お許しくださいこれ、以上はもう…ああ！」
綏（スイ）の悲痛な掠れ声が、帝の御殿である大鳳殿（たいほうでん）、白帝の寝所に響く。
久茨はその言葉を黙殺して、容赦なくその秘所に腰を叩きつける。
三年経って綏は僅かだが成長した。
綏は昔から成長が遅く、十三になった今も他の十三歳の娘と比べるとやはり小さい。
遅いというより若（も）しかしたら、元々大きくならない体質なのかもしれない。
だが確実に女の肢体になりつつある。
以前は肩までしかなかった髪も、今背を覆うほど美しく伸び、全くなかった胸も僅かに膨らんでいる。
身長も僅かだが伸びた。
顔付きも心成しか大人びた気がする。
久茨は徐々に成長してゆく綏に満悦していた。
「お、お許し、…下さい…ひっく、ぅ」
綏は咽を痙攣させながら泣き出した。
しだいにその痙攣は全身に広がっている。
嫌々と頭を振り、寝台の柱に繋がれている両手首を、動く範囲で必死に動かしている。
千切りたいのだろう。
しかし綏の力で解けるほど、久茨は緩く結んでいない。
無駄な足掻きだった。
久茨は綏に霊術をかけて体の自由を奪うことは、唯一度を除いてはしなかった。
久茨は綏の身悶えする姿を好み、自由にさせて、その姿を堪能していた。
何も縛らず寝所や寝台に結界を張り、その中を自由に逃げ惑わす

事もあれば、手だけではなく四肢を　全て縛り雁字搦めにすることもある。
結界や紐を使わなくても、綏の抵抗など久茨にとっては虫のようなものだったが、そうする事で恐怖心を煽ることが出来る。
泣き叫び結界の壁を叩く姿や、紐を必死で引き千切ろうとする姿は、久茨をそそらした。
久茨は幾筋も涙を流している綏に満足して、その頬を撫でた。
もう見慣れた光景だ。
しかし久茨は、その光景に飽きる事はない。
支配されている綏に悦びを感じずにはいられなかった。
綏の膣と体は痙攣が治まらなくなっている。
綏はいつも限界になると泣き出し、懇願してくる。
久茨はその姿が好きだ。
これを支配しているのだと、一番悦びを感じられる瞬間だった。
久茨はその姿を暫く眺めてから、綏の涙を指で拭い、仰向けの綏を荒々しくうつ伏せた。
そして腰を持ち上げ、後ろから再び攻め立てる。
綏は泣きながらも、下を向いたことにより、一つに縛られた自分の両手首の紐を見ることが出来るため、何とか解こうと指を動かしている。
しかし指しか動かす事が出来ず、そして、その指では紐のある手首に届かないため、直にその事を諦めた。
そして今度は、紐が回され繋げられている寝台の柱を掴んで立ち上がり、久茨の塊から少しでも離れようとしだす。
久茨は逃げようとする綏の体の肩を片手で褥に押さえつけ、もう片方の手で恥骨に指を食い込ませ腰を固定し、腰を叩きつける。
「あ、ぐ、……ぅ」
その度に、小さな体は悲鳴を上げ、がくがくと揺られる。
この体位も綏の弱点だった。
より深く綏の道に久茨が侵入できる体勢の為、更に綏を身悶えさ

せた。
暫くその体勢で刺激していた時。
「あ、ぁ！」
綏の嬌声とともに、再び痙攣していた道から透明な体液が溢れ出し、激しい収縮を繰り返す。
今日何度目かの絶頂か知れない。
久茨は収縮を黙殺し、止まる事無く綏を刺激し続けた。
綏の体は久茨を魅入らせて止まない。
涙に濡れ煌く紫の大きな瞳。
絹のように柔らかい髪に、汗ばみ手に吸い付く白い肌。
感度を増す事により妖しい紅に染まる小さな胸の突起。
そして毎夜欠かさず、数え切れぬほど抱いても、変わる事無く処女のように細い道。
その全てが久茨を虜にした。
久茨は、再び絶頂を迎え痙攣しながら収縮を繰り返している綏の道を、深部まで刺激し続けた。
しかし、暫く経つと、綏の泣き声は消え、柱を掴んでいた手も離され、何の抵抗もみられなくなった。
膣内は痙攣し続け、その壁からも透明な体液が滲み出しているが、その体は動く気配が無い。
（また気を失ったか）
久茨は綏の腰を掴みながら憎々しげに思った。
そして再び、互いを結合させたまま、綏を仰向けに戻す。
その顔は、涙の跡を残しながら瞼を伏せ、意識を手放していた。
久茨は、綏が体を震わせ悶えしている姿を好んでいる。
しかし、綏は多々こうして意識を失い、久茨を苛立たせた。
久茨は綏からまだ達していない自身を引き抜き、そして綏を起こす為、腕を振り上げ、勢いよく平手打ちした。
ばしっという大きな音が鳴り、綏は瞼を震わせる。
しかし目は開かず、顔を歪ませたまま、起きる気配はない。

そのため久茨は更に強く、頬を殴った。
「うぅ」
綏は顔を歪ませながら、少しずつ目を見開く。
そして、ようやく覚醒した綏は、久茨の覗いている怒りの表情に身を震わせた。
「意識を集中させていろと言った筈だ。何度も言わせるな」
そして久茨は、綏の細い太腿を持ち上げ、綏の秘所に自身を暴力的に叩きつけた。
「あぁぁぁぁぁ――――！！！」
綏の苦痛に滲んだ叫び声が響く。
綏は未だに痛みを訴えることが多々ある。
恐らく昔、久茨がその内部を壊したからだろう。
久茨はその事を知っていた。
その為、普段から力加減をしていたが、苛立たされた時や、自分の機嫌が悪い時は、無慈悲に荒々しく突き立てた。
暴力的に綏を刺激しながら、久茨は綏の表情見下ろした。
顔は歪み、その瞳は再び涙が溢れ出している。
「…っぅく」
声になっていない泣き声が綏の痙攣している咽から漏れる。
その表情と声に満足した久茨は、終わりに向けて更に凶悪に綏を刺激し突き立てた。
その刺激で、再び痙攣していた綏の道が激しく収縮を繰り返し、そこから体液が溢れ出す。
久茨はその収縮に刺激されて、古傷の子宮を痛めつけるようにより深く激しく、最奥まで突き上げた　後、そこに白濁の体液を注ぎ込んだ。
行為が終わった後、綏は手首を紐で縛られ、腕を上げた状態のま

ま、直に眠りこけた。
綏は行為が終わると、安堵からか疲れからか、いつも直に深い眠りについていた。
久茨はそんな綏の紐を解き、抱き包んだ。
この三年で、久茨と綏の関係は兄と妹から、君主と奴隷と化していた。
久茨は綏に寝所だけでなく、普段から暴力を振るう事が多々ある。
綏が思い通りにいかないと、抑えられない怒りにかられ、気がつけば手を上げていた。
霊撃をつかうような事はなかったが、肌が浅黒くなるほど殴ってしまう事がよくある。
そして寝所の中では、更に傷つけた。
手首を縛り、殴り、歯形が一月残るほど強く噛み付けることもある。
綏の全身には、久茨が口で吸い上付けた無数の紅い痣の他、何度も紐や帯で縛り上げた為できた手首の浅黒く変色した痣、血が滲むほど鮮やかな歯形の痣など、数え切れない無数の痣が舞い散っている。
久茨は、それが自分を不快にさせるもの以外は治癒してやる事はなく、また他の者に治癒させる事も許さなかった。
綏は下仕の仕事を辞め、以前久茨が暮らしていた昭洸殿(しょうこうでん)に、ほぼ外から出す事無く暮らさせているため、女官に殴られ痣をつくる事は無くなった。
しかし、今は久茨が毎夜痣を付けるため、その痣は以前と同じように途絶える事はない。
久茨は腕に抱き込んでいる綏を眺めた。
先程久茨が二度殴ったため、頬が紅くなり、醜く腫れあがっている。
久茨はその頬を良く思わず、治癒を施した。
見る見るその頬は、白く艶やかな肌に戻る。

久茨はその頬に満足し、そこに唇を這わし、舌で舐め上げ、そして再び強く抱きこむ。
久茨は三人の妻を抱くことは一度も無かった。
煩わしく、抱きたいとも思わなかった。
しかし、綏の事は飽きる事無く毎夜抱き続けていた。
直休ませる事もあるが、朝まで寝かさずに抱くことも多々ある。
久茨は綏が居ればそれで満足でき、他の女など目にも映らなかった。
この時久茨は、綏を支配している事に悦びに満たされ、そして、狂っていた。

十四

――――体が、…痛い。
綏は久茨が去った後、体の痛みを感じながら目を覚ました。
そして、重い裸体を起こし、乱れた褥を見る。
――――昨日は、あれで済んでよかった。
綏は昨日の事を思い出しながら、顔を歪ませた。
（体が痛い）
綏は久茨に毎夜抱かれている為、体を休ませる事が出来ず、その痛みを蓄積させていた。
体の重みはとれず、節々が痛み、そして、体内の道はもう悲鳴を上げている。
幾ら潤ってはいても、容赦ない硬度と質量をもった久茨自身を受け止めるには、まだ十三の成熟しきれていない綏には酷く負担が大きかった。
その上、一晩に何度も繰り返し犯される。
酷いときは朝まで寝かしてもらえず、殺されるかと思う程苦しめさせられる。
それが毎夜続くのだ。
綏に月経はなく、言葉通り本当に毎夜だった。
綏は、十三歳になる自分に、何故初潮がこないのか知っていた。
久茨に初めて抱かれた日に、自分は子供を産めない体になったと。
綏の周りにいる、汐路や、僅かな者達はその事を綏に教える事はしていなかった。
だが、綏は知っていた。
しかし、汐路様達が隠そうとしているなら、自分は何も知らない振りをしなければと思い、誰にも言わなかった。
自分がもう子供を産めない体だと思うと、以前はよく一人で泣いていた。

しかし、この部屋に閉じ込められ、毎晩犯されている内に、自分にはもう未来はないのだと思い、そんな事は今の自分にはもうどうでもいい事だと諦め、今は一人で泣く事もなくなった。
その事は諦めがつき、少し気は落ち着いたものの、毎晩繰り返される悪夢が綏を絶望に叩き落していた。
昨日はあれで済んだけれど、今日はどうなるか分からない。
綏の体内の道は、既に限界を通り越している。
だが、綏にはそれから逃げる術がない。
久茨が訪れれば抵抗など出来ず、久茨が思うまま弄ばれる。
夜が来るのが怖い。
綏は朝目覚めては必ず、また今日訪れるだろう夜の行為を思い、恐怖に苛まれていた。
しかし、この日は違った。
確かに今夜も久茨は自分を弄びに来るだろう。
どれだけ犯されるのか分からない。
その事を考えると怖いのは確かだったが、それ以上に嬉しい事があるのだ。
綏は下腹部の痛みを感じながらも、いそいそと起き上がり、無残に床に脱ぎ捨てられている夜着を纏って、久茨に命じられ伸ばされた長い髪を軽く整えてから寝所を出た。
「あら、綏さん！　もう起きたの？」
寝所の隣にある綏の生活部屋には、長い黒髪を櫛と簪で綺麗に結い上げて、白い花々が所々に刺繍されている、美しい紅紫色の打掛を纏った、美しい女性が座っていた。
「香生（こうしょう）！」
綏はその女性の腕に、子犬のように飛びつく。
「あらあら、甘えん坊さん。今日は起きるのが早いのね」
「当たり前でしょ！だって今日は吉峰と遊びに行ける日だもん」
「ええ、ちゃんと分かっていますよ」
香生は微笑みながら綏の髪を撫でた。

香生は、綏の見張りをしている三人の女官の一人で、他の二人の監督をしている中臈の女官である。
始めの頃綏は、香生のことを嫌悪していた。
自分を部屋に閉じ込める久茨の手下だと。
実際綏は、何度も脱走を試みては、何度も香生と後の二人に捕まり、部屋に連れ戻されていた。
綏はその事を怨み、憎んでいた。
何度も脱走を試みては、何度も捕まり、そして脱走を試みた日は久茨に殴られ、暴力的に犯された。
次第に心を病み、逃げる事をしなくなった。
代わりに、部屋の隅に逃げるようにうずくまる様になった。
そんな綏に香生が、よく話し掛けてきた。
だが、綏は対応しなかった。
幾ら優しく話しかけられても、返事をせず、目も合わすことすらしなかった。
話し掛けるなと言わんばかりに、背を向けた。
しかし、半年程経っても、香生は話し掛けてきていた。
その頃になると綏は、無愛想な自分によく飽きず話し掛けてくるものだと不思議に思い、半年目にして綏は香生に初めて返事をした。
返事と言っても一言二言返す程度だったが。
その一言二言の返事でも香生は喜びその日から、それまで以上に話し掛けてくるようになった。
香生は、綏を貝合せに誘ったり、珍しいお菓子を進めてきたり、一言二言しか話さない綏に微笑みながら話し掛けてきた。
毎夜久茨に弄ばれ、部屋に閉じ込められ、話すと言えば時々心配をして顔を覗かせてくれる汐路だけだった綏にとって、それはとても癒やされる時間だった。
嫌悪していた香生に、綏は次第に心を開いていった。
始めの頃は一言二言しか話さなかった綏も、二月程経った頃には、自分からあれこれ話すようになっていた。

そして何時ものように双六で遊んでいた時、香生は突然綏に土下座をした。
香生は綏に、謝罪をしてきた。
閉じ込めている事を。
そして、これが仕事なのだと許しを求めてきた。
逆らえば自分ひとりの命だけでは済まず、家族にも危害が及んでしまうと。
自分の命はいい。
だが、家族の事を考えると逃がしてやれないと。
綏もその事は知っていた。
白帝の恨みを買えば一族もろとも処罰される。
中流貴族の香生の家など、白帝の前では一溜まりもないだろ事を。
香生の謝罪の日から綏は香生の事を理解し、今迄少しあった蟠り(わだかま)が解け、綏は香生のことが好きになった。
そして、綏が時々吉峰の話をしていると、突然香生が吉峰を連れてきた。
誰にも会わすなと命令されている筈の香生の行動に、綏は驚いた。
香生の話によると、自分は監督長だから後の二人をここに近づけさせないように出来る、だから、誰にも見咎められる心配はいらないとの事だった。
それから、数日に一度吉峰と部屋で遊べるようになった。
毎夜犯され弄ばれている綏にとって、それは掛け替えのない時間になった。
吉峰と遊ぶようになってから半年後、吉峰が、私を外に出してやりたい、といいだした。
綏は無理だと言い、吉峰に諭したが、香生が少しなら大丈夫だと言った。
綏は驚いた。
部屋を出るなんて、そんな事をしたら香生が罰を受けてしまうから。

綏が香生に怪訝そうに尋ねると、後宮では直に女官に見つかってしまうが、後宮をでれば誰にも見咎められずに遊べるとの事だった。
吉峰は直に大賛成したが、綏は乗り気にはなれなかった。
香生の身を案じたからだ。
それに、皇子（今は皇太子だが当時は皇子）の吉峰が外に出るなんて出来るのかと疑問だった。
しかし、香生は夕刻までなら、この部屋に誰も近づけさせないように出来る、と言った。
吉峰はその性格からか、行こう、の一点張りだった。
綏は考えた。
久茨が来るのは酉の刻（日没）以降だから、それまでに戻ればばれないかもしれない、と。
そして、反対はしたものの、綏は吉峰以上に此処を出たかった。
一年以上閉じ込められている牢獄から。
綏はその欲求に勝てず、賛成した。
香生の計らいで、四日後、綏と吉峰は町男と町娘に変装して後宮をでる事を決行した。
吉峰に護衛の者がいなくて大丈夫なのかと思ったが、よくよく考えると吉峰はこの西国で二、三番目の霊力を持っているのだから誘拐もされる心配もないだろうと納得した。
そして、綏は香生に必ず夕刻に戻ってくると言った。
香生は自分の命を張ってここまでしてくれた。
戻ってくると私を信用し此処までしてくれた。
その香生に綏はきつく約束をして後宮を出た。
後宮の外は綏を感激させた。
自由な時間とその町の活気は綏を存分に楽しませてくれた。
しかし時間は直に経ち、綏と吉峰は惜しみながらも香生の身を案じ後宮に戻った。
戻るとき綏は、ばれているのではないかと怯えたが、戻ってみると何事もなく後宮は穏やかだった。

その日から、綏は月に一度吉峰と町に遊びに行くようになった。
その密かな外出は二年近く経った今でも続いている。
そして今日がその日なのだ。
「吉峰はもう起きてるかな？」
綏は大きな紫の瞳を輝かせながら言った。
「辰の刻（午前九時頃）ですからね。きっと起きてもうご用意されていますよ」
香生は微笑みながら言った。
「もうそんな時刻なの！　じゃあ急がなくっちゃ」
「湯浴みの用意は整っていますよ。お手伝いさせてもらいますから、慌てなくても大丈夫ですよ」
「有難う香生、早く行こう」
「はいはい」
綏は香生の袖を引っ張りながら、行動を促した。
綏はいつも朝餉の前に湯浴みをしたがるので、香生は綏が起きる前にもう用意を整えてくれている。
その事に綏は感謝している。
秘所に固まっている互いの体液や、その他全ての情事の形跡を、早く洗い流したかった。
綏の部屋を出て直に、綏専用に作られた湯浴みの間がある。
そこに辿り着くと綏は、香生と二人で脱衣所に入った。
湯浴みの間には誰もいない。
この綏専用の湯浴みの間は、香生と後の二人の女官以外入る事が許されていない為、いつも誰もいない。
脱衣の間で夜着を脱ぎ、裸体になった綏は、はしゃぐように浴室に入った。
十畳以上ある浴室には一面簀子が敷かれ、まだ新しく綺麗だ。
中央に置かれている檜の浴槽も新しく、清々しい檜の香りが湯殿全体を包み、癒しの空間を作っている。
ここでの入浴は、綏にとって癒される一時だった。

「こらこら、走ると転びますよ」
「はぁい」
綏は適当に答えると、手桶で湯をすくい、身体に残る情事の形跡を一通り流す。
一通り流すと檜の浴槽に肩まで浸かった。
「ゆっくり温まって下さいね」
濡れないように打掛を脱ぎ、小袖の袖や裾を紐で縛っている香生は、盥から手拭や香を取り出し、浴槽の隣で用意を始める。
暫くして温まった綏は、浴槽の隣に用意されている椅子に座り、いつものように香生に身を差し出した。
母親以外の人に身体を洗って貰った経験のない綏は、始め抵抗した。
そして口付けの痣が、至る所に舞っている身体を見られるのが恥ずかしかった。
しかし三年も経てば厭でも慣れる。
香生は綏の長い髪をすすぎ、柔らかい布で腕と脚を片方ずつ、背と腹をゆっくり磨く。
その間じっくりと、首から足の甲にかけて、全身痣が散っている綏の体を見る。
香生のこの行動は、何時ものことだった。
綏は時々血の滲む傷を久茨に負わされているから、香生は心配しているのだ。
香生は綏の体を一通り見て、安堵の吐息を吐いた。
この時ふと綏は昨晩の事を思い出した。
殴られた頬の痛みが消えている事に気がついたのだ。
いつの間に治癒してくれたのだろう？
久茨は自分の気に入らない傷は治癒してくれる。
恐らく、醜く腫れ上がりでもしていたのだろう。
綏は香生にその事を言ったことは無かった。
普段はもっと殴られている事を、心配させたくなかったからだ。

綏が昨夜の事を考えていると、香生が綏の鎖骨にそっと触れた。
「――もう、痛くはないですか？」
香生が触れたのは、九日前久茨に噛まれた歯型だった。
九日前、綏はいつもの様に久茨に弄ばれた。
その日はいつも以上に執拗に何度も抱かれ、綏は何度も気を失ってしまった。
気を失えば怒られると、身を持って教え込まれているが、休む間もなく幾多も立て続けに攻められると、堪えきれずいつも意識を手放してしまう。
そしてその日はあまりに堪えきれず、五、六度意識を手放してしまい、怒った久茨様に噛み付かれたのだ。
肉が千切れるかと思う程の傷みが全身を走り、強制的に意識を覚醒させられた。
さほど珍しい事ではなかったが、噛み傷は大抵治癒してくれる。
だが、その日は治癒してくれず、香生を心配させてしまったのだ。
血が滲む傷をみて香生は酷く心配し、毎日のように痛くないかと聞いてきている。
「もう痛くないよ。元々見た目ほど傷は深くなかったから」
本当はまだ肩を動かした時に少し痛むのだが、綏は笑って答えた。
髪と身体を洗って貰った綏は再び湯船に浸り、身体を拭く広幅の手拭を用意している香生を眺めた。
その足元には、塗り薬が用意されている。
綏はその薬を見てしゅんとした。
湯船から上がった綏は、身体を拭いて貰うと、そのまま浴室を出ず、再び椅子に座らされる。
「脚を開いて下さい」
綏は身を縮めたが、香生の諌める視線にあって、仕方なく力を緩めた。
曝け出された秘所に、香生の視線が這う。
綏の頬は一気に紅潮した。

いくら女同士でも、明るい場所でのこの行為に、綏はいつまで経っても慣れない。
入浴は好きだが、これは嫌いだった。
綏の秘所は毎夜の情事の所為で、いくつも傷が出来ている。
情事の最中に出血することが間々ある程に。
しかし久茨は治癒してくれず、他の者に治癒させるのも許していない。
それに見かねた香生が、薬くらいなら分からないと、こうして毎日手当てしてくれるのだ。
香生は傍らに置いてある塗り薬の蓋を開けると、指を浴槽に浸け、濡れた指で薬を掬(すく)う。
そしてもう片方の手で、綏が脚を閉じないように固定すると、有無を与えず、薬の付いた指を秘所に挿し込んで来た。
薬と湯で滑らかになっている指は、難なく秘所に入ってゆく。
付け根まで入れられた指は、薬を塗りつける為、中を蠢き出した。
綏は歯を喰い縛って堪える。
その行為は一度では終わらない。
抜き出された指は、また薬を付け、中に入ってくる。
すぅっとする不思議な感覚と、蠢く指。
久茨に暴かれている体内は、厭でも愛液が滲み出してくる。
「こ、香生、もういい」
愛液が出てきているのに羞恥し、綏は香生の腕を掴んだ。
「ダメです。きちんと手当てしなくては」
「でも」
綏の羞恥を感じ取ったのか、香生は事務的に答えた。
「男を知っている身体が反応するのは当たり前。恥ずかしがる事ではないですよ」
ぴしゃりと言い放つと、綏の手を退け、薬を塗り付ける。
綏は恥ずかしさの余り、瞼を閉じた。
香生は薬を塗りながら、何度も男を受け入れ、焼け爛れたように

赤い秘所を眺めた。
其処は、小さな緋牡丹が咲いたようだ。
香生は他の女の秘所など見たことがないし、自身の秘所もない。
しかし男友達は、女の秘部は綺麗というより、どこかグロテスクだと言っていた。
だが綏の秘所は美しいと、香生はいつも思う。
焼け爛れているのは痛々しいが、それが代えって妖艶だ。
白帝が治癒せず、このまま放置しているのも頷ける。
隠れて薬を使っているのが知れれば、自分は命がないだろう。
だが香生は、どうでも良かった。
薬などではなく、本当は霊力で治癒してやりたいと思っている。
それをしないのは、自分に治癒霊力がないからであって、あれば迷わずそうする。
白帝の命令など関係ない。
折れそうな程華奢で稚い身体に舞い散る無数の痣。鎖骨に残る皮膚を裂く傷。手首や足首に残る紐の痣。
綏の身体は男を受け入れる程成長していない。
本来なら、まだ純であるべき身体。
そこに残る激しい情事の形跡は痛々しく、情事の光景を想像しただけで香生は胸が潰れそうだった。
この時既に、香生は自分の命を捨てていた。
そうでなければ綏を外に出すなどしない。
綏が戻って来なくとも良いと思っていた。
「今日は北市(きたいち)に行くのでしたね？」
綏の秘所から指を離し、其処を拭きながら尋ねた。
「うん」
綏は終わった事に安堵の息を吐く。
「楽しんできて下さいね」
香生はふいに華奢な裸体を抱き包んだ。
何故かそうしたくて堪らなかった。

綏は少し躊躇を見せたが、自身も香生の背にか細い腕を回し「うん」と答えた。

十五

綏は香生に手伝ってもらい湯浴みを済ませた後、背まで伸びた髪を湯浴みよりも長い時間をかけて、最高級の香油を使いながら丁寧に梳いて貰っていた。

これは久茨の命令で毎日しなければならないのだ。

久茨は綏の髪を気に入っているらしく、伸ばさせた髪を切ることも結うことも禁じ、そのため綏はいつも背中に垂れ流している。

「はい。終わりましたよ。いつ見てもお美しい髪ですね。漆黒の滝のようです」

香生はそういいながらまだ掌で髪を撫でている。

「香生！早くしないと時間が勿体無いよぉ」

綏は拗ねたように言いながら香生の掌から逃げて、側に用意されていた朝餉の膳に駆け寄った。

そして時間を取り戻すために勢い良く口に詰め込んで食べた。

むせ込むたびに香生に笑われながらも素早く朝餉を済ませ、そして香生が用意してくれていた格子文様（こうしもよう）の入った赤色の小袖を着て、上に荒んだ紺の布を纏った。

そして、門を通過するための書状を懐に忍ばせる。

「じゃあ行って来るね！日が沈む前に戻ってくるからね」

綏はそう言って手を振りながら微笑んでいる香生を置いて、部屋の側の庭に飛び降りた。

綏はいつも部屋に閉じ込められているため、その存在も顔も女官達には知られていないが、この様な明らかに身分の低い格好では後宮の廊下を歩くことは許されない為、いつも庭から抜け出し、吉峰と約束している北東門（ほくとうもん）に向かっていた。

北東門はその位置上、一番人通りが少なく都合がよかったので集合場所になっていた。

そして、息を切らしながら走り出して暫くすると、北東門の向か

いの大木の陰に佇む少年の姿を発見した。
その少年も綏の姿を捉え、こっちにくるよう手振り綏を促した。
「手前遅ーぞ！！」
綏が勢い良く走り少年の側までくると、行き成り怒鳴りつけられた。
「ごめん！これでも急いだの！怒鳴らないでよ！」
綏が息を切らせながら、その少年を見据えた。
そこにはかれこれ会うのは十五日ぶりくらいになる、顔立ちが端整な幼馴染、吉峰の姿があった。
吉峰は無地の錆浅葱の長着を着ながら頭に白い風呂敷を被っている。
手甲をつけ、肩には振り分け荷物を背負っているその姿は、町人そのものだ。
そして鼻頭や左頬に黒い煤を塗ってあった。
この辺りにいる下級役人は、皇太子である吉峰の顔を拝める機会がないので、その顔を知らない筈なのだが、万一の事を考えて吉峰はいつも変装の為に顔に少し煤を塗っているのだ。
綏は吉峰を観察しながら噴出した。
「ハハハ！！　吉峰いつみても可笑しいその顔！」
「笑うな！！！」
吉峰は顔を赤めながら綏に再び怒鳴った。
しかしこれはいつもの事なので綏は気にしない。
「それよりもう行こうよ！早くここ出たい」
綏が吉峰を促すと、少し膨れっ面になりながら、三っつの大きな木箱が積んである荷車を引き寄せた。
荷車の木箱には織物が入っている。
綏と吉峰は後宮に織物を売りにきた若商人となっている為、いつもこうして織物を積んだ荷車を押して門をくぐっているのだ。
吉峰が荷車を引き、綏がその後ろを押す。
そして、怪しまれないように黙って門の警備の役人の前まで行く。

「書状は」
お世辞にも男前とはいえない帯刀した役人が、吉峰と綏に荒々しく尋ねる。
自分より身分の低い商人をあからさまに見下した口調だ。
綏はそれがいつも面白くて堪らなかった。
身分の低い商人の正体が皇太子だと知ったら、この役人はどんな顔をするだろうと。
「はいよ」
吉峰が慣れた口調で役人に書状をみせる。
綏も続いて役人に書状を見せた。
「よし、行っていいぞ」
門をくぐった後、吉峰は黙ったまま早歩きで門から離れた。
綏は吉峰の早歩きに付いて行くため、自然と小走りになりながら荷車を押す。
そして門から離れた一条の通りまで来ると、吉峰が足を止めた。
「はあ。やっぱ霊力抑えんのきつい」
そう言ってその場にしゃがみ込んだ。
そうなのだ。
吉峰は久茨に次ぐほどの霊力を持っているため、いつも役人の前を通るとき極限まで霊力を抑えなければならない。
ただの一介の若商人が、高い霊力を体から放っていると怪しまれるから。
「大丈夫？」
綏はしゃがみ込んで顔を伏せている吉峰に近寄り、自分もしゃがみ込んでその顔を覗きこんだ。
まだ少し息が荒れてはいるが、極限まで抑えていた霊力を普段抑えているまで戻した事により、段々呼吸も整っているようだ。
「――もう平気だ」
吉峰はまだ少し荒い息を無理に止め、頭に巻いていた布を外し、その布で顔の汚れを拭き取った。

「無理しないでゆっくり休んで」
綏が未だにしゃがみ込んでいる吉峰に優しく言った。
「馬鹿野郎…、時間が勿体無えだろ」
吉峰がそう言って立ち上がる。
綏も吉峰につられて立ち上がった。
並んだ吉峰の背は、成長途中の十五歳にしては高かった。
二十歳で長身の久茨よりはまだまだ低いが、それでも小柄な綏より頭二つ分ほど高い。
綏は吉峰を見上げながら、その顔を覗いた。
「吉峰また背、伸びた？」
「ああ、ちょっとだけな」
そう言って上向きに覗き込んでいる綏の頭に掌をのせた。
「手前は全然伸びてねえな。ちゃんと飯食ってんのか？」
吉峰の言葉にカチンときた綏は膨れっ面でそっぽ向いた。
「大きなお世話よ！」
「まあ、元気ならそれでいいけどな」
急に吉峰の口調が弱々しくなった。
心配になった綏は再び吉峰の顔を見上げる。
その表情は、いつもの活発さはなく、どこか寂しそうだった。
「――早く…、北市に行こう」
綏は吉峰を促した。
綏は、吉峰が時々見せるその表情が嫌いだった。
何故か不安で堪らなくなるから。
「ほら、早く行こうよ。時間勿体無いって吉峰も言ったでしょ」
綏は吉峰のその顔を変えるため、吉峰の袖を引っ張って歩みを促した。
その時、吉峰が綏の手を振りほどき、行き成り走り出した。
「ちょ！ちょっと吉峰！」
驚いて叫ぶと、吉峰は一度止まって綏に悪戯っぽく笑った。
「市まで競争だ！！！付いて来いよ！」

そう行って吉峰は再び走りだした。
呆気にとられ呆然と佇んでいた綏だったが、言葉の意味が分かりすぐさま負けじと吉峰を追いかけた。

十六

北市(きたいち)は宮殿から近い一条にある。
その為、走った二人はすぐに市の入り口に到着する事が出来た。
「おー！やっぱ凄い人だな！」
吉峰は涼しい声で顔を手でかざし、市を覗きこみながら言った。
「ハァハァ…、ちょ、…と、吉峰、早すぎ」
吉峰の涼しい声とは打って変わって、綏は息を切らせながら、その場にへたり込む。
「馬鹿野郎、手前に合わしてゆっくり走ってやったじゃねーか。ほら」
吉峰はそう言って、へたり込んで座っている綏に掌を差し出した。
綏はその掌を掴んで引っ張り上げてもらう。
「あれの、どこがゆっくりなのよ」
綏は吉峰に起こして貰いながら憎憎しげに言う。
「手前が運動不足なんだよ、いい運動になっただろ」
「…確かに」
綏はそう言って掴んでいた吉峰の掌を荒々しく放した。
吉峰の視線が綏の手首に向けられたからだ。
綏は吉峰に会うとき、両手首の紐の痣を見られるのが嫌で、いつも布を巻いている。
その事を吉峰が聞いてきた事は無いので、吉峰が知らないと分かっていても、自然に目を向けられただけで、冷水を浴びせられた気持ちにさせられる。
綏が乱暴に掌を振り解いたので、吉峰は少し驚いたように口を半開きにしたが、すぐに元に戻し、振り解かれた掌も自身の懐に戻した。
「――――ごめん」
吉峰を驚かせてしまった事に、罪悪感が沸き起こり綏は小さな声

で謝った。
「ああ？訳分かんねーこと言ってねえで早く行くぞ」
吉峰は何の事だか分からないといった表情で、綏を背に市に向かって歩き出した。
綏もすぐにその背中を追う。
「――ここ来るのもう六度目だね」
少し伏せがちな吉峰の顔を覗きこんで綏は言った。
「ここ、宮殿から近いからなー。面白いし」
そう言った吉峰の顔と表情は、普段の活発な少年の眼差しに戻っていた。
それに気を楽にした綏は、吉峰の腕の袖を引っ張り、足を急がせる。
「おい！綏、ひっぱんなよ」
「だって時間少ないもん。もたもたしてたら勿体無いよ」
吉峰は不機嫌そうに言ったものの、綏の掌を振り解こうとはせず黙って綏の自由にさせる。
何だかんだ言っても吉峰は綏より二つ年上で器が大きく、優しい。
綏はそんな吉峰が好きだった。
綏は吉峰を引っ張りながら、商人の活気のある声が飛び交う中、人ごみを通り抜け、色々な店に立ち止まりながら市を進んでいく。
そして擦れ違う女達は皆吉峰を恍惚して振り返った。
これはもう毎度の事だ。
吉峰は本当に綺麗な顔をしていて、町人姿であっても凄く目立つのだ。
中には話し掛けてくる女も大勢いる。
そんな時吉峰は綏の事を彼女だと言って女を退けるのだが、綏はそれが吉峰を独り占めしているようで酷く嬉しく、いつも優越感に浸っていた。
「吉峰見て！　これ！」
綏は立ち止まった小物屋で、赤い牡丹が先についた簪（かんざし）を差して言

った。
随時引っ張られていた吉峰も綏の隣に並んでそれを見る。
「気に入ったのか？んじゃ、これで買ってこい」
そう言って吉峰は綏に財布を渡してきた。
「そんなつもりで言ったんじゃないわよ。ただ、香生に似合いそうだなって思って」
「香生に？」
「うん。香生は美人だから、牡丹みたいな花が似合う」
「――そっか」
そう言って吉峰は、店先に並べられている牡丹の簪を掴んだ。
「おやじ、これくれ」
綏は驚いて、吉峰と店主のやり取りを、目を丸めながら眺める。
料金を払い終わった吉峰は、顔を店主から綏に向けた。
「ほら」
吉峰は綏に簪を向ける。
「何？」
「香生には世話になってるからな。たまにはこういうの、贈ってもいいんじゃねーかと思って。まあ貴族の香生が、ここらの簪欲しがるとも思えねーが」
吉峰は一つに束ねた薄茶の髪を掻きながら言った。
綏は吉峰の言葉を聞いてやっと理解した。
この簪を香生に買ってあげたのだと。
「吉峰が買ったんだから、香生には吉峰が渡して上げた方がいいよ。その方が気持ち伝わると思う」
「俺は、手前に買ったんだよ。これは手前の物だから手前が渡せ」
「は？」
吉峰の言っている事が分からず、綏は目を丸める。
「だから、これは手前の物だって。大体男が何の関係もない女に簪贈るなんて変だろ」
吉峰はじれったそうに、綏に差し出していた簪を更に差し出す。

綏はその簪を見ながら、再びきょとんとしたが、吉峰の言っている事を理解すると、少し照れくさそうに簪を受け取った。
「ありがと吉峰」
「別に」
吉峰の返答は素っ気無いが、どこか照れくさそうで綏の心を温かくした。
綏は牡丹の簪を帯に挿し込むと、二人は小物屋を離れ、再び歩き出した。
物見小屋(ものみごや)や、大道芸人、楽士などを楽しみ、途中色々な出店で買い物をしながら二人は四時間ほど歩き続けた。
そして、歩き回るのに疲れた綏は、少し休憩をしたいと吉峰に訴え、二人は甘味処に行く事になった。
甘味処は開放型になっており、二人は外に置いてある赤い布の被せられた長椅子に並んで座り、綏は白玉入り餡蜜(あんみつ)を、吉峰は抹茶だけを頼んだ。
甘い物大好きな綏と違って、吉峰は甘い物が嫌いなのだ。
今甘味処に来ているのも、勿論綏の提案だった。
綏は餡蜜を食べながら、隣に座っている吉峰の方に顔を向けた。
吉峰は茶道を窺(うかが)わす手付きで抹茶を飲んでいる。
その姿を見ると、いくら言葉遣いが悪くて、こうして供の者も連れず市などに遊びにきている型破り　でも、やはりそれなりの躾をされた一国の皇太子なのだと思わさせらる。
「今日本当にお天気良くてよかったね」
綏は品良く湯飲みを手に持っている吉峰に、自分も餡蜜を食べながら話し掛けた。
「ああ、日ごろの行いがいいからな」
「行いのいい皇太子はそんな格好で市に遊びに来たりしないよ」
綏は笑いながら言う。
「うるせえ、手前だって白帝の寵姫のくせにこんな所に来てるじゃねーか」

吉峰の言葉で、綏の顔から血の気が引いた。
そして餡蜜を持っている手が震え出す。
綏は以前、吉峰に嘘をついた。
久茨に部屋に閉じ込められている事のいい訳に、寵をもらったのだと。
毎夜抱かれているのだから嘘にはならないかもしれないが、久茨にそんな感情はない。
繰り替えさえる暴力的な行為が、嫌というほど綏に教え込ます。
綏を気に入りの人形の玩具にしか思っていない。
でも、綏は人形じゃない。
痛みを感じるし感情だったあるのだ。
「…おい、顔色悪いぞ」
吉峰が青ざめている綏の顔を心配そうに横から覗きこんできた。
「わ、私、元々顔色あまり良くないから」
綏は吉峰の表情に焦って、とっさに適当に返事をしたので、その声は酷く掠れてしまった。
「まあ、普段から青白いけどよ。何か、いつも以上に悪かったから。やっぱちょっと歩き過ぎたんだな。大丈夫か？またそろそろ帰んないといけねーのに」
綏はその言葉で、辺りを見回した。
まだまだ明るいが、ここから後宮までだと少し時間がかかる。
その事を確認した綏は、深い絶望の波に飲まれる。
もう、帰らないといけない。
あの地獄に。
今夜も訪れるだろう地獄に。
楽しさで忘れていた下腹部の痛みが綏に込み上げてくる。
もう限界など疾(と)うに越えている。
それなのに訪れる更なる破壊行為。
綏は泣きそうなくらい顔をしかめた。
「――――時間経つの早いよな。昔は明日もあるからって、さほど時

間なんか気にならなかったのによ。今は、次いつ会えるか分かんねぇもんな」
吉峰は泣きそうな綏と同じくらい泣きそうな声で言った。
「…うん」
綏は涙を堪え、ただ頷いた。
今夜の、明日の、その次の日々も悪夢を乗り越えて、また今日のように遊べる日を待ち通しに思いながら。
「――そろそろ帰るか。香生が待ってる」
吉峰はそう言って長椅子に代金を置いた後、綏と自分の買った荷物を持って立ち上がり、そして椅子に座っていた綏の前に背を向けてしゃがみ込んだ。
「何してるの？」
綏が泣きそうになっていた顔を急に怪訝そうにひそめる。
「おぶってやるよ。体調悪いんだろ」
「ば、馬鹿！そんな事出来る訳ないでしょ！」
綏は吉峰の行動に驚き、頬を紅潮させた。
「餓鬼の頃よくやってやったろ。そんな顔色悪い奴歩かせられるか。早く乗れ」
吉峰の言っているのは本当に子供の頃のことだ。
幼い頃から綏は小さく、そして二つしか違わないのに背の高かった吉峰は、面白がって綏をおんぶし「どうだ、すげーだろ」などと高々に自慢していたのだ。
「子供の頃と今は違うでしょう！そんな恥ずかしい事出来ないよ！」
綏が紅潮させながら叫んだ。
しかし吉峰は荷物を持っていない方の手で綏の手を掴んで、綏を背中に無理やり乗せた。
あまりの手の力に綏は驚いた。
吉峰は軽々と綏の太腿を持ち上げ立ち上がる。
「っちょと！」
綏は羞恥にかられて吉峰の背中を叩いた。

「暴れんなよ、落ちるぞ」
吉峰にそう言われて綏はビクッとし叩く手を止めた。
吉峰はそのまま黙って歩き出す。
そのまま沈黙が流れて時間が経ち慣れてくると、綏は羞恥もなくなり代わりに温かい気持ちになった。
引き締まった背の温もりが優しくて。微かに漂う伽羅(きゃら)の香りが心地よくて。薄茶の猫っ毛がくすぐったくて。
綏は心地よくなり、ずっとこうしていたいと思った。
そして吉峰の背中に流れる薄茶の髪に頬を当て埋(うず)まる。
「軽いな、本当に飯食ってんのか？」
暫し黙っていた吉峰が話し掛けてきた。
「食べてるよ」
「何か中身空っぽな大きい人形抱えてるみてえ」
人形。
綏はその言葉に傷つき返事をせず、傷を癒やすように吉峰の背中に深く顔を埋めた。
綏が黙っているので再び沈黙が流れる。
吉峰は、以前この北市に来たときに商人に教えて貰った、人込みのない裏道を通り抜けていた為、辺りは微かに聞こえる人々の声以外、何も音がなく静寂に包まれていた。
沈黙でも、綏はとても居心地が良く、そのままの状態で吉峰に話し掛けずに、ただその背中に寄り掛かっていた。
その時。
「――――…綏、俺今度、正妃娶るんだ」
綏は吉峰の言葉に驚いて、背中に埋(うず)めていた顔を勢いよく離した。
吉峰はずっと背中にもたれていた頭が離れて驚いたのか、後ろに振り向き綏を見つめた。
そして綏の驚きに満ちた瞳をみて、直にまた前を向き、そのまま歩き続ける。
綏はその爆弾発言に驚き何も言う事が出来ず、ただ吉峰の薄茶の

後ろ髪を眺めた。
「俺、もうじき十六だから…、今までも色々縁談があってよ。その中で母方の祖父(じい)さんに紹介された、先帝の弟に当たる三宮の娘と縁組が決まった。会った事はないけど、気が良さそうな奴だったから、この前話を承諾した。…手前には、言っとこうと思ってな」
吉峰の言葉に綏は何も言う事が出来ない。
ただ、話について行くのが精一杯だった。
吉峰はそんな綏を他所に、前を見据えたまま話を続ける。
「俺、昔手前を正妃にしてやるって言っただろ。手前には、からかうなっていつも軽くあしらわれてたけど。…あの時、本気だった。それだけは、知っていて欲しい。手前の事は正妃に出来なかったけど、　あの時手前に言った言葉は、叶えようと思う」
綏は昔を思い出していた。
まだ幼く、自分が下仕をしていた頃の事を。
あの頃は、毎日二人で遊んでいた。
下仕の身分の綏は、吉峰付きの女官達に睨まれていた。
それでも、綏にとって吉峰は掛け替えのない唯一の友達で、周りに疎まれても吉峰から離れる事が出来なかった。
吉峰は綏を気遣ってくれて、いつも周りの目が気にならない所に誘ってくれた。
そして、綏を正妃にしてやると言った。
あの頃は幼く、恥ずかしさと身分違いなのを気にして「からかうな」の一点張りで吉峰の事をあしらった。
そして、求婚から逃げるように色々文句をつけた。
皇子の身分なら妻を沢山とるから嫌だとか。
自分一人を見てくれる人がいいとか。
飽きて捨てられるのは御免だとか。
しかし吉峰は、その全部を否定してきた。
そして、自身の母親の事を話しだした。
吉峰の母、王女御(おうにょうご)は、先帝、吉峰の父を深く愛していたそうだ。

しかし王女御は病に臥して、後宮で暮らしていくのが困難になった為、綺麗な空気のある杏林の山荘に篭(こも)られた。
しかしその間、先帝は後宮で他の女と戯れる毎日で、王女御を一度も見舞うことなく、王女御の文に一度も返事を返すこともなかった。
八年の長い闘病生活の中、王女御は先帝の便りを待ち続け、そしてとうとう力尽き、寂しさの中で亡くなっていかれたという。
だから自分は、母を孤独に追いやった父のようには絶対にならないと決めていると。
俺は妻を一人しか娶らないと決めていると。
その妻が例え病に臥しても年老いても慈しみ続けると。
死ぬまで寄り添うと。
しかし、あの頃の綏は幼く、吉峰の真剣な告白が恥ずかしくて茶化して逃げてばかりいた。
綏はその事を思い出して懐かしく感じた。
つい三、四年前の話なのに遥か遠い昔の事のように。
吉峰は、正妃に迎える女君を、あの時綏に言った言葉通りに愛そうとしているのだ。
そう思うと、綏は心が温かくなり、そして目が熱くなった。
「――――吉峰なら、きっと、その姫君を幸せにして上げられるよ」
綏は何故か胸が苦しくなり、吉峰の背に再び顔を埋(うず)めた。
「そう出来るように、努力する」
吉峰は前を向いたまま、静かに、まるで誓いを立てるように言った。
「…その姫君、どんな方なの？」
「小緒(さお)って名前で俺と同い年の女。最近文のやり取りしてる。歌には自信ないけど、琴は得意だとかで、後、俺が白帝を継がず、いずれ上皇待遇(じょうこうたいぐう)（帝位に就かずにそのまま上皇になること）を望んでるって言ったら、自分は後宮の華やかな暮らしより、ひっそりと暮らす方があってるから、その方が自分は嬉しいって。祖父さんの話じ

ゃ気立てがいいとか何とかだそうだ」
「…そっか」
吉峰が上皇待遇を望んでいる事を、綏は始めて知って少し驚いた。
だが吉峰らしいと思った。
「ああ。しっかし笑えるよな！俺と手前に餓鬼出来たらそいつら従兄弟だぜ。まさか初恋の女の餓鬼と自分の餓鬼が従兄弟になるとわな」
吉峰の笑い声に綏は涙が溢れた。
自分には子供が出来ないから。
そして思った。
吉峰は幸せになれるだろうと。
子供に囲まれ、吉峰に愛され幸せな妃に自身も愛され、幸せな家庭を作るだろうと。
自分には望めない未来が吉峰にはあるのだ。
そう思うと嬉しくて、そして綏にも分からない感情が込み上げてくる。
その感情が綏の涙を促し、溢れ出た涙は止まる事無く幾筋も頬を流れ落ちた。
そのため暫く返事をする事が出来ず、二人の間に沈黙が流れる。
「おい、綏？」
綏が吉峰の背に顔を埋もれながら、嗚咽を殺して涙を流していると、吉峰が怪訝そうに足を止めて振り返った。
綏はその事に気がついたが、涙に濡れた顔を見られるのが嫌で、そのまま顔を埋めていると吉峰は溜息をつき「普通、話の途中で寝るか…」と小さな声でいい、再び歩き出した。
綏は後宮の門の近くに着くまで終始顔を上げる事が出来なかった。

十七

「白帝。扇家の四(し)の姫は見目麗しく、霊力も姉姫達よりとても優れていらっしゃられるとお噂に聞きます。一度後宮に召されてみては如何ですか？」

申の刻（午後四時頃）、久茨は皇宮にいた。

そして、皇宮の帝の間で書簡に目を通していると、母の実兄である左大臣・土師(はじ)　方丈(ほうじょう)が参上して来るなり、久茨に新しい縁談を匂わせる話をしてきた。

この者は、久茨の伯父にあたるため、貴族間で絶大な権力をもっている。

その為、次期白帝の皇太子・吉峰が自分と血縁関係がなく、権力を失うことを恐れ、久茨に度々会いに来ては、こうして縁談の話をし、自分の血縁関係のある子を作らせ、吉峰にかわって皇太子位に据えようとしている。

久茨が子を作っても、普通は皇太子の吉峰がそのまま白帝の座につくから関係ない筈だが、吉峰が「白帝に御子が出来た時点で直に自分は皇太子の位を辞退する」と公言している為、その事に便乗した方丈が、ならば、久茨に子を作らせ、自分の血縁関係のある子を出来るだけ早く皇太子位に就けようと　躍起になり、こうしてよく縁談の話を持ってきている。

久茨は方丈の縁談話が煩わしくて堪らなかった。

「興味がない。話がそれだけなら、失せろ」

「いいえ白帝。この扇家の四の姫なら必ずや白帝をご満足させて頂けるかと。一度私も宴の折に垣間見た事が御座いますが、噂にたがわぬ美しさ。一度お会いして頂いて損は御座いますまい。それに琴が何よりもお上手で、一度、後宮で管弦の宴でもお開きになって四の姫の琴の手前を御覧下さい」

久茨は方丈に更に苛立ちを増した。

方丈が此処まで躍起になるのは、久茨が後宮にいる妻に振り向きもせず、一度も手を付けずにいるからだ。
三人の妻は美しい。
だが、久茨にはどうでもよかった。
どうでもいい処か、何かと着飾って久茨の気を引こうとする妻達は、煩わしい以外の何の価値もない存在だった。
久茨は、他のものが来ても手を付ける気など起こらないと確信していた。
今の三人の妻同様、煩わしいだけの存在になると。
「方丈。失せろと言った筈だ」
久茨は冷酷な表情と口調で言い、霊気を方丈に飛ばした。
そのことで方丈は固まり、冷や汗を掻きながらそれ以上何も言わず下がっていった。
しかし、また忘れた頃に懲りずに方丈は来るだろう。
久茨と方丈のこのやり取りは、もういつもの事だった。
久茨は苛立ちながら書簡を置き、気分を変えるために皇宮を出る事にした。
そして、綏のいる昭洸殿に向かった。

久茨がまだ日の暮れぬ内から後宮に戻る事は珍しかった。
女に溺(おぼ)れて、公務をせず後宮に入り浸っていた先帝とは違い、久茨は二十歳という若さにも拘らず、部下にあまり仕事を任せることはなく、全て自身で把握出来るよう、公務に没頭していた。
「白帝、侍(じい)医を手配致しましょうか？」
一部の者しか通る事を許されていない、皇宮から後宮へ続く入り口に向かって、長い檜の廊下を渡っていると、供として付いて来て

いた、葛木が言った。
久茨の珍しい行動に、どこか体調でも悪いのではないかと思ったようだ。
「否、体調は別段変わりない。気晴らしだ」
「…さようで、御座いますか」
葛木の声はどこか怪訝そうである。
無理も無かった。
久茨が後宮の妻達と上手く行っていないのは、周知の事実だ。
特に葛木は、久茨の妻の一人である、扈成殿女御（こせいでんにょうご）、立上家（たちかみ）の姫（の）紀子（りこ）の従兄妹だった為、その事を良く知っていた。
その久茨が、妻のいる後宮に気晴らしに行くというのが不思議で堪らないらしい。
綏の事は一部の者達しか知らない。
伯父の方丈ですら知らない事だ。
綏は何の身分も持っておらず、後宮でも久茨が昭洸殿に隠すように閉じ込めてあるため、その名を知るのは汐路や、綏の周りを世話する数人の女官だけだった。
以前綏が属していた下級女官の者達も、綏は元々酷い虐めにあっていた為、綏が突然辞めたことに「耐えられなくなったのだろう」と不思議に思う者もおらず、その名を口にする者は既になくなっている。
汐路はもとより、その数人の女官も口が堅い者を選んで付けたので、後宮で綏の名が出る事はない。
「白帝、大鳳殿にお戻り致しますなら、鴻池（こうのいけ）を先に送り、何か御用意させておきましょうか？」
そういって葛木は二人に付いて来ていた、葛木の部下にあたる鴻池に目を向けた。
「否、大鳳殿には戻らぬ。昭洸殿に渡る」
「昭洸殿に…、ですか？」
「ああ」

少し不思議そうな面持ちをした葛木だったが、昭洸殿は以前久茨が長く暮らしていた殿舎なので、最近移った大鳳殿より落ち着くのだろうと、一人納得したように表情を改めた。
「では昭洸殿に使いをお送り致しましょうか？」
「否、良い。お前達ももう下がれ。此処からは一人で行く」
久茨はそう言って、葛木とその部下の鴻池を残し、後宮の入り口の門を渡った。

十八

後宮に入ると、男達ばかりの皇宮と違い、女達ばかりがひしめいている。
後宮に入って暫くも経たない内に、甲高い女の声が響き渡っていた。
そして、久茨の姿を確認すると女達は、普段この時間に戻ってくる事のない久茨に度肝を抜かれたような顔をし、焦ったように平伏していく。
そして、その事を聞きつけた、二十代後半の、久茨もよく見覚えのある、花の流水文様の入った深緑の打掛を纏った上臈の女官が、久茨の側まで駆け寄ってきた。
「白帝、対応が遅れた事、真に申し訳御座いません」
そう言って、久茨の足元に平伏した。
「良い。知らせの使いを送らなかったのだから」
「御厚情、有難う御座います」
女は更に深々と頭を下げた。
「昭洸殿に渡る。供はいらぬ故、もう下がれ」
久茨は足元に平伏している上臈女官に無表情に命じた後、よく見知っている昭洸殿に続く長い廊下を歩み出した。
昭洸殿には今、主が居ないため、そこへ続く廊下に人影は殆ど見当たらず、久茨はその静かな廊下を足早に進んだ。
その時。
「白帝！」
五月蝿いくらい甲高い女の声が、久茨を呼び止めた。
「白帝！私(わたくし)で御座います！　叶(かなえ)で御座います！！」
久茨が煩わしい声のする後ろを振りかえると、妻の一人である延(えん)嬉殿女御(きでんぬょうご)、久茨と同い年の五和(いつわ)　叶(かなえ)が、金箔が施された派手な朱色の打掛を纏いながら、息を切らし立っていた。

「今日は早くお戻りになられたと女官から伺いました故、私嬉しくなってしまい、追いかけて来てしまいました」
息を切らしながら嬉しそうに叶は言った。
久茨は叶の登場に嫌悪した。
久茨はこの叶の事が、三人の妻の内、一番煩わしく嫌っていた。
叶は、三人の妻の中で一番身分が高く、与えられている殿舎も三人の内一番大きい。
その為、この後宮では自分は久茨の后妃だと言わんばかりに、いつも遠慮なく久茨に纏わり付いてきていた。
そして叶の性格は派手で、いつも自分の殿舎で宴を開いては、毎日のように久茨に出席するように申し込んできていた。
一度もその宴に出る事は無かったが、途絶えることのないその使いの者が来るたびに、久茨は嫌悪していた。
「今宵は昭洸殿でお休みになられますの？此方は人手が少なくさみしゅう御座います。今宵も、私の延喜殿（えんきでん）で宴を開きます故、是非ご出席下さいませ。最近都で有名な曲芸師を呼んだのです。きっと楽しゅう御座いますわ！」
叶は、美人で目鼻立ちは整っているものの、きつい印象を与える。
その顔を嬉しそうに微笑ませながら言った。
「宴には参らぬ。下がれ」
久茨は、鬱陶しさをあからさまに声に出して言った後、直に昭洸殿に体を向けそのまま叶の元を立ち去ろうとした。
「綏さんなら、昭洸殿にいらっしゃいませんよ」
叶の高飛車な声が、急ぐ久茨の動きを止めた。
「あの子、昼間によく後宮を抜け出して、どこかに遊びに行ってらっしゃるのです。先程も昭洸殿を出て行ったと私の女官から報告を受けました」
久茨は、叶が綏の事を知っている事に驚き、そして叶の言葉に動揺した。
いつもその怜悧な表情を崩すことのない久茨だったが、明らかに

動揺し柳眉を潜めながら叶に振り返った。
「どう言う事だ？」
その声も動揺している。
「私、白帝が、どんな女性がお好みなのか女官に調べさせていましたの。そしたら偶然綏さんの事を知りまして、昭洸殿にいらっしゃると。それで、綏さんがどういう方なのか知りたくて、女官に綏さんを尾行させていましたら、その方、よく後宮を抜け出していると言うじゃないですか。私もう驚いてしまって、これは白帝への裏切りだと思いましてね、そのまま尾行させていましたの。折を見て、白帝にご報告しようと思っていたのですよ」
久茨は固まっていた。
「よく抜け出しているだと？」
「よくと申しましても月に一、二度ですが。それでも後宮に住まう女としては多すぎます。それも黙って抜け出すなど言語道断。しかも話によりますと、卑しい町娘のような格好をして後宮を抜け出しているとか」
久茨は叶の言葉が信じられず、しかし激しい胸騒ぎを覚えた。
綏とは毎夜会っているが、夜は寝所で、寝る間も惜しんで抱き続けるため会話など皆無だ。
久茨は綏を昭洸殿の女官に、部屋から出さないよう見張らせている。
誰の目にも触れさせず、誰の手にも触れさせないために。
そして綏は、昭洸殿に閉じ込めてからずっと、久茨が赴くと必ずその部屋に居た。
そのため安心し、汐路や見張りの女官に、綏の近況を毎日報告させる事をしなくなったので、その行動は全くといっていい程知らない。
始めの頃はよく脱走したと報告を受けていたが、暫くすると女官からその報告を受けることが無くなった為、大人しく、与えてやった絵巻物でも見ながら過ごしていると思っていた。

（後宮を抜け出すだと？）
在り得ない話だ。
この厳重な警護の後宮を一人で抜け出すなんて不可能といっていい。
しかし、久茨は厭な予感がした。
「それに、綏さんいつも…」
久茨は叶が何かまだ言おうとした事など耳に入らず、叶をその場に捨て、綏の部屋に駆け出した。
言いようのない不安感と胸騒ぎに、綏の部屋を目指した。
そして昭洸殿の最奥にある綏の部屋に辿り着き、その場で立ち尽くした。
そこには綏の姿も、綏を見張っている筈の女官の姿も無かった。
「…はッ白帝！！」
呆然と立ち尽くしていた久茨の耳に、驚愕の女の声が微かに聞こえた。
久茨は自失したまま、無意識にその声に振り返る。
そこには、長い黒髪を櫛で結い上げ、優美な紅紫色の打掛を纏った、秀でた顔立ちをしている二十代半ばの女が、青ざめながら立っている。
綏の見張りをさせている女官だ。
確か、香生という名だったか。
久茨は、そんな事を虚ろな頭で考え、視点の定まらない目で女を眺めた。
女は青ざめ微かに震えている。
「は、はく白帝…。何故こんな時刻にここへ…――――」
久茨は暗色に染まった紺青の瞳で女を眺める。
「あ、あの、綏さんは…、今ちょっと…――――」
「…――――あれは、どこに消えた…」
久茨は女に尋ねるのではなく、ただ呆然と独り言のように呟いた。
「…あの、ゆ、夕刻までに戻って来られますので、ですから…」

「戻って来る、来ない、の問題ではないでしょう！」
その時、後ろから甲高い叶の叱責した声が飛んできた。
「白帝に御寵愛を受けていながら後宮を勝手に抜け出すなど無礼にも程があります。そうで御座いましょう、白帝」
叶は久茨が去った後、追いかけて来ていた。
綏の世話役の香生に叱責した後、叶は久茨に向かって寄り添った。
叶のその行動は、久茨には最早目に入らず、叶が腕を掴んできた事も、久茨には分からない。
綏がいない事に打ちのめされ、魂を抜かれた状態になっているのだ。
「そなた香生とか言いました？綏さんの世話を預かる身でありながら、その綏さんを黙って行かせるなど、極刑に値する白帝への侮辱です。お分かり？」
叶の蔑んだ声が響く。
香生の返事は無い。
「分かったならさっさと此処を出てお行き！　綏さん共々きつい罰を受けなさい！」
叶のきつい言葉に、沈黙していた香生は鋭い目付きで睨みつけた。
「私はもとより、命を捨てる覚悟で御座います。ですが綏さんに罪は御座いません」
「何を言っているの！　綏さんは白帝を裏切ったのよ！」
「綏さんは白帝を裏切ってなどおりません。…―綏さんが、まだあんな幼い身で、毎日部屋に閉じ籠り、どんなにお寂しい暮らしをしているか…。少しばかり気を晴らされたからと言って、誰に咎められましょう！」
香生は唇を噛み締め、うらめしそうに言った。
「馬鹿馬鹿しい。私、存じておりますのよ。綏さんは男と抜け出している事を。その男が皇太子だって事も。これを裏切りと言わず何と言うのですか！」
「―……」

高飛車な叶の声を最後に、二人の会話が止まった。
久茨は終始何も考える事もできず、叶に腕を捕られたまま聞いていた。
男？皇太子？
久茨は空ろな意識でその名を考えていた。
…皇太子――――……吉峰！。
その名に辿り着いたとき、久茨は怒りが爆発した。
「あれは吉峰と後宮を抜け出したというのか！！」
久茨は普段から抑えてある霊力を放出させ、これ以上内ほどの激昂し叫んだ。
久茨が霊力を抑えず垂れ流した事で、叶と香生はその霊圧に耐えられず、震えながらその場にへばり付く。
久茨はそんな香生の胸倉を暴力的に掴んで、無理矢理起こし、爪先が床に付かぬ程持ち上げた。
「あれはどこへ行った！」
久茨は香生を持ち上げながら、顔が苦しみに歪み、瞼をきつく瞑っている香生に怒り叫んだ。
「…す、綏さ、んは、く、北市…へ」
「吉峰と行ったのか！！」
「……」
「答えろ！！！」
「……ぅ、――――…は、い」
久茨はその言葉を聞いて怒り狂い、香生を柱に叩きつけた。
鈍い衝撃音とともに、香生はぐったりする。
怒り狂った久茨は、頭から血を流しぐったりしている香生に、掌をかざし、霊力を固め、容赦ない大きな霊撃を打ち放った。
霊撃は激しい閃光と爆発音とともに、殿舎の柱や廊下が跡形もなく無残に消え去り、昭洸殿の庭が土ごと抉(えぐ)れ、木々が消滅し、霊撃が通った道全て地獄の廃墟と化した。
そして、鮮やかな紅が空を舞った。

香生の粉々の肉片と、血雨が降り注ぐ。
久茨はその血を被りながら、震えて座り込んでいる叶に怒りに満ちた鋭利な双眸を向けた。
「……ぁ」
叶は、香生の血を被った久茨を、まるで地獄絵図を見るような顔で、がくがくと震えながら見上げている。
「失せろ」
久茨は叶に、狂った冷酷な声で命令した。
叶は震えながら、その場を這いずる様に立ち去る。
腰を抜かし、ふらふらした動きの叶を、久茨は冷酷に眺めた。
そして、その廃墟と化した場所に、血に濡れた久茨は、精神を狂わせながら唯立ち尽くした。
綏と吉峰に怒りを向けながら。

十九

「おい、綏起きろ。荷車まで着いたぞ」
吉峰が大きな声で、背中に掴まっている綏に言った。
「…うん」
終始寝てなどいなかったが、今起きたといった風な声で綏は答える。
その頃には綏は涙を止め、少しばかり落ち着きを取り戻していた。
吉峰が屈(かが)んで綏を降ろすと、外していた頭の布を再び纏い、そして荷車の取っ手を掴んだ。
「私、重たくなかった？」
綏はもう門に行く用意の整った体勢の吉峰を向いて尋ねる。
「ああ全く、軽石みたいだったぞ手前(てめえ)。それより早く後ろ押せ」
ぶっきら棒な言い方だが、気を遣ってくれているのその姿が、綏は酷く嬉しかった。
荷車を押して門まで辿り着くと、いつものように慣れた口調で吉峰が書状を役人に見せる。
そして綏も役人に書状を見せようとした時、役人が怪訝そうに顔をしかめた。
「――――おい、もしかしてこいつ…」
そう言って綏が書状を見せた役人が、側に立っていた役人達に向いて言う。
綏はこの役人の行動に心の臓が止まった。
もう二年近く、このような役人の怪訝な態度をとられた事が一度もなく、滞りなく門を通過できていたため、安心していた。
しかし、この役人の訝しげな態度が綏の心にずっと潜んでいた不安が湧(わ)き上がってきた。
――――ばれたか。
しかし、吉峰ではなく綏に反応した事が少し疑問を湧(わ)かせた。

「おい、俺の妹に何か文句あんのか」
その時、吉峰が綏の前にいた役人に辛辣な声を浴びせた。
吉峰の声は、蒼白し声も出せずにいる綏とは打って変わってはきはきしている。
「――――……もしや、こ、皇太子…」
役人は呻くようにその名を口にした。
綏は全てを悟った。
ばれた、と。
綏は足を震わせながらその場にへたり込む。
すると、ガタガタと震えている綏の前に、吉峰が役人から綏を隠すように立ちはだかった。
「――――誰に命令された」
吉峰は頭に被っている風呂敷を外し、威厳のある口調で役人を促す。
その言葉で、震えて腰を抜かしていた綏は、全てばれたのだと追い討ちをかけられた。
綏は今にも失神しそうなくらい蒼白する。
「……ひぃ」
その時、一人の役人の小さな悲鳴と共に、目の前にいた役人と側にいた数人の役人達が、慌しく吉峰に向かって跪(ひざまず)きだした。
「私にではなく、何故この者に反応した」
吉峰の口調は普段のそれとは打って変わって、皇太子の口調になっていた。
吉峰も既に全てもうばれていると悟ったのか、何も否定せず自分の身分を明かすような口ぶりだ。
そして、綏が先程感じた小さな疑問が吉峰の言葉で再び込み上げてきた。
全てばれていて、ここの下級役人にその背格好を教えられているとしたら、皇太子の吉峰に反応する筈なのだ。
この国に必要な皇太子をいち早く確保する為に、吉峰の背格好を

教えられている筈なのに、役人達は吉峰の事には何の反応もしなかった。
それなのに、綏に反応した。
何の身分もなく、さしてこの国に必要ではない綏に。
ここで綏に反応するということは、吉峰の背格好を教えず、綏の背格好だけを教えた人物がいるという事。
吉峰を放り、綏だけを確保しようとした人物。
――久茨様。
綏が久茨の名に到達した時、意識が真っ白になった。
殺される。
その言葉だけが綏を支配した。
「わ、私共門番の者全員に、十三歳程の紫の瞳をした少女が門を通ったら、昭洸殿に連れて参るようにと、白帝からのお達しが下りておりまして」
役人は、身分上御前に上がる事のできない雲の上の人物の吉峰に、震え上がりながら言った。
「何故、私を皇太子と」
威厳に満ちた吉峰の声が役人を叱責するように言う。
「しょ、少女とご同行されておられる方が皇太子だと伺っておりましたので。それと、お、畏れながら、皇太子には直に賀陽殿にてご謹慎されるようにと白帝から命が下っております故、こ、これよりご同行願いたく申し上げます」
役人は震えながら、白帝の命とあっては例え相手が皇太子でも譲れないというように切実に訴える。
吉峰は少し黙ったが、直に綏に視線を向けた。
「――この者は」
「はっ、少女は昭洸殿に連れて参るようにとだけお達しが下りております」
吉峰はまた少し黙ってから、へたり込んでいる綏の前に膝を付いて、蒼白している綏を覗き込んだ。

その表情は強張(こわば)っている。
「綏、昭洸殿には俺も付いていく。だからそんな心配すんな」
吉峰はそういって震えている綏の頭に掌を乗せた。
そして乗せた掌を直に離し、再び立ち上がって役人に向き直う。
「謹慎処分は甘んじてうける。だがその前に一度、この者と昭洸殿に渡る事を許可されよ」
吉峰は、謙(へりくだ)った言葉とは裏腹に、威圧的な声で役人に命令した。
「――こ、皇太子、畏れながら、は、白帝は大変ご気分が優れぬ御様子と伺っております。それ故、真に申し訳御座いませぬが、このままご同行を。その方が、皇太子の御身にとってよろしいかと…」
「どういう意味だ」
吉峰は、震えた声の役人に訝しげに、それでいて静かに尋ねた。
「そ、それが、よ、良くは存じませんが、居合わせた役人の話によりますと、白帝は酷くご乱心との事で、既に昭洸殿は壊滅状態らしく、また、その場に居合わせた延嬉殿女御様も酷く霊力に圧され、未だに臥せっておいでだとか…。既に女官が一人始末されたとの話も伺いました故」
「何だと!!!」
吉峰の激しい叫び声が北東門周辺に響き渡った。
「女官が始末されたとは真か!!」
「ひぃ、皇太子、ど、どうかご容赦を」
女官が一人始末された?
体を震わせながら土に頭を擦り付けている役人の声に、綏は俯いていた蒼白の顔を上げた。
綏は真っ白な頭でその事を考えた。
昭洸殿の女官。
自分がいなくなって一番に咎をかけられる女官。
――――香生!!
綏は腰が抜けていた体を無意識のうちに立ち上げ、考えるより先に、昭洸殿に向けてその場を走り出そうとした。

しかしその時、綏は手首を何かに掴まれた。
振り返ると吉峰が蒼白の顔で綏の手首を掴んでいた。
「吉峰！！　放して！　香生が！！」
「俺も行く。手前は少し落ち着け、香生と決まった訳じゃねえ」
綏の悲痛な叫び声とは違い、吉峰は青ざめながらも冷静な声でいう。
「香生が！！」
綏はもう混乱し、何が何だか分からなくなっていた。
「綏…」
「こ、皇太子、い、行ってはなりません！　こ、殺されます！　白帝は皇太子に酷く憤慨されていらっしゃると伺っております！　行ってはなりません！」
役人の震え上がった声に反射して綏は吉峰を見た。
香生が殺された。
吉峰も、殺される――――。
「一人で行く…。吉峰は賀陽殿に戻って」
綏は吉峰の死を思った瞬間、口から言葉が漏れていた。
「何いってや――」
「これは私の責任だもん！　私が一人で行く！　吉峰は関係ない！！」
綏は吉峰の言葉を遮り、これ以上内くらいの叫び声を上げた。
「手を放して！！」
そして、掴まれていた吉峰の手を勢いよく振り払う。
「付いて来こないでよ！！　来たら許さないから！！」
綏は吉峰の手を振り払った後、その言葉を残しその場を走り去ろうと駆け出した。
その時。
「綏！！　白帝には俺に無理やり連れだされたと言え！！」
吉峰の叫び声が綏の背に響いた。
しかし、綏は返事もせず、振り返ることもなく、焦る足を止める

事なくその場から走り去った。

二十（前書き）

酔っ払っての更新。
間違え多すぎる…。

二十

久茨は綏の部屋に佇みながら、廃墟(はいきょ)と化した庭を無表情に睨んでいた。

血の匂いがする。

煩わしい。

あの後、爆発音を聞きつけた役人や女官達が、数え切れない程の大集団で昭洸殿に集まってきた。

役人達は、血に塗れ立ち尽くす久茨を確認すると、怪我がないかどうかと、久茨に駆け寄ってきた。

しかし久茨はそれが全て煩わしく、その者達全てに下がるよう一喝し、そしてその口調とその鋭利な目つきに畏(おそ)れた役人や女官達は、逃げるように全て消えうせた。

その後久茨は綏の部屋に佇み続けている。

心を闇に支配されながら、綏に怒り、綏が戻ってくる事を願いながら、ただ廃墟を眺めていた。

後宮の門の役人には綏の背格好を知らせ、門前に現れたら直に此処へ連れてくるように命じている。

あれから長い時間待ち続け、眩しかった太陽の光も、今は薄暗くなっている。

あの女は夕刻には戻って来るといっていた。

叶もいつも夕刻には戻ってきていると。

本当に戻ってくるのか。

否、戻ってこなければ、探し出すまでだ。

久茨は、不安と怒りを交えながら、その廃墟を無表情に睨み続けていた。

その時。

「香生!!」

聞きなれた、幼い悲痛の声が殿舎に響いた。

「香生！！」
その幼い声の主は、後宮には場違いな、質素で、まるで町娘のような赤い小袖を着ながら、久茨に背を向け、廃墟と化した庭を見ながら佇んでいる。
久茨はその声の主に、音も風もなく近づき、その腕を握り潰し振り向かせた。
「痛っ！」
「吉峰と今迄何をしていた！」
久茨は痛みで眉間に皺を寄せ、瞼を閉じている綏を罵倒した。
その声で綏は震え上がりながら瞼を開く。
そして開かれた紫の瞳が、暗色に染まっていった。
「ぁ…ああ」
綏が声にならない掠(かす)れた声を発した。
「答えろ！」
「ぁ…ーーー血が…」
綏に答える気配はなく、絶望に顔を歪ませている。
「…ひ、久茨様、…香生は？」
綏の声は表情と同じく歪んでいる。
「何をしていたのかと聞いている！」
久茨は、質問に答えない綏に怒り、鋭利な目つきで睨みつける。
「香生をどうしたんですか！！」
綏がそう叫んだ時、久茨は怒りを滾(たぎ)らせ爆発させた。
綏が何も答えず、自分に怒りの叫びを上げたことに、久茨は激憤し、綏を霊術で廊下に叩き潰した。
「…ぅ」
鈍い音と共に、頭を硬い廊下にぶつけた綏は、顔を歪ませ身悶えしている。
久茨は仰向けに倒れている綏の髪を鷲掴み、怒りの煮えたぎった目で睨みつけた。
「何をしていたかと聞いているのだ」

「…、香生を、どうしたんですか」
答えようとしない綏にとうとう糸が切れた久茨は、鷲掴みにしていた髪を持ち上げ、勢いよく硬い廊下に叩きつけた。
「あああぁぁぁぁ！！」
綏の苦痛の叫びが辺りに広がる。
「次は砕く。吉峰と、どこで何をしていた」
綏が苦痛に歪んだ表情で口を引き攣(ひきつ)らせながら、涙を流し出した。
そして。
「――――香生を、…どうしたんですか」
その言葉に久茨は怒りを通り越し、我を忘れ、綏の頭を再び、先程以上の力で廊下に叩き潰した。
鈍い破壊音と共に綏の意識はなくなり、そして、その後頭部から鮮やかな紅い体液が流れ出した。

二十一

「白帝（はくてい）、私が綏（スイ）さんのお体をお清め致しますので、どうぞお任せ下さいまし」

意識をなくし、髪から額にかけて血を流している綏を抱かかえ、そのまま大鳳殿の湯浴みの間の前まで運んでき久茨に汐路が話し掛けてきた。

久茨は生気の失せた瞳で汐路を眺める。

あの時、狂気にかられ我を忘れた久茨は、綏の頭蓋骨を砕く程叩きつけた。

だが、流れ出た血にすぐさま我に返り、考えるより先に綏の後頭部を治癒した。

綏の頭から流れる大量に血に、久茨は顔から血の気が失せ、手が震えた。

死なせてしまう事に、綏を失う事に恐怖した。

すぐさま治癒を施し、傷は完全に塞いだものの、綏の意識はまだ戻っていない。

久茨は治癒を施し終え、綏が暖かい息を吐いている事を確認すると、直に大鳳殿の湯浴みの間に抱いて連れてきた。

早く血を洗い流させたかったからだ。

余りの血の軌跡が痛々しく、それが自分の所為だと思うと、久茨は居た堪れなくなった。

「否、私がする。お前は寝所の用意を整えろ」

「し、しかし…」

「寝所の用意を。昭洸殿は暫く使用できぬ故、その間、綏を私の部屋に住まわす。必要な物を用意しておけ」

久茨のその言葉に汐路は顔を強張らせた。

そしてその顔を血で染まっている綏の顔に向けた後、悲しみに打ちひしがれたように瞼を閉じた。

「――…仰せの通りに」
汐路は悲痛な声でそう言い、頭を下げて立ち去った。
久茨は汐路の弱々しい背中をぼんやりと見送った。
あの者は一体、自分の事をどう思っているのか。
久茨は時々、汐路の事を考えた事がある。
汐路は綏の事を愛がっている。
今迄久茨に決して逆らう事の無かった汐路だが、綏の事に関しては、暫し久茨に食いつくような態度を見せることがある。
まるで、娘を護る母のような眼差しで。
その娘のように思っている綏を、久茨が奴隷のように扱っていることも知っている。
十歳という幼さで無理やり犯し、そして、その為子を産めぬ体にし、その後三年の長きに亘って昭洸殿に監禁し、毎夜嫌がる綏を犯し続けている事も。
そして、綏のこの傷の事も、汐路ならもう誰が傷つけたか分かっているだろう。
その娘のような綏を、どうして自分に預け、そして逆らう事をしないのか。
憎くはないのか。
ただ畏れ、逆らえないのか。
汐路は私の乳母だ。
乳母とは赤子の頃よりその者を近くで育てる為、実の母子よりも近い存在だといえる。
久茨と汐路の関係もそうだった。
久茨の母は、たまに思い出したように久茨に会いに来るだけで、自分は父の寵を得る事だけに必死になっていた。
そんな中で、汐路は自分の事を育ててくれた。
久茨の性格からか汐路の性格からか、春日(かすが)と狭名葛(さなかずら)のような親密で砕けた関係では無いが、久茨はそれなりに汐路を好いていた。
言葉や態度では、罰するような振る舞いをする事が多々あるが、

実際本当にそうしようなどと思った事など一度足りともない。
一度、綏をめぐって汐路に霊撃を撃とうとした事があるが、外すつもりでいた。
苛立ち、煩わしく思う事はあっても、本当に罰しよう等とは思わない。
汐路は自分を息子などと思ってはいまいが、久茨は、それなりに母のように感じている。
汐路は、自分が赤子の頃には乳を飲ませ、幼少の頃には読み書きを教え、自分が熱を出せば、寝ることもせず付きっ切りで看病をしてくれた。
だが、母親のように接してきた事は一度も無い。
汐路は久茨に仕える事は仕事と割り切っている。
それを哀しいなど思った事は一度もない。
馴れ合った関係は煩わしいだけだ。
汐路は常に久茨と距離を置き、主と女官の関係を崩すことは無く、狭名葛のように愛情を向けてきた事もない。
その汐路が、乳飲み子ではなくなり、仕える必要の無くなった自分に、成人した今も仕えている事が久茨には不思議だった。
あの者は、宮仕えなどしてはいるが、身分の高い出身なのだ。
久茨が常識を超過した霊力を所持していた為、普通の中流貴族の家の者では、赤子の、霊力を抑える術を知らない久茨に仕える事が出来ぬという事で、霊力の高い大貴族の娘だった汐路が乳母に選ばれた。
久茨が成長した今、長々仕える必要などない。
娘のよう思っている綏を、奴隷のように扱っている自分になど。
それに、実家に帰れば私と同い年の実の息子がいる筈だ。
汐路の息子は、汐路が宮仕えする時に実家に置いてきて、その息子に乳母をつけ育てさせたと聞いている。
乳母をするために、実の息子に乳母をつけるなど妙な話だが、当時の、霊力を抑えることの出来なかった赤子の自分と、汐路の霊力

に恵まれていなかった息子を、共に育てる事が不可能だったらしい。
幼少の時、自分に乳兄弟がいない事を不思議に思って、何気なくその事を尋ねた。
そして、その事を知った時、自分の霊力を呪った。
自分の異常な霊力の所為で、汐路と息子を引き離してしまったと。
汐路は息子に会いに里下がりを願い出る事は一切なかった。
それはまだ幼かった久茨が心配しになり、その事を進めた程だ。
汐路は息子に対する愛情は薄いのか？
そして、綏の事も？
「……――ぅ」
久茨がそんな事を考えていたその時、腕に抱いていた綏が身動ぎした。
だが覚醒には至っていないようで、瞼はきつく閉じられている。
だが、表情は歪んでおり悪夢でも見ているかのようだった。
久茨は、綏の苦しそうな顔を見ると、汐路の事を考えるのを忘れた。
そして、更衣の間の扉を開き、その中に綏を抱いて入った。
「お前達は下がれ」
久茨は、湯浴みの用意を整えていた女官達に命じた。
「白帝…あの、その少女は？」
湯浴みの担当の女官が綏を見て青ざめている。
血の量に驚いているようだ。
「知る必要の無いことだ。下がれ」
そう命じると、いつもは久茨の湯浴みを手伝う女官達が、足早に下がって行った。
久茨は屈んで綏を膝の上に座らせた後、その着物に手をかけた。
綏が着ている着物は、いつも久茨が着せている高価な着物と違い、町娘のような格子文様の入った赤の小袖だった。
久茨の脳裏に叶の言葉か浮か甦る。
その事を考えながら、久茨は綏の帯に刺さっている牡丹の簪を抜

き取り、帯を解き着物を全て脱がした。
そして、綏の体を見て表情を濁した。
小さな、毎夜見慣れた白い体に刻まれている無数の紅い痣が、何故か痛々しかった。
表情をしかめながらも、自身も着物を脱ぎ、綏を抱いて湯殿に向かった。
湯殿には、既に白い湯気が立ち込められており、敷き詰められた簀子の中心にある大型の檜の浴槽が霞んで見える。
久茨は浴槽の側までくると、側に用意されていた椅子に座り、その上に綏を座らせた。
そして湯桶で湯をすくい綏の肩に浴びさせた後、血の付着している髪を丁寧に湯で流しだした。
血が染まった紅く透明な湯が綏の全身を流れる。
それは、余り見ていたくない光景だった。
その光景を居た堪れない面持ちで眺めた後、柔らかい髪を洗い、隅々まで見知った、紅い痣が舞い散る体も洗い流した。
檜の清々しい香が漂う湯船に、綏を倒れないように座らせつからせた後、久茨も血で染まっている体を洗い湯につかった。
浴槽の中、倒れそうな綏を支えるため、自分の胸に小さな背をもたれ掛けさせる。
その体勢の為、久茨の目に自然と綏のうなじや小さな肩がよく見えた。
そこには肩から鎖骨にかけて、久茨が十日程前に噛んだ歯型が、皮膚を裂き、まだはっきりと残っていた。
久茨はその傷に治癒を施した後、手首に残る浅黒い紐の痣にも治癒を施し、他の痣も全て消す。
綏の体は、痣も傷も全て無くなり、純潔のような白い裸体になった。
久茨はその裸体を、無表情に目を細めながら眺め、縋るように後ろから抱き包んだ。

久茨は罪悪感に囚われていた。
しかし、痣を消してもその心は埋まらない。
久茨は罪悪感に囚われながら、頭の傷を再度確認する為、首に力が無いためぐったりしている綏の頭を支えながら、背中に張り付いている長い髪を前に追いやった。
久茨はその表面の傷だけでなく、その内部にも傷があるかもしれないと思い、念のため、そこにも治癒を施していた。
その事で安心はしていたものの、綏が目覚める気配がない事に次第に不安を感じていた。
久茨は檜の香が漂う小さな体を、不安を埋めるように再び強く抱きしめ、濡れた髪に額をあてた。
そして。
「――――…すまなかった」
久茨の今にも消えそうな小さな声が、湯気に巻き上げられ微かに湯殿に響いく。
それは、久茨が生まれて初めて口に出した言葉だった。

二十二

あれから一月経っても、綏は目覚めなかった。
微かに瞼を震わせ、表情を歪ませることはあったものの、目を開く事はなかった。
久茨は不安と恐怖に駆られ、毎晩、自分の寝所に寝かせている綏を抱き包んで、少しでも不安と恐怖から逃れようとしていた。

「あれは、目覚めぬかもしれぬ」
涼しい夜風が吹く中、久茨は庭に解放されている縁座敷で脇息にもたれ掛かりながら、黙って後ろに控えている汐路に言った。
「――表情を、微かに動かされる事が御座います」
汐路は、目覚めるとは言わず、無難な返答を返した。
目覚めるのが遅いので、綏が倒れてから五日後にその専門の医師に綏を診断させていた。
それによれば、精神的なものが原因らしい。
何かから逃げているのだと、医師は言った。
――――そう、逃げたがっている。自分から。
「私は、どうすれば良い？」
久茨の少し後ろに控えていた汐路が、微かに動いた。
その微動な動きの意味は、動揺のようだ。
久茨は普段から他人に意見を求める事はない。
それが、汐路を動揺させたようだ。
「――――畏れながら、暫くどこかの離宮か山荘で、療養させてあげた方がよろしいかと」
汐路が少し声を震わせながら言った。
汐路も綏の目覚めぬ原因を知っている。
自分から離した方が綏の為にいいと、暗に言っているのだ。

「綏をそこに預ければ、目覚めるのか？」
「私には分かりかねます」
「もし、そこで目覚めたとしても、私の元へは戻っては来るまい。此処から出せば、私はあれを失う。……失うくらいならば、今のままで良い」
それは久茨の本心であり、また偽りでもあった。
失う事を考えるだけで気が狂いそうになる。
だが、元気に動いている姿を再び見たかった。
寝坊をして、仕事に遅れないように慌しく朝餉を食べる姿を。汐路に短歌の書き方を教わったと言って頬を紅潮させながら恥ずかしそうに歌の文を渡す姿を。合う度に向けていた花の様な笑顔を。
しかし、目覚めた処で今の自分にそれは叶わない。
「何故、こんな風になった？」
答えは分かっている。
自分が、無理やり手籠めにしたからだ。
痛みつけ、縛り、奴隷のように扱い、そして何もかも奪ったから。
「――……私には分かりかねます」
久茨は、汐路のその言葉に返事をする事はなかった。
何もかもを知っていながら、あえて知らないという汐路に苛立ちを覚えたが、その一方で、残酷すぎる事実を突きつけてこなかった事に感謝した。
「――――私は、もう寝所に戻る」
久茨は立ち上がり、既に湯浴みを済ませて夜着を着ていたため、そのまま寝所に向かった。

寝所の蝋燭に火は灯っておらず、暗闇の中、月明かりだけを頼りに、褥の上に眠り続けている綏の側まで久茨は歩み寄った。
そして側に置いてある蝋台の蝋燭に火を灯し、綏の姿を映し出し

た。
安らかに眠っている。
時々表情を歪ませ、うなされた様な声を上げる事はあるものの、大抵はこうして安らかな表情をしていた。
安らかな表情をして、何の夢をみているのか久茨には分かりかねたが、自分の夢で無いことだけは分かった。
久茨は綏の隣に横たわり柔らかく抱き包む。
何もせず、ただ抱き包んで毎夜過ごしていた。
昔、二人が兄と妹だった頃のように。

二十三

その八日後、久茨は皇宮の帝の間で公務に没頭していた。
綏は依然目覚める気配を見せていない。
心配ではあったが、久茨の性格上その事で仕事を疎(おろそ)かにすることは出来ず、よって綏が倒れてからも、久茨は欠かさず公務に励んでいた。
久茨が地方の報告書に気を集中させていると、随時側に控えている葛木が微かに動き、同じように書簡に目を通していた視線を閉まっている扉の襖に視線を向ける。
久茨もその視線に合せ扉に目をやった。
音も気配もなかったが、微かに抑えてあるような霊気が感じられたからだ。
「白帝、五十蔵(いがくら)で御座います。御前失礼してもよろしいでしょうか」
閉まっている扉の向こうから、十代後半くらいの若々しい畏まった声が飛んできた。
久茨はその声の主を五十蔵衛門佐(えもんのすけ)と判断すると、「入れ」とだけ言った。
久茨が行動を促すと五十蔵は、一分(いちぶ)の無駄もない動作で扉を開け閉めし、膝を進めて中に入り頭を下げた。
「何用だ」
「はい」
五十蔵は頭を上げ久茨と向き合う。
「本日ご謹慎がとれました皇太子が白帝のお目通りを願い出(おい)ておられます。是非、話したい事があると申され、今より此方に伺いたいとの仰せです。お通ししてもよろしいでしょうか」
久茨は五十蔵の言葉に吐き気がした。
久茨は吉峰の事を一月余り謹慎させていたが、その間吉峰は、何度か話があるので会いたいと願い出てきていた。

しかし久茨は一向に取り合わず、この一月余り吉峰を放っておいていのだ。
会いたくも無かったし、出来れば殺してやりたいと思っていた。
だが、以前処罰した霊力の低い第四皇子と違い、霊力が高く現在皇太子の地位にある吉峰を、いくら白帝の地位にある久茨でも何の理由なしに処罰する事は出来ず、そのまま謹慎させておくに留めざるを得なかった。
綏が女御（にょうご）やそれ相応の身分をもっていれば、即刻、帝の妻に手を出したとの事で処罰出来　たのだが、綏には何の身分もなく、下級女官を辞めさせた今は後宮で最も地位のない者といえる。
その女を外に連れ出したからといって吉峰を処罰する事が出来ず、一月余り殺してやりたいと思いながらも、久茨は吉峰の事を謹慎だけに留めていた。
顔など見たくもない。
そう思った久茨はあからさまに嫌悪を面に表し、五十蔵を一瞥した。
「通すな。吉峰に伝えよ。二度とあれに近づくなと、もし次に近づいた時は殺すとも。分かったら下がれ」
久茨が嫌悪に満ちた声で五十蔵を促すと、五十蔵はその言葉に恐れ戦いたように早々と退出していった。
久茨は吉峰の名が出た事で気分を害し、苛立ちげに抑えてある霊力を放出した。
その事で、葛木は少しうろたえたような素振りを見せたが、久茨は気にせずそのまま霊力を放出し続ける。
久茨はこの時、吉峰の謹慎がとれた事に恐怖を感じていた。
再び自分の目を盗み、綏と二人で出掛けてしまうような気がし、言いようの無い胸騒ぎを感じていた。
綏の意識はなく外に出る事は出来ないものの、何故かまた吉峰と二人でどこかに行ってしまう気がしてならなかった。
そして、次はもう戻っては来ないだろうと思った。

二十四

その夕刻。
久茨は吉峰の謹慎がとれた事でいいようのない不安に駆られ、仕事を早く切り上げ綏の寝ている自室の寝所に駆けつけた。
綏を見て気を休めたかった。
自分の手の内にあると。
「白帝！」
久茨が足早に部屋の中に入ったその時、汐路の歓喜に満ちた声が飛んできた。
教養を備え持つ汐路らしくないその大声に、久茨は柳眉を潜める。
不快ともとれる声に久茨は返事をせず、ただ声のの方向を向いた。
声は久茨の奥にある寝所からで、いつもは閉じてある襖が少し開いており、そこから見える寝所には涙に濡れた汐路が袖で口元を押さえながら此方を見ていた。
汐路の涙を見た久茨は驚いた。
汐路の涙など、一度も見たことがないからだ。
「どうした」
汐路の只ならぬ形相に、久茨は怪訝に尋ねる。
常に凛然で、母でもある汐路の涙に、些か不安に近いものを感じて。
しかし汐路は、そんな久茨の感情を払うかのように、目尻を緩ませた。
「白帝、綏さんが、お目を覚まされました」
冷静を取り戻したのか、汐路は先程の大声とは違い、女官らしい流暢な声で言った。
その言葉に久茨は驚き、汐路の事など忘れ、一目散に寝所に急ぎ入った。
そこには褥の上で、白い夜着に包まれた小さな上体を起こし、恐

怖と憎悪に満ちた紫の瞳を此方に向ける綏の姿があった。
久茨はその表情に少し心が痛んだが、それ以上に綏がその瞳を開き起き上がっている事に悦びをじ、そして綏に駆け寄り抱き包んだ。
「――――綏」
その名を囁き、久茨は汐路の事など忘れ、縋るように綏の柔らかい髪に顔を埋めた。
綏は抵抗せず微動すらしない。
久茨はそれが心許なく感じ、更に強い力で抱きしめた。
「白帝、今お知らせの使いを皇宮に送ろうとしていた所だったのです。何たる偶然でしょう」
汐路が歓喜に満ちた声で綏に縋(すが)り付いている久茨に言う。
久茨は感極まっていて、汐路の問いに何も返事をする事が出来ずにただ綏の髪に顔を埋める。
汐路はそんな久茨にそれ以上言葉を掛けてはこず、暫く三人の間に沈黙が流れたが、その沈黙のお陰で久茨は少し気を落ち着かせる事が出来た。
「――――汐路、暫くこれと二人になりたい」
久茨は綏の髪に顔を埋めながら篭った声で汐路に訴える。
命令するようにではなく、ただ願いかけるように。
「はい、後でこちらの方に夕餉を運ばせます故、ごゆっくりお話になって下さいまし」
汐路は久茨の祈る声に、嬉しさを滲ませた声で返事をし、綏に縋り付いている久茨の背を通り過ぎ、寝所の扉を閉め出て行った。
久茨は汐路が出て行った後、時間が経ち少し落ち着きを取り戻していたものの、言葉を発する事が出来ず、長い間ただ綏に縋りつくように抱き包んでいた。
その時、黙って抱き包まれていた綏が微かに震えた。
「――――香生を、どうしたんですか？」
綏の震える小さな声が久茨に問い掛ける。
久茨はその声に少し驚き、髪に埋めていた顔だけを体から離し、

綏と吐息がかかる程の距離に顔を移した。
至近距離で伺い見える綏の紫の瞳は、恐怖を映し出していた。
小さな薄い唇を震わす。
「…香生は？」
綏の震える唇から啼くような声が漏れ、そして暖かい吐息が久茨の頬を掠めた。
久茨はその吐息を感じながら、綏の言葉を霞んだ意識で考える。
そしてその名の人物に辿り着き、久茨は綏の恐怖に滲んだ紫の瞳を哀れんだ表情で見つめ返した。
「――――殺した」
久茨は静かに綏を見つめながら言った。
綏は久茨のその言葉と共に顔を歪ませ涙を流し出す。
久茨はその表情が痛々しく涙が哀れに感じて見ていられなくなり、顔を背け再び綏の髪に顔を埋める。
綏は久茨に体を自由にさせたまま、肩を痙攣させ嗚咽を殺して泣き続ける。
綏の震える体が久茨の胸を締め付けた。
「――――新しい女官をつけてやる。泣くな、綏」
久茨は胸が痛くなり、綏の髪に顔を埋めたまま篭った声で言った。
久茨にはこれ以上綏を慰める方法が分からなかった。
ただ、涙を止めてやりたいと願い、震える小さな体を強く抱き包む。
背中を擦りながら、髪を撫でながら、慈しむように。
しかし綏は泣き止む事はなく、そのまま無常に時は過ぎていった。

二十五

綏が意識を取り戻してから五日、昭洸殿は完全とまでいえないがほぼ修復されているにも関わらず、久茨は綏を大鳳殿の自室に留め置いていた。

その夜、久茨はいつもより早い時刻に、綏がいる自室の寝所に向かった。

久茨は綏をこの数日抱く事はせず、ただ抱き包み夜を過ごしている。

何度か抱こうとし唇を這わしたが、綏の歪む表情が久茨にそれ以上の行動をさせる事を許さず、ただ　ただ長い夜、綏を抱き包み過ごしていた。

この日も久茨は綏が寝ている褥に音もなく横たわった。

そして久茨に背を向け横たわっている小さな体を、いつものように抱きしめる。

「寝たか、綏」

動かない小さな背に久茨は独り言のように問う。

綏は目覚めてから、久茨に香生の事を尋ねた以来一度も口を開いていない。

久茨にだけではなく汐路にもそのような態度をとっているらしく、その上食事も摂っていないとの事だった。

その事に久茨は憤(いきどお)りを感じていた。

久茨はその憤りを埋めるように綏を抱いている腕に力を込めたその時、抱き包んでいた綏の体が微かに震えた。

それを感じ取った久茨は、綏を抱いていた片腕を離し、その腕で自身の上体を少し持ち上げ背中を向けている綏の顔を覗き込んだ。

綏の瞳は開かれ、そして憎悪に満ちた表情をしていた。

「――――そんなに、私が厭か」

久茨は綏を見下ろしながら、静かに囁く。

しかし綏の返事はなく、そのまま動く事もせず黙ったままだ。
久茨は綏にここ数日怒りを溜めていた。
幾ら話し掛けても返事をせず、幾ら優しく接してもその憎悪の表情を変えない綏に。
そして、今夜も返事をしないことに怒りを感じ、久茨は綏を乱暴に仰向けにして組み敷いた。
「いつまでそうしているつもりだ」
苛立った口調で言ったが、その言葉にも綏は返事をせず、黙って久茨を見上げ続ける。
その態度に久茨は苛立ちが増し、その態度を改めさせようと引き結ばれた唇に自身の唇を重ね、舌で無理やり抉じ開け口腔に侵入した。
痛みを与える程強く舌を吸い上げ、息が出来ないよう咽元まで深く挿し込み蹂躙(じゅうりん)する。
「……んぅ、ぅ！」
綏が苦しみだしたことを確認すると、唇を離し再び見下ろした。
しかし涙目になってはいるが、唇をきつく結び直し言葉を話す気配はない。
久茨はもう限界に達していた。
「――返事をしないのならば、抱くぞ」
苛立ったその言葉にも、綏は何の反応も見せず表情を変えない。
久茨はその態度にとうとう抑えていた怒りと、ここ最近溜めていた欲求が爆発した。
綏の夜着の帯を荒々しく解き、夜着を脱がす。
だが綏は、体を震わせたものの、やはり声を上げる事はしない。
久茨はその事に更に怒りを増し、何の愛撫も施していない秘所に指を捩じ込んだ。
「…ぅぅ」
綏の顔が激しく歪み、微かな悲鳴が漏れる。
「返事をする気になったか」

久茨は冷酷に言葉を促す。
痛みにきつく閉じられた瞼が微かに開き、久茨を睨んだ。
しかし、唇を引き攣らせたまま開こうとはしない。
久茨はその態度に怒り、濡れていない秘所に更にもう一本捩じ込む。
「ぅく」
綏の咽から再び小さな悲鳴が漏れる。
「これ以上黙りとおすつもりなら、本気で抱くぞ」
痛みで涙を浮かべている紫の双眸が久茨を再び睨み、そして引き攣れていた唇を動かした。
「――――…何故、私じゃなく、香生を…。久茨様が殺したかったのは、私の筈…。何故、香生を…ぅ」
感情を必死で抑えたような小さな声でそう言うと、手で顔を覆って肩を震わし泣き出した。
久茨は綏の秘所に捩じ込んでいた二本の指を、痛みを与えないようゆっくり引き抜く。
そして綏の体に出来るだけ体重をかけないように上から抱き包んだ。
「お前を殺したいなど思った事は一度もない。その女官の事は忘れろ」
久茨は優しく言い、そして慰めるように髪を撫でた。
久茨には香生を殺したことに対して罪悪感など微塵もない。
久茨は今迄、その霊力の故に他国から危険視され、それこそ赤子の頃から命を狙われてきていた。
幼児期から今に駆けて、数え切れない程の人々をその手に掛けてきている。
六、七歳の頃、既に人を殺す事に慣れてしまった久茨には、罪悪の念など、もう持ち合わせていなかった。
ただ感じるのは、綏が涙を流していることに対する深い憤りだけだ。

久茨は泣き続けるその唇に、無意識に口付をした。
久茨は今、綏を慰めたいと思っている。
しかし口付けなど綏にとっては苦痛にしかならないと分かっているのにも関わらず、無意識に体が動いてしまった。
自分でも持て余す深い憤りが、恐らくそうさせたのだろう。
慰めたいと思う以上に、慰めて欲しいと思ったのだ。
唇を重ねると舌を柔らかく侵入させ、綏の舌に触れると少し動きを止めた。
綏の舌は震えているが逃げるような抵抗はない。
抵抗がないことを確かめると、震える舌を濃厚に、だが優しく絡めとる。
唇を離すと次は耳にもっていきその中に舌を挿し、緩く出し入れさせる。
綏はその行為に体を強張らせたが、やはり抵抗はない。
久茨は綏が体を強張らせたことに多少の罪悪感を覚えたが、もう抑えることなど出来ず、行為を進行させてゆく。
耳を愛撫しながら、徐々に掌を下腹部に滑らし、その下の秘所に指を這わす。
中心をなぞり、優しく芯を刺激し、綏を味わい、自分を慰めてゆく。
そして耳を愛撫していた舌を離し、露わになっている幼く小さな桜色の胸の突起を咥えた。
芯を刺激している指はそのままに、胸の突起を舌で舐め、柔らかく吸い上げる。
綏は未だ抵抗しない。
ただ声を殺して泣くだけだ。
恐らく抵抗など無意味だと諦めているのだろう。
今迄百万遍と助けを請うてきた綏を、冷酷に犯してきたのだから。
以前もそうだった。
抱き始めてからの二、三ヶ月程は必死に抵抗していたが、徐々に

それをすることがなくなり、大人しく久茨に体を預けるようになった。
綏が抵抗するのは限界に達してからだ。
幼い綏の体が、久茨の容赦ない熱に長時間耐えられる訳がなく、すぐ限界になる。
だが限界になるまでは大人しく抱かれていた。
体を震わし、唇を引き攣らせ、涙を流しながら、ただじっと。
久茨はじっとしている綏を舌と指で味わいながら、自分でも分からない複雑な感情に胸を締め付けられた。
だが行為を止める気にもならなかった。
指で愛撫していた綏の小さな道に潤いが出てきたのを確認すると、その道にゆっくりと一本の指を侵入させる。
第二関節まで入れると、道の天井を押し上げるように、先の方だけ折り曲げた。
「――――ぅ、、、、っ」
綏の身体が震える。
そこは綏の弱点の一つであった。
久茨はもう綏の身体を、余す所なく知り尽くしている。
綏以上に知っているといえる程に。
綏が身体を震わせた事を確認すると、その部分に優しく刺激を与えだした。
同じ部分を執拗に攻め立て、綏のもう一つの弱点である左胸の突起も執拗に愛撫する。
次第に小さな道は、自身を埋めるのに適度な頃合になったので、久茨はその道から指を抜き取り、夜着を脱ぎ捨てた。
そして、互いに汗ばむ体を密着させその熱を交換させる。
綏は手で顔を覆ったまま今も泣き続け、そして唇を震わせていた。
久茨は顔を覆っている手を退けさせようと、その手首を掴んだが、止めた。
顔を隠したいなら、自分を見たくないなら、そうさせてやろうと

思った。
掴んだ手首を放し、そのまま体中に愛撫を施す。
そっと柔らかく。至宝を扱うように。
そしてもう抑えが聞かなくなっている肉具を、潤っている小さな道に当てた。
「挿れるぞ」
久茨が体を繋げる前に確認を取るのは、これが初めての事だった。
綏は泣き続けたまま、微かに唇を動かす。
だが開いた唇は、声を発する事なくすぐに閉じられた。
出そうとした言葉は拒絶。出さなかったのは、出しても意味を成さないと判断したからだろう。
綏の判断は正しい。
聞きはしたが、久茨は拒絶しても止めるつもりなどなかった。
止めるつもりがないのに何故こんなことを聞いたのか、久茨にも分からない。
ただ何となく、その心を聞いてみたかった。
顔を覆っている手の甲に口付けを落とすと、既に先端が入りかけている熱をそのまま、出来るだけ綏に負担が掛からないようにゆっくりと挿入させる。
すると綏の表情が小さく苦痛に歪み、顔を覆っていた手で久茨の肩を力なく掴んだ。
久茨は一度動きを止め、肩を掴んでいる小さな手を解かせ、そのままその指を口に含んだ。
舌で絡め捕り、歯で甘噛みし、強弱をつけ吸い上げる。
綏の体が少し強張りを解いた事を確認すると、久茨はその手を自分の首に回させた。
力を抜かせて出来るだけ痛みを軽減させてやる為に。
まだ十三で、その上人より発育が遅い綏の体は、久茨がどんなに柔らかく抱いても痛みを訴える。
痛む理由がそれだけではない事も、久茨は知っている。

昔久茨が乱暴に壊した子宮が、消えることなく歪な形で残っているからだと。
まだ男を受け入れられる体ではない上に、痛みの爆弾を抱えている。
綏の身体はいつ壊れても不思議ではなかった。
否、もう既に壊れているのだ。
そんな綏を今迄乱暴に抱いてきて、今また抱こうとする自分を最低だと、この時初めて思った。
だが止めることなど、久茨には出来ない。
既に理性など影のようになってしまい、抑えられない欲望に支配されていた。
首に回した綏の腕がちゃんと掴んだ事を確認すると、汗ばんでいる白い額に、柔らかく口付けを落とした。
まるで許しを請うように。
そして、綏に自分の首を掴ませた状態のまま、出来るだけ痛みを与えないように、浅い出し入れを始めた。
細過ぎる道筋の壁を出来るだけ傷つけないように。ゆっくりと徐々に慣れさせてゆく。
綏は小さな悲鳴を上げ、それと共に掴まされている久茨の首に力を入れた。
久茨は痛みを訴える綏に口付けを落としながら、動きを徐々に速める。
そして潤いが増した事を確認すると、浅い出し入れから深い出し入れに切り替えた。
綏は苦痛の声を漏らし、きつく表情を歪ます。
久茨は綏のその表情に、深い出し入れを出来るだけ押さた。
しかし、それでも綏の苦痛は変わることはない。
幼い体内の道筋は、久茨の容量に抉(えぐ)れていた。
綏はもう限界だと云わんばかりに、必死で身体を動かし逃げようとする。

その力はまだ十三歳の、それも見るからに弱々しい華奢な身体からは想像が付かないほど強い。
危機に瀕して、本能的に持てる力以上の力を出しているのだろう。
しかしその力すら、久茨相手では唯の戯れにしかない。
久茨は一旦動きを止め、暴れる綏の身体を紙切のように片手で押さえつける。
綏がある程度くるとその体躯からは考えられない力で暴れ出すのも、それを久茨が簡単に押さえつけるのも、いつもの事だった。
「綏、力を抜け」
綏は泣きじゃくったまま、久茨の言葉など聞いていないようだったが、徐々に暴れるのを止める。
その様子からして久茨に言われたからというよりも、動きが止まって痛みが治まったからのようだった。
久茨は泣き続ける綏をあやす為、強張る体の力を抜かせてやる為に、至る所に愛撫を施す。
だがその体内から自分を抜き出す事はしない。
まだ終わっていない事を、ここで止める気などない事を教える為に。
暫くその状態で休ませた後、再び深く、しかし傷に当たらない程度に抑えて、ゆっくりと出し入れを始めた。
綏はそれに対して始めは耐えるものの、摩擦が速くなるにつれて再び暴れ出す。
しかし久茨はもう動きを止めてやる気はなかった。
泣き暴れる身体を押さえつけ、徐々に速さを加速させて行く。
次第に摩擦に刺激された綏の体内は、生理的に透明な体液が溢れ、激しい収縮を起こし出した。
そして二度目の収縮が起こった時、その収縮と共に久茨も絶頂を迎え綏の体内に欲望を放出した。

その日から久茨は再び綏を毎夜抱くようになった。
しかし以前のように暴力的にではなく、慈しむように。
綏は抵抗を見せる事はなかったが、やはり言葉を話さず、食事も摂らなかった。
綏が食事を摂らないため、回復霊術を施し死なせないようにしていたが、綏がそれを拒む態度をとる為、久茨を不安に陥れた。

二十六

「綏様、この水羊羹(ようかん)おいしゅう御座いますよ。今都で人気の福屋から届けさせた物なのです、お一つ如何(いかが)ですか？」

そう言って白帝・久茨の部屋の隅に蹲(うずくま)っている綏に、新しく綏の世話にきた女官の一人の小柏(こはく)が話し掛けてきた。

綏には二ヶ月前から新しい世話と見張りを兼ねた女官が三人付けられており、その三人の内いつも最低一人がこうして綏の側に付いていた。

香生の時のようにその中に長は居らず、汐路が三人を取り締まっている。

恐らく一人に権限がでると、また以前のようになるかもしれないという判断からだろう。

そして今日は三人の内の一人、小柏だけが綏の見張りをしていた。

綏が小柏に返事をせずにいると、小柏は直に諦め黙って一人でその羊羹を食べ出す。

小柏や後の二人は、香生と違って無愛想な綏に余り話し掛けてくる事はしなかった。

一人で羊羹を食べながら読書をしだした小柏の側で、綏は久茨に着せられた、真紅の小袖の上に薄花文様の散りばめられた白地の打掛を纏い、そしてそれに濃い皺(しわ)が出来る程きつく膝を折って小さく蹲(うずくま)っている。

この光景は、三人が来てからのこの二ヶ月で既に日常と化していた。

見張りが一人の時は、その部屋にいる綏と全く会話がなく静けさに包まれ、そして見張りが二人以上の時は、綏を外して会話に耽(ふけ)る。

綏はこの三人と一度も会話をした事がない。

それは綏に原因があった。

始めの頃三人は綏に話し掛けていたが、綏が無視を通していると

いつの間にか話し掛けてくる事をしなくなった。
しかし、今は誰とも話したくない綏にとって、その方が在り難かった。
綏は見張りが一人の時の方が静かで好きだったので、今日は小柏一人で安堵していた。
「――そういえば」
その時小柏が、羊羹を摘みながら何かを思い出したような声を上げた。
綏は二人きりの時は滅多に出ない声に反応して、膝に埋めていた顔を少し上げ、目だけで小柏を捉(とら)える。
小柏は綏の方向を見ておらず、読書の体勢のまま羊羹をつついていた。
「もうすぐ皇太子が正妃を迎える婚儀が行われるのですよ。お相手は三宮家の二の姫だそうですが。皇太后様も後宮を離れておられ、白帝に后妃がいない今、その方が此処で一番権力をお持ちになられるでしょうね。私(わたくし)出来ればお優しい方がいいですわ」
小柏は話しかけるというより独り言の様に言った。
小柏の言葉を聞いて綏は、もう随分会っていない吉峰を思い出した。
そして正妃を幸せにすると誓ったあの背中を。
「――きっと、いい方だよ」
綏がそう言うと、読書に熱中し下を向いていた小柏が勢いよく顔を上げ、そしてその反動で片手に持っていた羊羹を畳に落とした。
その顔は口をぽかんと開け呆然としている。
「…あ、えっと」
綏は着物に顔を埋め、目だけで小柏の呆然としている顔を見据える。
「あ、可愛らしいお声ですね…」
小柏は落とした羊羹を紙で拾いながら、あたふたと言う。
羊羹を拾い上げると訝しげに綏を観察し出し、そして口を開いた。

「初めてですね、お声を聞かせてくれたのは。どういう風の吹き回しですか？」
小柏の声は少し嫌悪が滲みだしている。
綏は小柏の嫌悪の声を聞いて、無視をしていた自分に苛立っていたのだろうと適当に考えた。
「何でもない」
綏は再び顔を背け着物に埋(うず)める。
「ご気分がいいなら少し位お話しましょう。読書もいい加減飽ましたし」
綏は小柏の怒った口調に少し怯え、再び目だけを向ける。
そして目に捉えた小柏の表情はやはり怒っていた。
「綏様って皇太子とお知り合いなのですか？　汐路様にそのような事を伺いましたが」
小柏は不躾に言い、そして綏に向けていた視線を逸らし羊羹の隣に置いてあったお茶をすする。
「――――友達」
綏は小柏の行動を目で捉えながら一言呟く。
――――友達。
酷く不思議な感じがした。
吉峰とは友達だ。
だが、それ以上の感情が溢れていた。
自分を正妃にすると言った吉峰。
妻は一人しか娶らないと言った吉峰。
生涯その一人を慈しみ続けるといった吉峰。
その感情が何なのかは分らないが、酷く居た堪れなくなった。
「そうなのですか。三宮家の姫の事もご存知で？」
「知らない。――――…でも、気が良さそうな方だって言ってた」
「あら、そうですか。良かった」
小柏は安心した笑みを浮かべ、再びお茶をすする。
しかし綏は、嬉しそうな小柏とは反対に、何故か哀(かな)しく居た堪れ

ない気持ちになった。そして、そんな自分を呪った。
唯一の友達の婚儀を喜べない自分を酷く醜く感じて。
「――――婚儀、いつなの？」
綏はその感情を隠すように、再び顔を着物に埋めてから尋ねる。
「ええ、明後日ですよ。今賀陽殿は大忙しらしいですわ。賀陽殿の友達が言っておりました。婚儀が終わった後も宴やら何やら賑わうでしょうね」
小柏はその光景を想像したかのように、綏を見据えながら生き生きと話す。
「――――…そうだね…」
綏は生き生きとした小柏とは別に、無愛想に着物に顔を埋めながら、どうでもいいといった風に一言返事を返す。
「ええ、私も婚儀の後の宴に是非参加したかったですわ。賀陽殿の女官が羨ましくって。白帝は後の宴には参加しないらしいですからね。大鳳殿の女官は皆残念がっているのですよ。まあ、あれだけ不仲では仕方ありませんけれど。皇太子を一月も謹慎させる程ですもの。一体何が原因だったのでしょうね」
小柏は綏の無愛想な態度など気に留めず、ただ暇な時間を潰すかのように話を続ける。
「うん…」
「そうだわ、綏様から白帝に宴へご出席されるようお願いしてみては？　綏様のお願いなら白帝も聞き入れて下さるかも。それに綏様もお友達の宴には参加したいでしょう？」
「…うん」
小柏の止まらない声を他所に、綏はこの時、既に何も考えられなくなっていた。
着物に顔を埋め、理由の知らない感情に胸を締め付けられ、そして涙が溢れていた。
（吉峰が結婚する）
その事が綏を酷く打ちのめした。

そして、そんな感情を抱く自分に嫌悪し、居た堪れなくなった。
その日綏は、顔を上げる事が出来ず、終始止まない小柏の話にただ頷いて返事をしていた。

二十七

夕刻、小柏が夕餉の支度を膳司(かしわでのつかさ)に連絡を入れてくれた後、綏の見張りは小柏から汐路に交代していた。

「綏さん、今日の献立は鮎が主になっておりますよ。今は季節でおいしゅう御座います。一口だけでも召し上がって下さいな」

汐路は、先程膳司の女官が置いていった、鮎塩焼(あゆのしおや)きや、鮎揚(あゆのあ)げ物(もの)など様々な豪華な料理が盛られた膳を見つめながら綏に食べるよう促した。

綏はその汐路の言葉にただ頭を振って拒否する。

「――綏さん、もう三ヶ月余りまともに食事を摂られていないではないですか…。何か食べないと体に毒ですよ。これだけでもどうぞ」

汐路は眉を下げ哀しそうな表情を見せながらも、膳に盛られていたお吸い物の茶碗の蓋を開け、綏に飲むように進める。

「いい香りですよ、膳司の者が鮎出汁だと申していました。おいしゅう御座いますから、此方にいらして下さい」

綏は汐路の言葉を無視し部屋の隅から動こうとしない。

綏は汐路の事が今でも好きだった。

しかし汐路は、綏の事を思いやってはくれるが、久茨の前では綏より久茨を優先させ、久茨に自分を売るような素振りを多々見せる事がある。

赤子のころから仕えてきて、現在白帝の久茨と、つい四、五年前に知り合った何の身分もない綏を比べれば、久茨を優先させる汐路の事は理解できたが、それでも裏切られたような気持ちは拭(ぬぐ)えなかった。

綏は汐路の事を母親のように感じており、そしてそれ故に護ってくれない事に深い憤りを感じていた。

勝手に母と慕って、その事に憤りを感じるなんて自分勝手だと分

かっていても、所詮まだ十三歳の綏には許す事が出来なかった。
「――今日、小柏とお話されたようですね。小柏から伺いました。私をお嫌いになる気持ちは分かります。ですが、せめて食事だけでも」
「嫌いじゃない」
綏は汐路の言葉に心が痛みすぐさま否定した。
そんな風に取られるのが酷く辛く感じ、そして、そう思われていれば汐路は自分を嫌いになるだろうと思い怖くなった。
「汐路様の事、嫌いじゃない」
綏は再び繰り返す。
汐路は二、三ヶ月ぶりに口を利いた綏に驚いたのか、目を見開き呆然としている。
汐路はそのまま綏を見つめた後、嬉しそうに微笑んだ。
「有難う御座います。私も、綏さんが好きですよ」
汐路の言葉に綏は頬を染め、そして最近感じた事のない温かさが胸に込み上げてきた。
「ささ、お食事をどうぞ。いくら回復術を受けていてもやはり自然の摂理に反した事です。お体に良いとは思えません。それに美味しいものを食べると気分も良くなりますよ」
汐路はそう言って綏を膳まで招き寄せるようとする。
しかし、綏は食事を取りたくなかった。
酷く物を食べたい気持ちはあったが、それ以上に綏は久茨に抵抗したかったのだ。
それが綏に出来る僅かな抵抗だった。
その為綏は、汐路に向かって再び頭を振る。
「――…綏さん」
汐路は綏のその拒否の仕草を見て悲しそうに表情を歪める。
綏は汐路を悲しませた事に心が痛んだが、しかし此処までくると意思を貫き通したかった。
綏と汐路の間に、暫く沈黙が漂う。

しかしその時。

「――食事中か」

低い硝子のような声が綏と汐路に飛んできた。

二人はその声に慌てて振り返る。

そこには霊力を極限まで抑え気配を消し、扉の前で佇んでいる久茨の姿があった。

「白帝」

汐路はそう言うと直に頭を下げる。

綏はこんな時間に戻ってくる筈のない久茨の登場に驚き体が凍てついた。

久茨はそんな綏を無視し、視線を手付かずの鮎御前に向け、そして汐路に移す。

「――まだ、食事をとらないのか」

「ええ、ですが今日、お声を発せられました。良い御兆候かと」

久茨の苛立った口調とは対照に、汐路は清々しく言う。

「そうか」

別段感情の篭らない声で一言返事をしてから、久茨は凍てついている綏に視線を這わす。

「汐路、後は私がする。下がれ」

久茨のその言葉と同時に、汐路は再び頭を深く下げ、絹擦りも優雅に部屋を出て行った。

そして初夏の薄暗い部屋の中、凍てついている綏は久茨から視線を逸らし、佇んでいる久茨はそんな綏を無表情で観察する。

久茨は蹲っている綏を暫く見た後、静かに歩み寄り、そして荒々しく腕を掴み上げた。

綏はその事に恐怖し、腕を振り払おうとしたが、やはり綏の力では久茨の前では何の役にも立たず、久茨の手に軽々と引きずられる。

久茨は綏を膳の前まで引きずり、そしてそこに乱暴に座らせた。

「食べろ」

久茨の鋭い口調に綏は蒼白しながら側に立っている久茨を見上げる。
その顔は、怒りと悲しみを映し出していた。
だが綏が感じ取ったのは怒りだけだ。
綏が暫く蒼白しながら見上げていると、久茨は苛立ったように綏の側に腰を下ろした。
そして綏の顎を掴み上向かせ、膳に盛られている葡萄を綏の口に無理やり捩じ込み、そのまま綏が驚く暇もない素早い動作で、荒々しく唇を被せてきた。
綏は余りの一瞬の出来事に、何が起こったのか把握できず、ただ恐怖し凍りつく。
固まっている綏の唇を久茨の舌が抉じ開け、そして綏の口腔で留まっていた葡萄を咽に押し込んだ。
「ごほっ、ごほっ」
綏は久茨から唇が解放されたと同時、苦しさと、飢えた舌に与えられた甘い感覚で目に涙を溜めて咳き込む。
「――――食べる気になったか」
久茨はへたり込んでいる綏を見下ろしながら冷酷に言った。
綏はこの三ヶ月近く飢えていた舌と胃に、求めていた物が与えられ体を震え上がらす。
久茨はそんな綏を眺め、腕を掴み起き上がらせ膳に向き合わせる。
「吸い物だけでも構わぬ。何か一つ食べろ」
綏は先程の甘い味を思い出し、向き合わされた膳から目が離せなくなった。
そして、深く植えつけられている恐怖心が久茨に逆らう事を否とし、綏は震える手で先程の葡萄を掴み、恐る恐るゆっくりと口に含ませた。
その時、綏の瞳から涙が滲んだ。
飢えていた舌に甘い蜜が広がる感触に。
そのまま綏は、満たされた感触に体を震わせ目に涙を溜める。

久茨はそんな綏を無表情に眺めてから、柔らかく抱き包んだ。
髪を撫でながら、耳に唇を這わしながら、唇を重ねながら、優しく愛撫を施していく。
綏は飢えへの悦びで声を発せず、そのまま黙って久茨の腕の中で体を震わす。
「――食事を摂らぬなら、私はお前に霊術を施す。結局お前は死ねぬ。諦めろ」
久茨の静かな声が綏の耳元で囁く。
綏はその言葉に対する絶望と、背反する飢えの悦びで、僅かな抵抗の意思を砕かれた。
そしてその夜綏は、三ヶ月ぶりに飢えている胃に無理がない程度の極軽い食事を済ませた。

二十八

翌日の午の刻（午後十二時頃）、綏は重い瞼を掠めながら目を覚ました。

昨晩三ヶ月ぶりの食事を済ませた後、汐路に湯浴みを手伝って貰い、いつものように久茨に抱かれた。

綏が意識を取り戻した二ヶ月前から、久茨は再び毎夜のごとく綏の事を抱いてはいるが、以前のように乱暴にではなく、負担をかけないように抱いて、行為も何度も繰り返すことはせず直に解放していた。

しかし昨晩は優しくはあったものの、何度も綏に軽い休憩をとらせてはまた抱くといった風に、止む事無く抱き続け、結局綏が眠りに就けたのは明け方近い深夜だった。

（今、何時だろう…）

目覚めた綏はそんな事どうでもいいと思いつつも、微かに開かれた寝所の襖から漏れる光に目をやり、今がもう朝ではないと判断して脱ぎ捨てられている夜着を纏い、寝所の扉を開いた。

襖を開くと同時に眩しい太陽の光が綏の目を貫く。

綏はその光に目を細めながら部屋の中を見渡した。

するといつもいる筈の三人の女官も汐路も居らず、綏は少し驚き、怪訝な表情をする。

しかし、いつも誰かに見張られている綏はそれが清々しく感じ、嬉しくなった。

そして昨晩の情事で重く疲れている体を弾ませながら、綏は夜着のまま部屋をでて庭に飛び降りる。

自分が消えれば他の人に酷い罰が下る事を、香生の事があった以前から知っていた綏は、もう既に脱走する気など無くなっており、少しの間庭を散策するつもりで庭を駆け出した。

大鳳殿の庭は余り華やかな花々は植えられておらず、松や紅葉、

椎や楠といった落ち着いた雰囲気を漂わせる木々が配置よく植えられている。
そして六月の今はその木々が青々と輝き綏の目を魅了した。
綏はもうこの殿舎に二ヶ月もいるが、ほぼ久茨の部屋に閉じ込められており庭に下りた事もなく、下仕(しもつかえ)の頃にも、この大鳳殿は警備が厳重で、新人の綏は立ち入る事を許されず、この庭を伺うのは本当に初めてだった。
綏は緑の美しい木々の中、飛石を跳ねる足で渡り歩き、所々に置かれてある風情漂う燈籠(とうろう)や蹲踞(つくいぼ)、水琴窟(すいきんくつ)に目を奪われながら大鳳殿が見えなくなるまで遠く離れた庭の奥にまで辿り着いた。
そこにはもう大鳳殿と他の殿舎を隔絶する高く聳え立つ壁があり、それ以上進む事は不可能になっていた。
綏は小さな冒険を終えていまい悲しくなったが、これでも十分楽しめたと諦め引き返そうとした。
その時。
「綏？」
よく聞きなれた少年の声が綏の背後から響いた。
綏は慌ててその声に振り返る。
そして驚いた。
「――吉峰…」
振り返った先には、もう三ヶ月以上も会っていなかった幼馴染の姿があった。
「吉峰…、吉峰なの？」
綏は虚ろな瞳で、幻でもみているかのような声で尋ねる。
吉峰も綏と同じような顔で綏を見つめていた。
「――まさか、本当に会えると思ってなかったぜ…」
吉峰の間の抜けた小さな声が、風で揺れる緑の木々の囁きにかき消される。
「…吉峰、何でこんな所に？」
綏はまだ幻をみているかの心持で尋ねる。

すると吉峰が少し顔を伏せその表情を隠した。
「あの後、心配してたんだ。昭洸殿にはいないっていうし、香生も――」
その言葉で綏は心を締め付けられ、抑えていた涙が再び溢れ出しそうになる。
「香生の事きいて、それで手前も昭洸殿からいなくなったって聞いたから。手前がこの後宮で行きそうな所って他に大鳳殿しか考えられなかったから、謹慎とけてから此処の庭に足伸ばしてたんだ。もしかしたら会えるかもって…」
吉峰は話終わっても顔を俯けたまま、綏を見ようとしない。
綏はそんな吉峰のことは気にせず、離れていた距離を駆け足で走って近づけた。
そして目の前まで来ると、吉峰の着ている黒の絹地を藍絣（あいがすり）で散らした高価な羽織を鷲掴み怒り飛ばした。
「馬鹿！　もし久茨様にこんな所うろついてるの見つかったらどうするのよ！　また謹慎させられるわよ！」
吉峰は呆気に取られた表情で羽織を掴んでいる綏を見下ろしたが、直に綏から視線を放し、顔を背ける。
「綏、あんま近づくな。これ着てろ」
吉峰は顔を逸らしたまま不躾に言い、綏の掴んでいた羽織を脱ぎ綏に手渡した。
そこで綏は、自分が薄い絹の夜着一枚で庭に飛び出した事を思い出だす。
そして、自分の姿を見て羞恥した。
夜着が軽く肌蹴て、久茨の口付けによって付けられた、多数の紅い痣が丸見えになっていたのだ。
綏は羞恥し、肌蹴ている夜着を整えた後、素早く吉峰に渡された羽織を纏う。
そんな綏を他所に吉峰は顔を背けたまま話を続けた。
「消えたって聞いて、ずっと不安だったから。汐路に問い詰めても

何も知らないってそればっかだしよ。でも、元気そうで良かった」
「――――私は、平気…。吉峰は？」
綏は昨夜を思い出し表情を曇らせたが、吉峰は自分が一月余り意識不明だった事を知らないと判断し、その事を言わず、この二ヶ月ずっと気になっていた吉峰の事を尋ねた。
綏は吉峰の事について、ちょうど自分が目を覚ました日に謹慎が解かれたということだけしか知らない。
黙って蹲っていた綏に、汐路がそっと教えてくれたのだ。
「俺は何んも変わりねーよ。謹慎してたお陰で体力が漲（みなぎ）ってるくらいだ」
吉峰はぶっきら棒に言い、そして背けていた顔を綏に戻す。
その顔は、時々みせる綏の嫌いな悲しい表情だった。
「…あ、ああ、そう言えば明日婚儀だってね」
綏はその表情に焦って、考えるより先に言葉を発したが、出てきた言葉に後悔した。
余りその事は話したくなかったのだ。
しかし後悔しながらも取り消す事が出来ず、黙って吉峰の返答を待つ。
「…ああ。今日の夜から清めの儀式が始まる。明日も婚儀やら何やら色々あっから、暫く、…もう此処へは来られねえ」
「…――そう、なんだ」
綏は適当に返事を返したが、その実、胸が引き千切られるような感覚に陥った。
原因は、吉峰はもう此処には二度と来ないだろうと思ったからだ。
吉峰は正妃を愛し、もう二度と自分には会いに来ないだろうと。
吉峰の性格を考えると、綏は手に取るようにそう確信させられた。
もう吉峰に会えない。
その事が綏の胸を裂き、そして、その次の瞬間、涙が溢れ出していた。
「お、おい！　手前（てめえ）何泣いてんだよ！？」

綏は泣いてはいけないと思いつつも、後から後から溢れてくる涙を抑える事ができず、焦っている吉峰を前に手で顔を隠し泣き続ける。
「腹でも痛いてーのかよ？　手前また変な物食ったんじゃねーだろな」
吉峰がまた、と付けたのは、以前私が落ちていた団栗を食べてお腹を壊した事があるからだろう。
「馬鹿、お腹なんか痛くないわよ」
綏は、胸を痛めながらも、今もそんな間抜けな事をしていると思われた事に少し腹を立てて、つっけんどんに言い返す。
「じゃあど――」
「嬉しくって…」
綏は吉峰の心配そうな声を遮った。
「吉峰が…、結婚するのが、嬉しくって」
顔を手で覆ったまま言葉を繋げる。
綏には顔を見せる事が出来なかった。
涙の意味を吉峰に知られたくて。
友達の幸せを喜べない醜い感情を知られたくて。
「――そんな事位で、泣くなよ」
吉峰はそう言って綏の頭に掌を乗せた。
吉峰のこの行動は、綏が泣いたり落ち込んだりした時にいつもしてくれる優しい癖だ。
綏は幼い頃よくしてくれた柔らかい掌の温もりで、少し落ち着きを取り戻す。
そして、吉峰にこれ以上心配をかけまいと、目に力を込めて無理に溢れ出る涙を堪えた。
泣き止んだ綏は、暫く吉峰とその場に置いてあった平面の景石に座り、昔の話に耽った。
話は尽きる事がなかった。
綏が吉峰に止められながらも平気だと言って団栗を食べた事や、

その後泣くほどの腹痛に襲われた事。
吉峰が作法や文学の先生から逃げ、仕事中の綏の宿舎に隠れていた事、その間綏が楽しみにとっておいた煎餅を勝手に食べて、戻ってきた綏と大喧嘩になった事。
途絶える事のない昔話に、思い出し笑ったり、再び当時の怒りが込み上げ口論になったり、二人は時間を忘れて話しに夢中になった。

二十九

「何故目を放した！！」
大鳳殿に久茨の叱責の声が響き渡った。
「も、申し訳御座いませぬ！　綏様がそろそろ目覚められると思い、朝餉の用意を整えに行った隙に……。今迄一度もその様な態度が窺えませんでしたので…、それに綏様はよく眠って居られ少し位なら大丈夫だろうと思い、僅かにお一人にしてしまいました。ど、どうかお許し下さいませ！」
そう言って綏の見張り役の早苗（さなえ）は、全身を震わせながら額を床に擦り付けた。
久茨はそんな早苗を血走った鋭利な目で一瞥する。
久茨は先程まで皇宮にいたが、後宮にいる汐路から綏が居なくなったと連絡を受け、すぐさま大鳳殿の自室に駆けつけていた。
綏が消えた事を確認すると、見張り役である三人の女官を罵倒し、その中でも綏が消えた時に見張りを担当していた早苗に特に怒りをぶつけた。
早苗は未だに久茨の足元で震えている。
久茨はそんな――美しく整えられた早苗の髪を荒々しく鷲掴み、面を上げさせた。
そして、今にも気を失いそうなくらい蒼白している早苗を冷酷に見据える。
「あれが戻って来なければ、命はないと思え」
早苗はその言葉で、既に蒼白していた顔が最早死人と言っていい程にまで顔色を失う。
久茨は死人と化している早苗を黙殺すると、鷲掴んでいる髪を乱暴に振り払った。
「葛木、後宮の全ての門を閉鎖しろ」
久茨は皇宮から供に付いて来ていた葛木に、冷酷な表情を向け静

かに命令した。
「畏まりました」
葛木は綏の事を知らない筈だが、表情を変える事なく返事をし、足早にその場を立ち去る。
「白帝、私共は大鳳殿の敷地内を探しに行って参ります。まだそう遠くへは行っていらっしゃられないかと」
葛木を見送っていた久茨の背後から、終始久茨の激昂を黙って見守っていた汐路が声を掛けてきた。
「ああ」
久茨の返事と共に汐路は震え上がっている三人の女官を一喝し行動を促した後、足早にその場を立ち去った。

三十

「綏様！！　綏様！！」
綏が景石の上で吉峰と昔話に夢中になっていた時、遠くから聞きなれた声が響いてきた。
「手前の事探してるみてえだな」
吉峰がその声に反応して、快活に話していた声の調子を一気に低くして言う。
綏も吉峰の声と同じく気分を沈ませた。
「――ごめん、私、黙って出てきたから」
綏は吉峰の隣で、顔を俯けながら寂しそうに言った。
そして、抑えていた涙が再び溢れそうになる。
（――これが、もう最後）
綏はその事を考えると、「戻る」という言葉が発せなかった。
綏が俯いていると吉峰が綏の頭に掌を乗せた。
「…手前、大丈夫か？」
吉峰の声は酷く辛そうだった。
綏は吉峰の掌の温かさと軽い重みを感じながら、言い知れない胸の締め付けに苛まれた。
「もう、――大丈夫」
綏は感情を殺し、弱々しく答える。
もう吉峰を頼ってはいけない。
吉峰は明日結婚するのだ。
正妃と愛を育み、いずれ子供を授かり、老後は孫に囲まれて幸せになる。
そこに自分は不要なのだ。
不要どころか邪魔にしかならない。
だから消えなければいけない。
吉峰のために。

「――――吉峰、今迄有難う」
綏は沈黙の中、涙を堪えながら別れの言葉を発し、借りていた羽織を脱ぎ吉峰に渡す。
「意味、…分かんねえよ」
吉峰はそれを受け取りながら寂しそうに呟く。
そして動けない綏を横に、吉峰は立ち上がり綏を見下ろした。
綏も見上げる。
吉峰の表情は哀しみに満ちていた。
そして暫く見つめあった後「じゃあな」と、綏は「うん」と、二人はたったそれだけの別れの挨拶を交わし別れた。
昔と同じように。また明日も会うかのように。
綏は大鳳殿の久茨の部屋へ、吉峰は賀陽殿の自室へ向かって歩んでいく。
近くて遠い場所へ。

「綏様！！」
綏が行きとは打って変わって、目に涙を溜めながら力なく飛石を渡り大鳳殿を目指していた時、遠くから小柏が叫声を上げ走って近づいてきた。
綏は息を切らした華やかな出で立ちの女性を見て、目を丸くする。
「…す、綏様、一体今迄どちらに」
小柏は肩で息をしながら、恨めしそうに綏を睨みながら言った。
綏はその表情に怖気づく。
「さ、散歩」
「散歩！？」
綏の小さな返事に小柏は呆れた声で言った後、綏を再び睨む。
「今、大鳳殿に白帝がおいでです。今朝担当だった早苗がどれだけ

叱責を浴びせられたかお分かりですか！」
綏は小柏の言葉に恐怖し、体を震え上がらす。
久茨が大鳳殿にいることに。
私が抜け出した時に担当だったという早苗の身を案じて。
綏は頭が真っ白になり小柏を無視し大鳳殿を目指し一目散に走り出した。

三十一

久茨は自室の前の廊下に佇み、苛立ちながら庭を眺めながめていた。
恐らく綏はまだ後宮を抜け出してはいない。
久茨は早苗の話を推測し、時間的に無理があるだろうと思いそう判断した。
しかし、恐怖は拭えずにいた。
――――吉峰。
その名が久茨を恐怖に陥れた。
吉峰は明日婚儀をあげる。
婚儀の前日に、綏と二人でまたどこかに行くなど、幾ら吉峰でもするまい。
それに今回の結婚は吉峰自身で決断したと聞いている。
その吉峰が今日綏を連れ出すなど在り得ない。
しかし、そう考えても久茨は安堵出来なかった。
久茨が恐怖を感じながら庭を眺めていた時、近づいて来る二つの影が久茨の目に留まった。
「綏っ！！」
久茨は影の一つを綏と確認すると吉峰のことは忘れ、階段を伝い庭に駆け下りる。
綏は息を切らしながら久茨の前まで来ると、恐怖に染まった紫の瞳を久茨に向けた。
「さ、早苗は？　早苗は無事なんですか？」
恐怖を面に表しながら縋るように訴えてきた。
久茨はその表情と言葉で、また女官を失う事を案じているのだと判断した。
「殺してはいない」
その言葉で綏の表情は和らいだ。

久茨は自分に見せる事のないその表情と、戻ってきた事に悦びを感じ、綏の紅潮している頬を触る。
「白帝、綏様は少し散歩をされていたと申されています」
綏と供に戻ってきた小柏が久茨に訴えた。
久茨はその言葉を聞いて、綏にその事を話すように目視して促す。
「…ぁ、散歩に、行ってました。申し訳御座いません」
綏の和らいでいた表情が再び恐怖に染まる。
久茨は綏の頬や唇を指で撫でながら、暫くその表情を眺めた。
「そうか」
久茨は、綏が夜着の姿のままな事などから逃げ出そうとしたのではないと判断した。
そう判断すると、先程感じた激しい怒りも抜けた。
そして、黙って立ち竦んでいる綏を柔らかく抱き包む。
綏は抵抗の色を見せず、久茨の胸の中で大人しくしていた。
久茨はそんな綏を更に抱き包み、綏に焚き込ませている梅花(ばいか)の香(こう)を味わう。
梅花の香は本来春に付けるものだが、久茨はその香を気に入っており、季節に関係なくいつも付けさせていた。
しかし慣れたその香りに少し違和感を覚えた。
梅花と何か微かに別の香りが感じる。
自身の沈香(じんこう)と、綏の梅花、そして微かに漂う香は、恐らく、伽羅(きゃら)。甘さを抑え、何かと調合されているような、控えめだか高級感漂う香り。
「―――誰かと、いたのか」
久茨が静かに問いただすと、大人しく腕の中に納まっていた綏の体が微かに震えた。
「誰といた」
綏の微かな震えに久茨は誰かといたのだと確信し、命令口調で言葉を促す。
しかし綏の返事はない。

「もう一度だけ言う。誰といた」
「……だ、誰ともいません」
綏のその言葉で治まっていた怒りが再び湧き起こり、久茨は抱き込んでいた綏の体を離し夜着の胸元を鷲掴みにした。
そして綏の足爪先が地面に付くか付かないか位まで持ち上げる。
綏はその行動で蒼白になり、再び震え出す。
そして見たこともない綏に対する白帝の態度に、控えていた三人の女官も脅えを隠し切れず…。
「答えろ」
久茨は綏を睨み、少しずつ体を持ち上げる。
綏が他の香を漂わせる理由など、他に誰かと会っていた以外には考えられなかった。
今朝綏は梅花の香と、自分の移り香である沈香の香りしかしていなかった。
その後目覚めた時に部屋を抜け出したなら、他に誰かと会わない限り香りを移される筈がないのだ。
小柏からかとも考えたが、此処に戻ってくるとき二人は距離をあけ、そして慌てたように走っていた。
香りが移される筈はないし、第一小柏のような華美な者が付けるような香りではない。
「誰といた」
久茨は持ち上げられ息苦しがっている綏に再び冷酷に言う。
「…だ、誰とも、居ません」
久茨はその言葉に怒り自由な腕を振り上げた。
そして激しく振り下ろそうとした時、その動きを止めた。
振り下ろそうとした腕を静かに元の位置に戻す。
「――――そうか」
久茨は苦渋の声を絞り出し言った。
久茨は綏の身構えた表情を見て、殴ることが躊躇われた。
否、殴れなかった。

以前何の躊躇いもなく殴っていたが、何故か今はそれ出来なかった。
久茨は綏の胸倉から手を放し地面に降ろす。
「小柏、葛木大将（かづらぎぬいしょう）に後宮の全門開門の命と、後の仕事は任すと伝えろ。それと、許可するまで部屋に誰も近づけるな」
小柏は幾ばくか驚き、そして綏を見つめた。
大丈夫なのだろうか？
と、その目は語っていた。
しかし白帝である久茨に逆らうことなど出来よう筈もなく――――。
「…か、畏まりました」
久茨は小柏が去るのを横目で一瞥した後、殴られなかった事で唖然としている綏の腕を捕り、そのまま部屋に引きずった。
「ひ、久茨様？」
綏は困惑と恐怖を混ぜた顔で久茨を見上げる。
久茨はそれを黙殺し、綏の腕を掴んだまま部屋の寝所まで引きずり、そして寝台の上に放り投げた。
綏は何かを察知したの、かがくがくと震え青ざめた顔で久茨を見上げる。
「な、何を」
久茨は怯える綏を冷酷に見据える。
「昼間からは初めてだったな」
久茨の言葉で綏は腰を付きながらじりじりと寝台の奥へ逃げだす。
久茨はこの時、怒りもあったがそれ以上に底知れない憎悪に近い感情に囚われていた。
自分以外の移り香を付けている綏が忌々しかった。
今までも女官の香を微かに漂わせていた事はあったが、その時は何も感ず、不快感にも陥らなかった。
だが今回の伽羅の香には、底知れない不快な感情が込み上がってくる。
久茨にも理由は知れない。

自身の嫌う香りではないのに、何故か綏から取り除きたくて堪らなかった。
久茨は寝台の奥に逃げている綏を捕らえ、押し倒し夜着の帯を解く。
夜着を全て脱がすと、綏は押し倒された状態で震えながら凍てついた。
久茨はそんな綏を眺めたあと、自身の羽織や袴も脱ぎ捨て、裸体になった体を強く密着させる。
伽羅の香りを取り除く為に、自分だけの香りを漂わせる為に。
そして首筋に吸い付き、紅い痣を刻み付けた。
その痣を静かに見下ろした後、唇を鎖骨や胸に移動させ、既に体中に散っている紅い花弁を濃くし、更に増やしていく。
自分だけのものだと宣言するように。
舌で綏の口腔を愛撫し、胸の突起や脇腹さまざまな所にも愛撫を施していく。
そして、次第に潤ってきた秘所に指を這わせてから、中指をゆっくりと道に挿入させた。
綏の体が強張る。
久茨は綏の怯えた表情を眺めながら、道に指の付け根まで埋めると出し入れを始め、親指で芯を刺激する。
始めはゆっくりと、そして次第に速く動かし二箇所を刺激していく。
綏の体は次第に震え出し、久茨の指を咥えたまま収縮を始めだす。
久茨は収縮が収まるのを待ってから、潤いの増した道にもう一本指を増やし再び出し入れする。
その時大人しくしていた綏が突然体を悶えさせ、腰を動かし指から逃げようとした。
久茨はその動きを固定し、あやすように再び胸の突起を咥え愛撫する。
綏は久茨の腕を掴み離すように訴えてきたが、久茨は指の動きを

止めず更に刺激を強くし、無理やり二度目の収縮を迎えさす。
綏の咽から小さな嬌声が漏れ、体を震わた後ぐったりした。
久茨は綏の胸の突起から口を離すと、体内の道から指を抜き出した。
伏せられている綏の瞼を黙視してから、唇を塞ぎ、口腔に舌を侵入させ動かない舌を弄んでから、舌を咽の奥深くまで埋め空気の道を遮る。
暫くもしない内に、綏はぐったりしていた体を動かし、体を離そうと暴れ出した。
久茨はその動きを認めてから、咽から舌を引き抜き唇も解放した。
「ごほっ、げほっ…」
久茨はむせ込む綏を眺めて意識が覚醒した事を確認すると、髪を撫で苦しんでいる綏をあやす。
そして綏の息が整った頃に髪から手を離し、軽く腰を持ち上げ足を開かせた。
綏は怯えた表情で久茨を見据える。
久茨はその表情を黙殺して、潤っている道に自身を挿入させた。
綏の表情は歪み目に涙を浮かべる。
久茨は全て納めた後、唇や首筋に口付けを落とし、自身を刻み付けるように道の最奥まで突き立てた。
「あああァ――――っ！！」
綏が腕を掴み苦痛を訴えてきたが、久茨は深い動きを止めなかった。
深く刺激すると綏が痛がる事を知っているので、最近の久茨は綏を抱く時それ程深くまで突き立てていない。
しかし今は何故か自分を最奥まで刻み付けたくて堪らなかった。
健気に手足をバタつかせ、泣きじゃくる綏をあやしながら久茨は延々と突き立てる。
緩めることなく最奥まで蹂躙していると、綏の道が再び激しい収縮を繰り返した。

久茨はそんな綏を褒めるように額に口付けを落とす。
綏は痛がっても快楽の絶頂を迎える。
以前乱暴に抱いていた時からそうだった。
そして二、三度絶頂を迎えると、道が痙攣しだし治まらなくなる。
痙攣したまま再び絶頂を迎え収縮を起こす綏の道は、久茨を魅せてやまない。
久茨は既に痙攣を始めている綏の道を更に速く出し入れる。
「うっ…」
その動きで綏は更に苦痛を訴えた。
既に綏の体は道だけでなく爪先から手先まで痙攣し、何度も弾けるように飛び上がっている。
それを黙殺して続けていると再び久茨を締め付けてきた。
そしてその収縮を最後に綏の意識が放れた。
久茨はそんな綏を黙視しながら最後に向けて躍動した。
その刺激で綏の意識が微かに覚醒したが、すぐにまた失神し頼りなげに久茨が突き上げる度に揺れている。
そんな綏を抱き押さえて行為を続け、そして自身も絶頂を迎えた。

翌日の卯の刻（午前六時頃）
「白帝、畏れながらもう皇太子の婚儀の時刻が近づいております故、そろそろ御支度の用意を」
久茨が綏を抱いていた時、寝所の外から汐路の畏まった声が響いた。
「――――ああ、直に行く。下がれ」
久茨は忌々しく言い、黒檀の扉の側から汐路の気配が消えた事を確認すると、組み敷いている綏を見下ろした。
瞳は微かに開いているが焦点が定まっておらず、体も微動すらしない。

昨日綏が意識を失った後また直に起こし、そのままもう何度も抱き続けている。
深く刺激しながら抱いているため、綏は痛みで何度も意識を失い、その都度軽い休憩を取らせてはいたが。
（もう限界か）
久茨は無表情に眺めてから、綏の額に口付けを落とし、秘所に埋めていた自身の塊を最後に向けて深く攻め立てた。
綏は突き上げる度に壊れた人形のようにずり上がり、声も出さず、表情も変えない。
（意識がないのか）
久茨は綏を貫きながら、適当にそう判断した。
綏が痛みを訴えないからだ。
古傷まで挿し込むと、綏は必ず泣き暴れる。しかしそれがない。
加えて、昨日から抱き続けた所為で、綏の膣は裂傷し、血を出している。
古傷と裂傷。そこを侵され、痛みを感じない訳がない。
瞼が微かに開いていたので、起きていると思っていたが、どうやら違うようだ。
人形を抱いているようで味気なく思ったが、時間もないので起こす事はせず、そのまま行為を続ける。
そして血を流し、既に何度も白濁の体液を流し込んでどろどろになっている道に、再び体液を流し込んだ。
絶頂を迎えた後、結合したままもう動かない綏の体を抱き包でその唇を塞いぎ、舌で小さな口腔を堪能しながら、鼻腔でその体に伽羅の香がない事を確認すると、体を解放した。

三十二

「……ぅ、母さん、ひっくぅ」
小さい子が、泣いている。
「ぅ…ひっく、母さん」
（ああ、私だ。まだ後宮にきたばかりの時の）
あの日は確か二月の満月の夜だった。
「……ぅぅ」
綏は賀陽殿の庭先で泣いていた。
宿舎は他の女官が大勢居て、そしてそれぞれ与えられている局（つぼね）の壁が薄いため、綏はいつもこうして外で泣いていた。
昼間は忙しくて泣く暇などないが、夜になるとどうしても母の死の――鮮血の光景が頭から離れず、恐怖と哀しみで毎夜泣いていた。
そして孤独だった。
居場所のない暮らしが。
久茨はいつまで居てもいいと言ってくれたが、やはり本心は自分のような卑しい身分の者が後宮の敷地内に居る事をよく思ってはないだろうと思った。
そう思うと居た堪れなくて、でもそれに甘えるしか生きていく方法が無くて。
いつどうなるか分からない生活が怖かった。
頼れる人が欲しかった。
そして母に戻ってきて欲しかった。
あの日もいつものように適当な場所を探して、ふらふら辿り着いた賀陽殿の庭の木の陰に隠れて泣いていた。
「……母さん…ぅ」
いつものように嗚咽を殺しながら涙をながす。
その時。

「手前(てめえ)何泣いてんだ？」
その時、泣いていた綏の側に十二歳位の少年が立っていた。
久茨に負けない位端整な顔で、肩まで伸びた薄茶の髪を夜風で揺らしながら呆然と綏を見下ろしている。
「何泣いてんだ？」
少年は綏を見下ろしたまま同じ言葉を繰り返す。
「泣いてない。あんた誰よ」
綏は知らない少年に同情されるのが厭で素っ気無く答えた。
「俺？吉峰。手前は？」
少年は綏の態度など気に留めず明るいままだ。
「…綏」
「ふうん。それで綏、何泣いてんだ？」
少年は行き成り呼び捨てで呼んできて、再び同じ事を繰り返す。
綏は呼び捨てにされた事に少し怪訝な面持ちで少年を見た。
少年は本当に整った顔をしていた。
しかし久茨のように人を惑わような艶かしさはなく、どこか親近感の湧く素朴な感じだった。
「何じろじろ見てんだよ」
綏が少年の事を観察していると、不機嫌そうに眉間に皺を寄せた。
そして何の断りもなく綏と肩が触れるくらいの位置に腰を下ろす。
「ちょっと！　あんまり近くに座んないでよ」
綏は少年の行動に驚き、また不快に思い罵声を浴びせる。
「この松の木の下は俺の特等席だって決まってんだ。手前こそ勝手に座んな」
少年も綏に同じように罵声を返してきた。
綏は少年に罵声を浴びせられた事により少し怯え、肩を竦めながらも少年に負けるのは悔しく思い怯えを隠す。
「そんなの誰が決めたのよ」
「俺だ。文句あんのか」
綏は呆れ顔で吉峰を見る。

何で横暴な奴だろう。
ちょっと顔がいいからって偉そうな奴だ。
綏はそんな事を思い蔑んだように少年を横目で眺める。
「あんた、何でこんな時間にこんな所に居るのよ」
綏は少年に不快を感じながらも、疑問に思っていた事を話し掛ける。
自分もそうなのだが、こんな時間に子供一人で庭の奥にいるなんて不自然だった。
「あ？　俺？　何か夜になったら此処に来たくなるんだ。誰も居なくて静かで気に入ってるから。手前　こを何で此処に居んだよ。で、何で泣いてた？」
少年は明るい口調でぶっきら棒に言い、再び同じ問いを繰り返す。
その口調は気になってしょうがない、といった感じだ。
綏はそっぽを向く。
「――ちょっと、死んだ母さん思い出してたの」
綏が適当にそう言うと、偉そうだった少年が急に驚いた顔をして綏の横顔を眺めた。
「な、何？」
「――否、驚いて。俺もよく此処で死んだ母上の事考えてるから」
少年は目を見開きながら、間の抜けた声で言った。
「俺も？」
「ああ」
そのまま少年は母親の事を話しだした。
元々体の弱かった母親が自分を産んで体を壊し、その為山荘でずっと療養していた事。
そして何度も危篤に陥りながらも、ずっと生きていてくれた事。
しかし四ヶ月前、とうとう亡くなってしまった事。
その為、母親と山荘で暮らしていた自分が、無理矢理後宮に連れらて来られた事。
長く山荘で暮らしていた為、後宮の堅苦しい生活に馴染めず、い

つもこの松の木の下で気楽だった山荘の暮らしを考えている事。
「まあ、母親亡くして悲しいのは分かるけどよ、泣いても一日笑っても一日っていうだろ？　だからあ　んま泣くなよ。手前の母親だってそんな姿より笑っていて貰いたい筈だ」
少年はそう言って綏の頭に掌を乗せた。
慰めてくれているのだろう。
そう思うと綏は、母が亡くなってから感じた事のない温かい気持ちになった。
「あんた思ってたよりいい奴だね」
綏の口から自然に言葉が漏れた。
「どんな風に思ってたんだよ。それと、あんたじゃなくて吉峰だ」
綏がしみじみ言うと、少年は怒った口調で言い返してきた。
「有難う吉峰。慰めてくれて」
さっきの言葉は褒めたつもりだったのだが、少年に伝わらなかったようなので、感謝の気持ちを込めた柔らかい口調で言い直した。
「な、慰めたつもりなんかねーよ」
綏が感謝を述べると、少年は照れたように髪を掻きながらぶっきら棒に言った。
綏はその不器用な姿がおかしくなって笑ってしまった。
「な、何笑ってんだよ！」
「何よ！さっきは笑っていろって言ったくせに」
「手前！」
少年は怒ったように綏の髪をぐちゃぐちゃに掻き回す。
「ちょっと何す――」
綏が少年を怒ろうとした時、遠くから甲高い女性の叫び声が響き、綏の言葉を遮った。
「……様！！　――――吉峰様！！　吉峰様！！」
（吉峰…様？）
綏は少年が様付けされている事に驚いた。
綏は勝手に、この乱暴な言葉遣いの少年を、身分の低い下仕(しもつかえ)か何

かの子供だろうと格付けしていたのだ。
しかしよく考えると、少年の体から唯ならぬ霊力が放たれている。
下仕の子供にしては妙だ。
そう思って吉峰を見ると、暗くてよく分からないが、着ている着物が月明かりに照らされて光沢を放ち上質の絹だと伺わされる。
（何者？）
綏は目を丸めながら少年を観察する。
少年は気落ちしたように溜息を吐きながら再び髪を掻いていた。
「もう部屋抜け出したのばれたか…。悪いな。俺もう戻るわ」
少年はそう言って立ち上がり、目を見丸めている綏を見下ろした
「手前明日も此処に来い。今日から俺の子分にしてやる」
「は？」
綏は素っ頓狂な声を上げた。
何を言っているんだこいつは。
綏は訳の分からない事を言い出した吉峰に、何の返事も出来ずただ唖然と見上げる。
そんな綏を少年は、不満そうに見下ろし頬を膨らませた。
「何だよ、面白くねーな。んじゃ友達で譲歩してやる」
少年はこれなら文句無いだろうと言うように腕組をする。
綏はその言葉で、どうやら遊び仲間に誘ってくれているのだとやっと分かった。
とことん偉そうな言い方をする奴だと思ったが、不思議と腹が立たず、逆に友達のいない自分にとっては在り難い申し出だと思った。
「友達にならなってあげる」
綏は照れているのを隠しながら、顔を背けて素っ気無く言った。
その時、再び女性の叫び声が賀陽殿の庭に響き渡った。
「――――吉峰様ーっ！！　吉峰様――っ！！　お返事をして下さいましーっ！！」
女性の叫び声を聞いて、綏は再び怪訝そうに少年を眺めた。
「――吉峰って何者なの？」

綏は眉を潜めながら訝しそうに尋ねた。
少年はそんな綏を不思議そうに眺めて首を傾げた。
「あれ？　知らなかったんだ。俺一応この殿舎に住んでる第二皇子」
「皇子！！」
綏は吉峰の平然とした声とは間逆の、驚愕した声で叫んだ。
そして目を白黒させる。
「何だ？　間抜けな面しやがって。俺の顔に何か付いてるか？」
「だ、だって皇子って…吉峰が、皇子！？」
綏は素っ頓狂な声で途切れ途切れに尋ねる。
「だからそうだって言ってんだろ。変な声だすな気持ち悪い」
皇子に気持ち悪いと言われると、自然に自分は気持ち悪いのだと納得してしまう。
綏はそんな事を考えながら、虚ろな意識でそれ以上言葉を発せず、ただ間抜けた顔で少年――吉峰を見上げる事しか出来ない。
そんな綏に再び女性の叫び声が襲う。
「若―っ！！　どちらにおいでですか！？」
先程とは違う女性の声だ。
綏は虚ろな意識で考えていると、吉峰はその声の方角に顔を向け不貞腐れたように頬を膨らませた。
「八十波（やそなみ）の声だ。綏悪い、俺もう戻るわ。あいつ心配性なんだよ」
吉峰は拗ねた声でそう言うと、その場を駆け出そうとした。
しかし直に足を止めて、未だに夢現状態の綏を振り返り、満面の笑みを零した。
「綏！　明日もここに来いよ！！　じゃあな！！」
吉峰は叫ぶと、松の木の下座り込んでいる綏を残し賀陽殿に戻っていった。
それが二人の出会いだった。

その日から二人は毎日一緒に居るようになった。

始めは夜の松の木で、その次は賀陽殿の庭先で、その又次は後宮全体の殿舎を駆け回り遊び回った。
吉峰は変な奴だった。
皇子の身分にありながら、まるで田舎の少年のような振る舞いをして、どんなに身分の低い人でも対等に接していた。
その為綏も身分の事などすっかり忘れ、気遣う事なく気楽に接する事が出来た。
吉峰といると楽しかった。
毎日同僚女官に嫌がらせされていても、吉峰といるとその事もすっかり忘れて、無心で遊びを楽しめた。
毎日仕事が終わるのが待ち遠しいくて堪らなかった。
いつも一緒で、どんな時も一緒で、気がつけば隣に居るのが当たり前になっていた。
そして二年程過ぎた時、吉峰は私を正妃にしてやると言った。
嬉しかった。
ただ単純に吉峰にそう言われた事が。
でも恥ずかしくて、くすぐったくて、素直になれず私は茶化し続けた。
吉峰はそんな私に何度も正妃にしてやると言い続けてくれた。
私はそんな吉峰の言葉が酷く恥ずかしくて、でもすごく嬉しくて、ずっと言い続けて欲しいと思っていた。
私が茶化してもその言葉を止めないで欲しいと。
そして。

「――――今度、正妃娶るんだ」

そこで綏の夢は途切れた。
涙に濡れた瞼を開く。
幾筋もの涙の軌跡を残し綏は覚醒した。
夢？

綏は涙で霞んだ視界で辺りを見回す。
霞んだ視界に映ったのは、扉から漏れる微かな日の光と、豪華な文様が施されている見慣れた寝台の天井だった。
夢か……。
ううん、夢じゃない。
吉峰は今日、皇族の姫君を正妃に迎える。
身分が高くて、皆に祝福される姫君を正妃に迎える。
吉峰は幸せを掴むんだ。
それなのに喜べない。
分からない感情がどろどろ胸を締め付ける。
綏はその姫君に嫉妬して事に気づいた。
自分では吉峰に与えて上げられない幸せを、その姫君が与えて上げられる事に。
自分が持っていないものを全て持っていて、そして欲しかったものを手に入れられる姫君を羨んでいる、と。
醜い。
自分にはそんな事思う資格などないのに。
自分のような者が、そんな感情を持つ事自体許されない事なのに。
でも思わずにはいられなかった。
(私…、吉峰の正妃になりたかったんだ)
綏は動かない体を震わせ嗚咽を堪えて泣き続けた。
体が痛い。
心が痛い。
綏はもうこれ以上ない程傷ついていた。

三十三

「あ、お目覚めになられたのですね」
綏が一時間程泣き続けていると、澄んだ薄紅色の打掛を纏った早苗が寝所に入ってきた。
綏は霞んだ瞳でその姿を捉える。
早苗は微笑みながら綏に近づいてきて、長い髪を乱し、至る所に紅い花の痣を散らした裸体を仰向けて寝ている顔の横に、真新しい白絹の夜着を置いた。
「如何致しましょう？　先に御湯浴みされますか？」
早苗はご機嫌そうに話し掛ける。
綏は微動もせず黙って瞳だけで早苗を見据え、虚ろな意識で今は一体何時なのだろうかと考えた。
昨日の昼から久茨に抱かれ、夕刻に軽く湯浴みをさせて貰った以外、終始止む無く抱かれ続けた。
意識は殆どなく何度抱かれたのか知らない。
久茨がいつ居なくなったのかも綏には分からなかった。
「もう一眠りされますか？」
綏が黙っていると早苗が朗らかに話し掛けてきた。
「――今、何時…なの」
綏が掠れる声で尋ねると早苗は驚いた表情をした。
今迄しゃべらなかった綏が突然声を出したのが、よほど衝撃的だったようだ。
早苗は目を丸くした後、綏に向かって微笑んだ。
「申の刻（午後四時頃）を少し過ぎた頃ですよ」
「――……そぅ」
もう吉峰の婚儀は一通り済んだ頃だろう。
綏は虚ろな意識で考えた。
「綏様如何致しましょう？　やはりもう一眠りされますか？」

「――ううん、もう…、いい。それより、昨日、御免なさい」
綏は頭から吉峰の事を放り出したくて、目の前にいる早苗の事を考えた。
昨日の小柏の形相からして、よほど辛い目にあったのだろうと気になっていたのだ。
「いいえ綏様。綏様が戻ってきて下さったので何のお咎めも御座いませんでした。それに私の事を心配して一目散に殿舎に駆けつけてくれたとか。小柏さんから伺いました。今迄嫌われていると思っていたので私嬉(わたくし)しゅう御座いましたわ」
早苗は優しく微笑で綏を見下ろした。
「――――ありがとう」
綏は目を細めながら感謝の眼差しを向け言った。
早苗は三人の女官の中で一番綏と歳が近い十六歳で、性格は気弱そうだが、その分優しさが滲み出していて綏は好感を持っていた。
「礼を言わなければならないのは、私の方で御座いますよ。御湯浴みの用意を整えて来ますね。寝所の　外に小柏(こはく)さんと蛍衣(ほたるい)さんがいらっしゃいます。何か御用があればどうぞ」
早苗はあくまで朗らかな言ってから、綏を残し去って行った。
今迄無視をしていて、昨日勝手に抜け出した自分に、こうまで親切にしてくれる早苗の姿に綏は心が痛んだ。
綏は早苗が去った後、次第に意識がはっきりとし出し、痛む体を起こして新しい夜着に着替えた。
そして下半身に力が入らない為、足を震わせながら寝所を出た。
「あら、もう起き上がって大丈夫ですの？」
寝所を出た綏に突然小柏の大きな声が襲った。
綏は突然襲い掛かってきた大きな声に体をビクつかせながら、小柏とその横に座っている蛍衣を見据える。
二人は空になった長皿を前に、手にお茶を持っていた。
どうやらおやつを食べていたらしい。
「あ、綏様も何か召し上がりますか？」

綏が空になった長皿を見ていると、蛍衣もそこに目を向け話し掛けてきた。
「……うん」
綏がそう言うと蛍衣と小柏は少し驚いた表情をした。
「…あ、汐路様から御食事を摂られるようになったと伺っていたのですが、本当だったのですね…」
蛍衣が呆けた声で言った。
そしてその後すぐ蛍衣は、綏の食事を用意しに膳司(かしわでのつかさ)に向かって行った。
綏は蛍衣が戻って来るまで小柏と二人っきりになり、その間少し話をした。
「早苗お咎めなかったのです。本当によかった。綏様が白帝に懇願して下さいましたの？」
「――ううん。汐路様じゃないかな」
「あら、そうですか。まあどっちにしても良かったですわ」
小柏は結果がよければそれでいいと、あっさりした口調で言いながら、部屋に持ち込んでいた棗(なつめ)の丸い茶箱から湯飲み茶碗をだし、その中にお茶を注いで綏に渡した。
「もう冷めていると思いますが、この煎茶こくがあって美味しゅう御座いますよ。どうぞ」
綏は茶碗に入った濁った緑の液体を眺めながら、小柏に言われた通りに飲む。
「美味しゅう御座いましょう？」
「……うん」
綏が小さく頷くと小柏は嬉しそうに微笑んだ。
「――――小柏…、もう皇太子の婚儀は、終わった？」
綏はお茶を飲みながら出来るだけ平静を装って尋ねた。
聞きたくない話の筈なのに、何故か聞かずにはいられなかった。
「この時間ですからね。もう全ての儀が済んでいると思いますよ。後は夜に開かれる皇宮(さん)餐宴(えん)くらいでしょう」

「…そっか」
終わったんだ。
綏は落ち込んだと同時に、諦めのようなものが感じられ、少しだけ胸の締め付けが取れた。
「本日は天候にも恵まれましたので、婚儀も滞りなく行われたことでしょう。あ、そうだ！　明日は皇太子妃が、各殿舎に挨拶回りされるのですよ。大鳳殿には白帝が戻られてからいらっしゃるそうですが。どんな方か楽しみですわね」
小柏はうきうきしながら言った。
だが綏は、自分には関係のない事だという風に顔を俯かせる。
「美人かしらね？　あの美形な皇太子の妃ならそれ相応の容姿だと思いますが。不細工だったら後宮の　女達は皆許さないでしょうね。綏様は美人だと思います？」
「綺麗な方じゃないかな」
綏は適当に答えた。
綏にはそんな事興味がなかった。
自分には関係のない事だし、吉峰は人を容姿で判断しないから、美人でも何でも妃を慈しむだろう。
「綏様もそう思います？　実は蛍衣と早苗とで賭けているのですよ。二人は不細工って言い張っているのですけどね、私は皇太子の容姿を考えると、やはり側近もそれ相応の女君を用意するだろうと思いまして」
「そうだね」
「そうでしょう？　それなのに二人ったら！　でも綏様のお陰で二対二になりましたわ。勝ったら二人に何か奢らせましょうね」
一言二言しか返さない綏に小柏は延々と話し続ける
どうやら小柏は、一度しゃべりだすと止まらない性格らしい。
綏は小柏の女独特の話に時折相槌を返しながら、その場をやりきった。
その後小柏の独走状態で話し込んでいると、膳司に行っていた蛍

衣が戻ってきて、それと同時に湯浴みの用意をしに行っていた早苗も戻ってきた。
三人は食事が冷めてしまうので先に食べた方がいいと言ったが、綏は秘所から太腿にかけて固まっている体液を先に洗い流したかったので断った。
しかしその事を言うのが羞恥され、黙って三人に従う事にした。
「膳司の者が、長く食事を摂っていなかった者に、急に色々食べさせるのは腹に良くないと言いわれまして。このような物で申し訳御座いません」
蛍衣はそう言って、膳の上に乗ってある漆の大椀の蓋を開け綏に中を見せた。
そこには湯気が立っている白いお粥があった。
「薬膳を入れておりますので、これで胃の調子も戻ると申しておりました」
綏は元々食に拘るほうではなく、お腹が空いている今、何でも食べられるのなら嬉しかった。
三ヶ月ぶりに葡萄と鮎茶漬けを二、三口食べて以来、久茨に食事を摂らせて貰えず、抱かれている最中に回復術は受けてはいたが、あれは身体機能や体力を維持するだけなので、胃は飢えていた。
「有難う、蛍衣」
「いいえ。冷めない内にお上がり下さいまし」
綏は小さく頷いて、椀を持ってお粥を口に運ぼうとした。
しかしそのとき時、三人が綏の動きを凝視した。
「……な、何？」
綏は三人の視線が気になって手の動きを止めた。
「…あ、食事をしている姿を見るの、初めてだから。ねえ？」
蛍衣はそう言って小柏に顔を向け、話を振る。
「え？　あ、そうそう。何か物珍しくって。早苗もそう思うでしょう？」
「は、はい。何か感激です私」

綏は三人の表情を見て、よほど自分は変な奴だと思われていたのだと悟った。
まあ話さず食事も摂らず、いつも部屋の隅に蹲っていれば仕方の無い話だが。
「…あ、余り見ていられると、食べ辛い…」
「あ、そうですよね。ほほほ、ほら、小柏も早苗もあっち向きなさいよ」
綏が気まずそうに言うと、蛍衣が他の二人に向かって別の方向を向くように手招きした。
蛍衣は小柏の一つ年上の二十四歳で、二人のお姉さん的存在だ。
しっかり者の蛍衣にあっさり者の小柏、そして気弱な早苗。
三人姉妹のようだと綏は思った。
その後綏は、三人の食べている音を伺うような気配を感じながらもお粥を食べた。
元々食が細く、今迄ろくに食べていなかった所為で、綏の胃は小さくなっており、少し食べると満腹になってしまい半分残してしまった。
それでも三人は半分食べた事に驚いていた。
その後三人に湯浴みを手伝って貰い、もう夕刻になっていたので着物には着替えず、夜着に着替えてから、綏は三人と初めて、ほんの少しだが、会話という会話をして過ごした。

三十四

吉峰の結婚の儀は、皇宮の一殿、寿弘院（じゅこういん）で行われていた。
寿弘院は儀式や祭典、宴などの為に設置されている殿舎で、代々皇族は此処で婚儀を行う慣例になっていた。
「私はもう戻る」
「は、白帝！　まだ餐宴（さんえん）の儀が残っております故、もう暫く御留まり下さいまし！」
太子官大夫（たいしかんたいふ）、雲州入万（うんしゅうにるま）が頭を下げながら、一段高い畳の上に座っている久茨に懇願した。
太子官とは皇太子の補佐をする組織で、代々その皇太子の血縁者などがその官職に任命される事が多い。
現太子官の長にあたる雲州大夫も、吉峰の母方の遠い親戚かなにかで、年齢五十ほどだが、まだまだ男盛りといった風貌の男だった。
「餐宴では私の為すべき事はない。私の役割はもう果たした筈だ」
久茨は冷や汗を掻いている雲州大夫を、冷めた目で見据えて言った。
久茨はこの婚儀に出席する事自体、疎ましかった。
しかし父先帝が亡くなった今、現白帝の久茨が父に代わり、儀式を執行しなければならなかったので、已むなく出席していたのだ。
「ですが！　餐宴の儀は、各皇族や大貴族が大勢出席する重要なもので御座います。そこに白帝がいらっしゃられないとなると、宴の格が劣ってしまいます故、どうか、どうか皇太子の御為に！」
雲州大夫はそう言って、半泣きになりながら額を畳に擦り付けた。
「私を苛立たせるな。もう戻る」
「――――っ」
久茨が絶対な命令口調で言うと、雲州大夫は跪いたまま声を殺して泣き出した。
（不様な）

久茨は雲州大夫の姿を煩わしく思い、その場を即刻立ち去るように命じようとした。
その時。
「大夫、白帝の御気を煩わすな。私は何も気にしない」
若々しく低い声が久茨の言葉を遮った。
「皇太子！！」
雲州大夫の叫びと共に現れたのは、久茨の黒紋服とは対照的な白紋服を着た吉峰の姿だった。
雲州大夫は突然の吉峰の登場に驚き、涙に濡れた顔で吉峰を眺めている。
久茨は何の断りもない入室と、その存在に嫌悪して、吉峰を睨みながら霊圧を放した。
吉峰は少し身動ぎを見せたが、直に平常に戻り、自分を睨んでいる久茨を同じく睨み返してきた。
久茨と吉峰が睨み合っていると、雲州大夫が小さな苦痛の悲鳴を漏らした。
その悲鳴で久茨は一瞬吉峰から視線を逸らし、雲州大夫を黙視する。
雲州大夫は震えながら畳に倒れていた。
(私の霊気にやられたのか。見苦しい)
久茨は憎悪に満ちた表情で雲州大夫を見据える。
すると吉峰が雲州大夫の側に歩み寄った。
そして霊術で雲州大夫の回りに盾の結界を張る。
「大夫。もう下がれ」
吉峰は雲州大夫に静かに命じた。
雲州大夫は結界を張られた事により、久茨の霊気から護られて、倒れていた体を起こす。
そして自分ではこの場にいる事が不可能と悟ったのか、直に久茨と吉峰に軽く頭を下げて、退室していった。
雲州大夫が消え、久茨と吉峰は再び睨み合う。

「先遣(せんけん)もなく来るとは随分不躾だな」
沈黙を破ったのは久茨だった。
「謁見の許しが出ない事は既に心得ておりますので。こうして伺うより他致し方なく」
吉峰はそう言って跪いた。
久茨は脇息に持たれながら吉峰を冷酷に見下げる。
「何用だ」
「――――紫の事で、少し」
綏のことか。
紫と言われて思いつくのは、綏の紫の瞳以外考えられなかった。
久茨は予想通りの吉峰の言葉に嫌悪した。
そして吉峰から見えない几帳の裏などの位置に控えている、葛木大将や数人の側近に退室するよう目配する。
吉峰の為に人払いなど忌々しかったが、綏の話を聞かせる訳にはいかなかった。
久茨の側近、と言うよりも代々白帝に仕える側近は、霊力に優れている有能公達が選出される為、雲州大夫のように久茨の放っている霊気の圧される事なく、足早に吉峰の横を通り過ぎて退室して行った。
「綏が何だ」
葛木達が去って、完全に二人っきりになった後、久茨は殺意の篭った声で吉峰を促す。
吉峰は久茨を睨み、口を引き攣らせた。
「俺はあんたが嫌いです。昔から。今は殺してやりたいくらいに」
吉峰は怒りを押し殺した声で久茨を罵倒する。
「随分(ふそん)不遜な言動だな。いくら皇太子の身分でも処罰は免れぬぞ」
「あんたは何でも出来るからな」
「ああ。貴様など、その気になればいつでも潰せる。今は泳がせてやっていただけだ。だが、これ以上不　遜な態度を見せるなら容赦せぬ。弁(わきま)えろ」

吉峰は目に殺意を込めたまま唇を噛み締め、膝に置いている掌で握り拳を作った。
「罰したければ好きにすればいい。俺は、どうなってもいい。だが、一つだけ頼みがある」
吉峰は睨んでいた目を自身の握り拳に向けた。
「――――綏を、大事にしてやってくれ」
吉峰は悔しさを含んだ篭った声で呟いた。
「私の物を私がどう扱おうと、貴様の知ったところではない。弁えろと警告した筈だ」
久茨は吉峰の口から綏の名が出た事に殺意が沸き起こり、視覚化出来るほどの霊気を飛ばした。
その為、周り置いてある几帳や屏風がガタガタと音を立てて震え出す。
だが吉峰は微動せず、自身の拳に目を向けたままだった。
久茨はそれに苛立ちを増し、更に強い霊圧を与えようとした。
「――俺だってそれなりの霊力を持っている。あんたには遠く及ばなくても、霊気を飛ばされたくらいなら耐えられるさ」
吉峰は久茨の視覚化された霊気で白紋服を震えさせながら、体は微動もさせずに静かに言った。
その言動と態度に久茨は怒りを増し、自分を睨んでいる吉峰を、視線だけで殺せるくらいの鋭利な目付きで見据えた。
「これが、私の力の全てだとでも思っているのか。不遜は慎めと言った筈だ」
久茨は更に霊圧を増した。
久茨は今迄、人に五分の一以上の霊力をかけた事はなかったが、この時明らかに半分以上の霊気を放っていた。
吉峰は掌を畳に付き、座っている上体を支える。
「…さすが、稀代の霊力者って訳だ。そうやって、綏も縛り付けてんのかよ。部屋に閉じ込めて、自由を奪って。――――あいつが、どんな思いをしているか、あんた知らないだろ」

呼吸を乱しながら、それでも敵意を崩さない強い口調で言った。
久茨はそれを黙殺して、霊力を増し続ける。
「…さっさと、出て行けって事か。ああ、出てってやっるよこんな所。――――だけど、最後に一言っておく。綏に何かあったら、あんたを殺す。俺の力を全て使って」
そう言って吉峰は、勇ましい表情を久茨に向けた。
久茨はその態度に怒りを増し、蔑んで見下げる。
「貴様が全力を使った処で、私を殺すなど不可能だ」
「分かんねえだろ」
久茨の冷酷な声に物怖じせず、吉峰は気丈に答ええる。
久茨は吉峰のこの態度に昔から苛立たされていた。
父先帝ですら自分に怯えていたのに対し、吉峰は唯一自分に恐怖を抱かない者だった。
久茨は品の無い振る舞いよりも、その事が一番憎かった。
「良かろう。貴様が楯突いてきたときは相手をしてやる。直に殺さず、四肢を?ぎ取り、死を懇願する程にな」
「ああ。綏に何かあったら、俺もあんたをそうしてやるよ」
吉峰は挑発的に唇の端を吊り上げて言うと、久茨を一瞥してから、自分の体に結界を張り、優雅に立ち上がって退室して行った。
久茨はその光景を終始殺意の目で見届けた。
久茨は吉峰が去った後も苛立ちが治まらず、暫く人が近寄れない程の霊力を放出し続け、怒りを煮え滾らせながら、肘掛けていた脇息の端を掌で砕いた。

三十五

その後久茨は、葛木や他の側近を呼び出す事無く、黙って寿弘院を離れ、後宮に戻った。

苛立ちも、吉峰に対する怒りも全て拭い去る為に。

夕刻の薄暗い光の中、閑静な長い檜の廊下を久茨は苛立ちながら渡って、自室に急いだ。

大鳳殿に辿り着くまでに、多くの女官に擦れ違った。

女官達は寿弘院にいる筈の久茨の姿に度肝を抜かれていたが、久茨の形相に怯え話し掛けてくる者は一人もいなかった。

久茨が大鳳殿に辿り着くと汐路が待っていた。

「汐路、自室に戻る。酒と夕餉の用意を」

久茨は跪いている汐路を一瞥した。

「畏まりました」

汐路はいつも通りの言葉を返した。

久茨は後宮の度肝を抜かれていた女官と違う、汐路の何の変わりもない態度を見て、この者は自分が餐宴には欠席すると読んでいたのだと推測した。

「綏は食べたか」

「申の刻（午後四時頃）に少し粥を食されました」

「そうか」

汐路の言葉に久茨は少し安心した。

一昨日無理やり食べさせた時の様子から、これからは食べるようになるだろうと思っていたが、昨日は食事を与える時間が惜しく、再び回復術で過ごさせた為、また食べなくなっているのではないかと危惧していたのだ。

「綏さんにも軽食と菓子を持って参りましょう。女官の話では僅かしか食してないと伺っておりますので」

久茨が安堵して胸を撫で下ろしていると、汐路が気を利かせて言

葉を繋げた。
「ああ」
久茨はそう言って汐路をその場に残し、自分は部屋に戻った。

部屋に近づくと女の笑い声が微かに聞こえたが、直に止んだ。
久茨の霊気に気がついたようだ。
久茨が開いている扉の中を眺めると、部屋にはもう蝋台に火が灯され、綏の見張り役の三人の女官が此方を向き平伏していた。
久茨は三人に目をやる事なく、ただ一点を見据えた。
蛍衣の膝を枕に寝転がっている綏を。
綏の体には寝具を掛けられ、顔を蛍衣の方を向けたまま微動すらしない。
「寝ているのか」
久茨は綏を見据えながら静かに言った。
すると蛍衣が、綏を膝枕している為、軽くだけ下げていた体を起こし、久茨に面を上げた。
「はい。つい先刻眠られました。うとうとされ出した時に、寝所に戻るよう進めたのですが、此処がいいと申されましたので、致し方なく私の膝でお休み頂きました」
蛍衣は女官らしい事務口調で語る。
久茨は綏を見据えながら、昨日から今朝にかけて無理をさせ過ぎた事を思い出した。
綏はまだ十三なのだ。
子供と言っていい。
睡眠もとらせず、終始抱き続けたのだから体に堪えて当然か。
そんな事を考えながら、久茨は綏に歩み寄った。
「後は私が面倒を見る。お前達はもう下がれ」
そう言って久茨は蛍衣の膝から綏を抱き上げた。

もう以前から知っている事だが、綏の体は驚くほど軽い。
久茨は綏を柔らかく抱き包み、そのあどけない寝顔を眺めた。
久茨が綏を眺めていると、膝が自由になった蛍衣は立ち上がり、久茨の腕の中に納まっている綏を同じように眺める。
その表情は柔らかかった。
蛍衣は数秒の間眺めた後、未だ平伏している二人を無言で促し、退室して行った。
久茨は三人が去った後、腰を下ろし、抱いたままの状態で綏を膝の上に乗せ、片腕で背中を支えながら、自由になった手で頬や唇に触れる。
そして唇を重ねようとした時、綏が身動きした。
目を覚ましたのかと思い一瞬動きを止め、目を開いて綏の顔を覗き込んだ。
綏の瞼は閉じられていた。
しかし悪夢でもみているかのように、表情は哀しみを映し出していた。
そして涙を流す。
（母親の夢でも見ているのか。否、私の夢か）
久茨は無感情に涙の意味を考えながら、その涙を指で拭い唇を重ねた。
触れ合うだけの口付けをした後、久茨は綏をその場に寝かせ立ち上がり、漆塗りの飾り　棚から、同じく漆塗りの箱型の煙管盆を取り出した。
そして再び綏を抱かかえて座り、煙管に草を詰めて火をつけ、二、三度吹かしてから、肺に深く吸い込んだ。
久茨は滅多に煙管を吸うことはなかったが、何故か今は吸いたい気分だった。
吉峰と綏の涙。
怒りと虚しさ。
そして綏に恐怖を植え付けた自分自身への憤り。

だが久茨にはどうする事も出来なかった。
皇太子の身分である吉峰を早々に殺すことも。
綏に触れずに過ごすことも。
暫く何も考えずに煙を吹かしていると、辺りは闇に包まれ、部屋は蝋燭の灯りのみとなっていた。
「失礼致します」
女のその声で、久茨は開いている扉に目をやった。
そこには汐路と五人の膳司の女官が立っており、いくつもの膳を持っていた。
久茨は頷いて入室の許可を出す。
膳司の女官は、素早く久茨の周りに酒や料理の乗った膳を並べると、一礼して下がって行った。
「白帝が煙管など珍しゅう御座いますな」
膳司の女官が去った後、汐路が別段感情の篭らない声で、久茨に話し掛けてきた。
「たまにはな」
久茨も同じように感情の篭らない返事を返す。
「さようで御座いますか。———綏さん、寝てしまわれたのですね。寝所にお運び致しましょうか？」
汐路は久茨に向けていた視線を、腕の中で眠っている綏に移した。
「否、このままでいい。酒を」
汐路は軽く頷いた後、直に酒の盛られた膳を久茨の前に引き寄せ、徳利（とっくり）を優雅に持って盃に透明な液体を注いだ。
久茨は煙管を煙管盆に置き、盃を手にとり酒を口に注ぐ。
「先程、葛木大将他、数名の者が大鳳殿にお見えになられました。用件はないようでしたので、お引取りして頂いたのですが、宜しゅう御座いましたか？」
汐路の静かな言葉で、久茨は黙って寿弘院を離れた事を思い出した。
大方所在の確認に来たのだろう。

「ああ」
久茨は今更葛木達に会うのも煩わしかったので、汐路の対応に感謝した。
「若い女官にお酌させましょうか？」
汐路は徳利を品良く持ったまま、盃を口に当てている久茨に尋ねる。
「いらぬ。煩わしいだけだ」
久茨はそう言って綏を眺めた。
「良く眠っていらっしゃいますな」
汐路も綏に目を向ける。
「ああ」
久茨は綏から視線を離し、再び酒を飲んだ。
「用意した菓子が無駄になってしまいましたね。選べるようにと沢山お持ちしましたのに」
久茨はその言葉で、鮮やかな羊羹や餅等が、一面に敷き詰められた一つの膳を見た。
「盛りすぎだろう。これは菓子に目がない。また腹を壊す」
久茨は眉を潜めながら昔を思い出す。
昔まだ久茨が綏を抱く以前、兄と妹として共に食事を摂っていた頃の事を。
久茨は昔から甘い物が嫌いで、食事にも菓子の類を外すよう膳司に命じていた。
その為、久茨と同じ膳を出されていた綏も、自然と菓子を食べる機会がなく、綏も食べたいと言わなかったので、久茨は自然に自分と同じように嫌いなのだと思い、それを進める事をしなかった。
そのまま半年以上過ぎた三月の雛祭りの日、家族や大人の知人が居ない綏の為に、久茨が雛祭りを祝った。
綏は菓子が嫌いだと思ったが、形式上菓子を盆に盛っていた。
しかしそれを見た綏は、目を輝かせて喜び、次々と菓子を食べ出したのだ。

その喜びようは、有名な職人に作らせた高価な雛人形を見た時以上で、久茨が呆気に取られるほどだ。
久茨はその姿を見て、綏は自分に遠慮して、菓子を好きなの言い出せなかったのだと悟った。
そして遠慮している事に、気づいてやれなかった事が悔やまれた。
その為久茨は、綏に気を遣わせないよう、自分は離れて酒を飲んだ。
しかし小一刻した後、月を見ながら酒を堪能していた久茨の耳に、泣き声が聞こえてきたのだ。
久茨はその声に驚き、綏に駆け寄ると、腹を抱えて倒れていた。
そして盆を見ると、山ほど盛られていた菓子が半分以上消えている。
それは誰が見ても食べ過ぎだった。
結局その晩、綏は激しい腹痛と嘔吐を繰り返し、その間久茨は嘔吐を繰り返す綏の背中を擦り続ける羽目になったのだ。
「あのような事はもう御免だ」
久茨はあの晩を思い出し、小さく溜息を吐いた。
「確か、雛祭りの日で御座いましたな。綏さんの看病は私がすると申し出ましたのに、久茨様はご自分でなさると申されて」
汐路はくすくす笑いながら微笑んだ。
「あのように苦しんでいては寝るに寝られまい」
「あの時は本当に驚かされました。久茨様が嘔吐を繰り返す者の背を擦って差し上げるなんて。私の人生でも、十番以内に入る衝撃的な出来事で御座いました」
「大げさな事を」
久茨は汐路の楽しそうな声を他所に、無表情に酒を飲みながら落ち着いた口調で返した。
この時久茨は、汐路が自分の事を白帝ではなく、名で呼んでいる事に気がついた。
汐路は久茨が即位してから、一度も名で呼んだ事は無い。

その事を気に留めた事はないし、即位した今、そう呼ばれるのが当たり前だと思っていた。
しかし昔のように名で呼ばれるのも悪くないと思った。
「つい四、五年前の事ですのに、とても懐かしゅう御座いますな。ご存知ですか？あの後綏さん、久茨様に嫌われたのではないかと、随分落ち込んでいらしたのですよ。目に涙を溜めながら、ずっと柱や木の陰に隠れて久茨様を伺っておられました」
「ああ」
久茨は綏の背中を支えたまま、膳に箸を伸ばし、素っ気無く答えた。
あの時、綏が自分を見つめている事など直に気が付いた。
しかしその姿が可愛くて、いじらしくて、もっと見ていたいと思い声を掛けなかった。
だが結局、三、四日経っても近づいて来る気配のない綏に痺れを切らせて、自から手招きしたのだが。
「やはりご存知でしたか」
汐路はそう言いながら、久茨が膳に置いた空の盃に酒を注いだ。
久茨はそれを取って口に注ぐ。
「これの気配など直に分かる」
久茨が静かに言うと、汐路は目尻に皺を作って柔らかく微笑んだ。
久茨はそんな汐路を横目で一瞥した後、再び膳に腕を伸ばす。
「……ん」
その時、久茨の身動きと共に、綏の呻き声が微かに漏れた。
久茨と汐路は綏の顔を覗きこむ。
綏は瞼を震わせながら徐々に開き、ゆっくりと紫の瞳を現した。
「起こしたか」
久茨は覚醒しきれていない虚ろな瞳を見つめる。
綏の揺れる瞳は徐々に焦点を定め、そして久茨の紺青の瞳とぶつかった。
「ひ、久茨様…」

綏は体を竦ませ、怯えた声を漏らす。
だが逃げる気配は現さない。
綏はもう随分前から、久茨に怯えながらも抵抗することをしない。
久茨がそう仕込んだのだ。
逃げようとすれば殴り、抵抗するなら押さえつけ、更に甚振った。
自分の思い通りになった今の綏に、久茨は満足している。
だが同時に哀しみもあった。
以前の話をしていた今は、尚更強く感じられる。
自分を兄と慕っていた、自由で表情豊かな綏を懐かしく思う。
だがもうどうしようもない。
綏に恐怖を植え付け、そう育てたのは他ならぬ自分自身なのだから。
それにもし、昔に戻りやり直せたとしても、結果は今と同じだろう。
自分はまた綏を手籠めにする。
誰にも触れさせたくないその体を、自分だけの物にして、逃さないよう雁字搦(がんじがら)めにする。
成るべくして成った結果だ。
哀しみなど必要ない。
「汐路、下がれ」
久茨は綏の怯える瞳を見つめながら、汐路に冷酷に命ずる。
綏は久茨から顔を反らし、汐路に懇願の表情を向ける。
汐路は少し黙って久茨と綏を眺めたが、直に徳利を膳に戻し、黙礼してから退室した。
襖が閉まり二人きりになると、綏は久茨に視線を戻し、目に涙を浮かべ出す。
久茨はそれを黙殺して、座ったまま綏の両脇を掴んで体を持ち上げ、自分と向かい合わせに膝に馬乗りさせた。
綏は体を震わせながら、驚愕の瞳で久茨を見上げる。
だが抵抗はない。

怯えながら久茨を見上げるだけだ。
久茨は物足りなさを感じながら、怯える綏を無表情に見下ろす。
背の低い綏は久茨の膝に跨がって尚、その顔の位置は久茨の顔の位置より低い。
久茨が綏を見下ろしていると、綏は背を反らして、密着する体を少しででも離そうとしだした。
久茨は逃げる背中に両腕を回し上体を密着させる。
そして片方の腕を頭に回し、顔を上向かせて、久茨も顔を下ろし互いを近づける。
「お前から口付けを」
久茨の静かな言葉に綏の表情が恐怖に歪み、固定されて動かない頭を、横に振ろうともがく。
抵抗する綏に久茨は苛立ち、恐怖に染まっている瞳を冷酷に見つめる。
綏は危険を察知したのか抵抗しなくなり、そして体を震わせながら背を伸ばし、動いているのか分からない程の動作で、久茨の唇に唇を近づけてきた。
寸分の距離まで近づくと、意を決したように瞼を伏せて震える唇を重ねてくる。
綏の行動に満足した久茨も目を閉じる。
目を閉じた久茨の唇に、生暖かい湿ったものが当てられた。
久茨はその事に驚いた。
口付けを命じたものの、綏がそこまでしてくるとは思っていなかったのだ。
その態度から、唇を重ねて直に引き下がると思っていた。
（これは舌を絡ませているものだけが、口付けだと思っているのか？）
確かに、何の知識もない内から荒々しく抱いて、その後も監禁して、外部との接触を閉ざしているのだから、毎夜していることだけを口付けと認識していても妙ではないが。

久茨は疑問をうかべつつ、綏の舌が侵入出来やすいように唇を開く。
久茨が隙間を作った事で、唇に触れたまま留まっていた小さな舌が、怖々と入ってくる。
震えながら侵入してきた舌は、久茨の舌に触れては瞬く内に引っ込めて、また怖々と近づけてくる。
その拙い動作がいじらしくて久茨を虜にした。
暫く綏の鈍い動きに任せていたが、次第に焦らされ、自身も舌を動かし綏の口腔に侵入させる。
綏は驚いたように口腔から舌を引き抜き、体を身動きさせ、唇を離そうともがき出す。
久茨は動く体を両腕で固定し、逃げ惑う舌を捕らえ、濃厚に口腔を味わっていく。
柔らかい小さな舌と、絡みあう温かい粘膜を堪能する内に、久茨は欲望の塊に火が灯され、膝に馬乗りさせている綏の後ろから荒々しく夜着を掻き分け、秘所に掌を滑らした。
「……んん」
塞いでいる唇から篭った声が漏れた。
久茨は怯える綏を宥めるように優しく舌を絡め捕った。
口腔を愛撫しながら、秘所の中心をなぞり、芯を刺激しする。
荒々しく刺激を繰り返していると綏の震えている下半身が身動ぎし、久茨の肩を弱々しく掴んだ。
徐々に潤いの出てきた道に指を挿入し、自身の塊を埋められるように潤いを調わせる。
「……んん、ん」
塞いでいる綏の口から声が漏れ、腰を浮かし逃げようとした。
しかし久茨が体を固定しているので、微かに浮いただけだ。
久茨はそのまま指を滑らし、口腔を愛撫する。
そして、道が十分潤い指に吸い付いてきたのを確認した後、体を密着させたまま、畳の上に柔らかく押し倒して、舌と指を抜き取っ

た。
「泣くな。昨日のようにはしない」
見下ろした綏の顔は歪み、幾筋もの涙の軌跡があった。
久茨は指で涙を拭い、閉じられた瞼に口付けを落としながら、ゆっくりと夜着を脱がせていく。
そしてその夜、久茨は長い時間を掛けて優しく抱いた。

三十六

「綏様。何呆けていらっしゃるの？」
綏が久茨の部屋の前の高欄（こうらん）に肘掛けていると、部屋の中から小柏が話し掛けてきた。
綏が小柏の方に目をやると、小柏は蛍衣と早苗の三人でお茶を飲んでいる。
綏が抜け出した騒動から、どうやら三人は、交代制を取らずに共同で見張るように決めたらしい。
逃げ出す気などないのに、こうまで心配されると、申し訳なさに苛まれる。
三人は中臈の女官の身分にあって、家柄も霊力も高い。
だから霊力のない綏など、三人の内一人でも居れば、簡単にお押さえ付ける事が出来るのだ。
それなのにこうして、楽しみのない自分の側に居させる事が、綏には酷く心苦しかった。
「庭を見ているの」
「そう。飽きたら此方へいらっしゃいな。温かいお茶が冷めてしまいますよ」
小柏は急須を眺めながら綏に言う。
「分かった」
綏は小柏を見つめた後、再び見慣れた庭園を眺める。
久茨の部屋から見える庭は、松やその他の木々が多く少し寂しい。
だがその中に垣間見られる、利休梅（りきゅうばい）や七竈（ななかまど）の白い花々が、涼やかで趣がある。
綏は青々と多い茂る木々は殆ど見ず、微かに見える花々を見ていた。
そして体を休める。
昨夜の久茨は一昨日ほど執拗ではなく、下腹部に痛みも与えてこ

なかったが、それでも久茨を受け止めるのは、まだ十三の綏には酷く負担が大きい。
一昨日の行為で傷だらけになっている道には尚更無理があった。
綏は節々の痛みと下腹部の痛みを覚えながら、体を寛げる。
そして吉峰の事も頭から消し去って、心を平穏にした。
そうする事でしか、綏は安らぐ方法が分からない。
もうこれ以上傷付きたくなかった。
綏が頭を真っ白にしていると、突然「わッ」と背中を叩かれた。
思わず綏の心臓は早鐘を打つ。
恐る恐る後ろを振り返ると、そこには喜色満面の蛍衣の姿があった。
「おやつの時間ですよ。直に早苗が持って来ますから、お部屋に戻りましょう」
蛍衣は切れ長な奥二重の目を細めながら、綏に掌を差し出す。
「――わ、分かった」
未だに心臓の動きが激しい綏は、声を上擦らせながら答えて、蛍衣の掌を掴み、引っ張り上げられた。
「綏様って本当に軽う御座いますね。昨日膝枕させて頂いた時から感じておりました」
綏を引っ張り上げた蛍衣は、そのまま抱っこしそうな勢いで、綏の背を包みながら、部屋に誘導する。
誘導された部屋には、小柏だけが優雅にお茶を飲みながら座していた。
最年少の早苗は、どうやら二人の使いっ走りをさせられたらしい。
綏は蛍衣の誘導で小柏の隣に座らされた。
蛍衣は綏と小柏に向かい合って腰を下ろす。
そして二人でお喋りを始めた。
「今日の小緒（さお）様の挨拶回り、延喜殿（えんきでん）からだそうよ。また災難な所からよね。気の毒な事」
蛍衣は丸い漆の盆から湯飲み茶碗を手に持ち、小柏に目をやる。

「叶(かなえ)様の天下もこれで終わりだからね。相当殺気立っているでしょう。喧嘩になったらそれはそれで面白いけれど」
小柏は茶碗の中を覗きながら、どうでもいい、と言った感じだ。
綏はその名を聞いて、突如叶の事を思い出した。
後宮の詳しい事は知らないが、香生から久茨が三人の女御を娶った事は聞いていた。
その中で一番后妃に近いとされている人物が、叶様だと言う事も。
当時綏は、久茨に妻が出来た事を喜んでいた。
もう自分に飽きたのだと。
だが一向に解放される気配がなかったので、その方々の事を考える事がなくなり、記憶の片隅に追いやっていたのだ。
「喧嘩ねえ。確かに叶様ならやりかねないわね。この前の歌会でもまた、紀子(のりこ)様や桜良(さくら)様の側女官を散々詰ったらしいわよ。出来た歌が下手だとか何とか言って、その場から退場させたって。でもその場にいた女官の話では、そこまで下手ではなかったって言っていたわ。お気の毒に」
蛍衣は言葉とは裏腹に、余り同情していないような声質だ。
「宴に出席する方が馬鹿なのよ。そんなの毎度のことじゃない。紀子様も桜良様も遠慮しすぎよ。家柄は劣っていても同じ女御の身分なのだから、もっと堂々としてればいいのに」
「確かにねえ。でも紀子様は物静かな方だし、桜良様に至っては完全に叶様に怯えていられるからねえ。ここはやはり皇太子妃の小緒様に、叶様の悪行をお諫めして頂かないと」
蛍衣はしみじみと溜息を吐く。
どうやら叶様とはすごく怖い方らしい。
綏は叶の事をそう判断した。
「でも、やはり綏様が一番ですよね。何と言っても白帝の唯一の御寵姫なのですから」
綏が俯いていると突如蛍衣が綏に話を振ってきた。
綏は目を丸める。

「陰の権力者とでも言うのですかね。このまま御子でも授かれば、一気に后妃に上りつめても可笑しくないですもの」
蛍衣は奥二重の目を柔らかく細め、綏に微笑みかける。
「白帝、他の女君の下に、お渡りにならないですからね。唯一の御子の生母となれば、后妃も夢ではないけれど、やはり貴族連中が五月蝿いのではないの？」
小柏は横目で綏を眺める。
「白帝のあの御寵愛ぶりですもの。御子でも授かれば、直にその御尽力でそれなりの身分に立ち上げられるでしょう」
蛍衣は綏を眺めながら、ねえ、と同意を求める風に目を輝かす。
綏は渋面した。
自分には子供は産めないし、それ以前に寵など貰っていないと。
久茨様の正妃になどなりたくないし、久茨様もそれを望んでいない。
綏は顔をしかめながら、二人の視線から逃げるように俯ける。
二人は不思議そうに綏を眺めてから、また二人で他愛無いお喋りを始めた。
最近まで一言も発さず、やっと話し出したと言っても一言二言しか話さない綏が、今又　黙って俯いている姿に、余り疑問を持たなかったようだ。
俯いている綏の耳に聞こえてきた会話は、終始小緒の事だった。
吉峰が慈しむといった、正妃の話だった。

三十六（後書き）

好き勝手書きすぎて最後どう終わればいいのか分からん…。

プロットも何もたてなかったからな…。

本当好き勝手書き散らかしました。

てか書いているうちに吉峰が好きに…（照）。

吉峰とくっつけようかな？

悩みどころです。

三十七

「これから見まえるのはとても貴いお方です。絶対に粗相のないように」
「しつこいなぁ、もう何回も聞いて耳胼胝。だいたい私は仕事できてんだ。お客相手に粗相なんかするか。あんたに言われるまでもないよ」
「そんな汚い言葉遣いでは全くもって説得力に欠けますわ。いいですの？」
「はいはい」
「んまぁ！　そのやる気のない返事は何です！」
久茨の部屋の外から明るい言い争いの声が響いてきた。
声の主は早苗と、少し嗄れた十代くらいの少女の声だ。
部屋の中に居る綏と小柏、蛍衣の三人は揃って開いている襖の外を眺める。
「何でしょう。はしたない」
蛍衣は眉間に皺を寄せながら、怪訝そうな口調で言う。
蛍衣の声と同時に、開いた襖から二人の姿が現れて、その場に跪いた。
一人は艶やかな曙色の打掛を纏った早苗だったが、もう一人は後宮の女官にしては質素な樺茶の小袖を着た見知らぬ少女だ。
「早苗、その者は？」
跪いている早苗に蛍衣が不機嫌な声で問い掛ける。
「この者は、今日の煎菓の地元の者でして、是非にご説明に上がりたいと申しまして」
早苗は蛍衣の声に怯えたように、自分は悪くない、と訴えるかのように言う。
「そう。まあ良いわ。それを運びなさい」
蛍衣はそういって、早苗と少女が持ってきた菓子が盛ってある二

つの膳を眺めた。
「はい！」
早苗は明るく返事をして膳を持ち上げ、隣にいる少女に自分と同じようにするよう、顎を使って行動を促す。
少女は煩わしそうに早苗を見上げた後、渋々といった動作で早苗の後に続く。
部屋に入ってきた早苗と少女は、綏と小柏、蛍衣の真ん中に、撫子を模った桜色の饅頭が四つ盛られている膳と、急須や湯飲み茶碗の乗せられた膳を置いた。
そして早苗は蛍衣の隣に座して、少女に視線を向けた。
「お前、説明を」
早苗は顎を上げて、見下すような仕草で跪いている少女に言葉を促す。
少女は一旦早苗を憎々しげに見た後、涼しい表情をして綏と三人を眺めた。
少女は十五、六くらいで、黒髪を頭の天辺に一つ纏めにしている。化粧っ気のない顔は、そばかすが頬の所々に散っていて、目は切れ長の一重で、唇も同じように細い。
どこから見ても華やかな宮仕えの女官ではなく、田舎の勝気な少女と言った出で立ちだ。
綏がじっくり少女を観察していると、自然に目が合っていまった。
気まずいと思い、綏は慌てて顔を俯かせようとする。
「――――…綏ちゃん？」
少女の嗄（しゃが）れた声が綏の名を呼んだ。
綏ちゃん？
綏は名前を呼ばれたことに驚いて再び少女を見つめる。
「やっぱり綏ちゃんだ。あたいだよ。楽子（らくこ）だよ」
その名を聞いて綏は目を丸めた。
「……楽（らく）、ちゃん？」
少女を見つめながら、綏は自然に声が漏れる。

少女は呆然とする綏に、表情を輝かせながら歩み寄り、綏の両腕を荒々しく掴んだ。
「久しぶり！　一瞬誰か分かんなかったよ！」
楽子は驚喜の声で、呆然としている綏の腕を掴んだまま、興奮した鼻息を漏らす。
「お前！　綏様になんたるご無礼！　その汚い掌を離しなさい！」
突如、蛍衣の叱責の叫びが部屋に木霊する。
綏と楽子は同時に、憤怒の形相の蛍衣を眺めた。
「早く離れなさい！！」
そう言いながら蛍衣は立ち上がり、綏の腕を掴んでいる楽子の手首を捕り引き離そうとした。
その力は細身の蛍衣からは想像出来ない程強力だ。
「痛え！」
楽子の苦痛の声が漏れる。
「なら早くお離し！！」
蛍衣の憎悪に満ちた声が楽子を襲った時。
「蛍衣止めて！」
綏の咽から悲鳴が漏れた。
綏の意識より先に。
蛍衣は驚いたように綏を見下ろす。
「蛍衣、彼女は私の友達です。だから掌を離して上げて」
綏は懇願するように蛍衣を上目使いで眺める。
蛍衣は驚いたまま綏を眺めながらも、楽子の手首を離した。
綏と楽子の様子に、三人共氷憑いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7291o/

贈り人形

2011年12月12日00時47分発行